Die Geschlechtskälte der Frau

Ihr Wesen und ihre Behandlung

von

Dr. Eduard Hitschmann und Dr. Edmund Bergler

übersetzt von

Kenji Ohtski und Rikitaro Takamizu

Die Geschlechtskälte der Frau

Ihr Wesen und ihre Behandlung

von

Dr. Eduard Hitschmann und Dr. Edmund Bergler

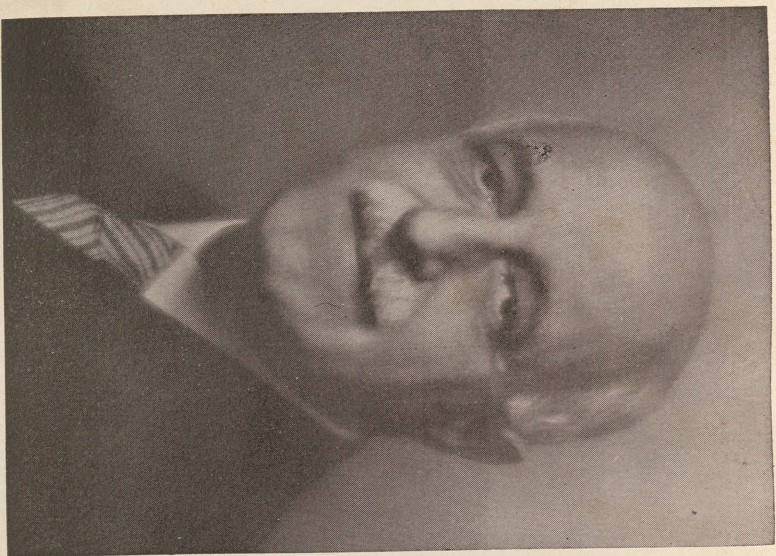
冷感症とその治療

ヒッチマン博士・ベルグラー博士・共著

大槻憲二・高水力太郎・共譯

昭和十四年五月再版

東京精神分析學研究所出版部

ヒッチマン博士

ベルグラー博士

譯者序文

現下に於ける我が國は文字通り「生めよ、殖えよ、地に滿てよ」をスローガンとして進まなければならない狀勢にある。然るに統計は出產率の低下を報告しつゝあつて、識者はその不安におびやかされてゐる。その原因は種々數へ上げることが出來るであらうが、その重大な一つは何れの國の場合に於いても常に認められる通り、文明の進展と共に婦人の冷感症化と男子の不能症化とが增進するにあることは何としても否認することの出來ないところであらう。現に多くの婦人科醫たちは戰慄すべき事實を報告しつゝある。これをそのまゝ放置することは彼女等の不幸であるばかりでなく、世の夫たちの苦惱であると共に、社會秩序の紊亂を來す一大遠因となる。而もその病因は肉體にあらず精神にある。精神分析の研究に依つて始めてこの病症の本質と療法とは闡明せられ、人々はこゝに樂觀的な將來を展望することが出來るやうになつた。本書は殆ど全部雜誌『精神分析』誌上に連載せられて絕大の反響を呼び、その一讀に依つて救はれたと云ふ人も多數に上つてゐる。こゝにこの度の單行本化を見るに至つたのは、實に讀者諸氏の切實なる要求に從つたに過ぎないのである。

原著にも原著者等の序文が附いてゐたが、右の譯者序文の中にその意も旣に含まれてある事故、敢てそれを別に譯すことはしなかつた。原著及び原著者の原名は表紙及び扉に書いてある通りであるから、こゝには更めて紹介はしない。たゞその發行所はキインの「アルス・メディシ」、發行年は一九三四年であることは報告しておかねばならない。譯者はニウヨークのワイル氏（Polly Leeds Weil）の英譯書（一九三六年）を參考にすることが出來た。これは矢部八重吉氏の御好意に負ふもので、我等の深く感謝するところである。

附錄『處女性の問題』は嘗てベルグラー氏が我等の雜誌『精神分析』のために特別寄稿せられたもので、昭和十三年五月號に揭げられたが、關係題目のもの故こゝに收載した次第である。（昭和十四年四月）

初版は直ちに品切となり、こゝに再版を公にするに當り當局の注意により數ヶ所の削除を見るに至つたことは讀者諸賢のためにはお氣の毒であるが、蓋し已むを得ざるところであるかも知れない。併し削除個所は部分的で、頁數に狂ひを生ずるほどでもなく、內容の理解に何ら支障を來たさぬ程度である。從來この種の著譯書は總て發禁せられる慣例になつてをつたに拘らず本書のみ初めて公刊を許されたるは、本書の內容の優秀にして著譯者の態度の嚴正に科學的なるがためであらうか。我等は讀者諸賢と共に當局のこの寬宏なる處置を萬謝せねばならぬ。

（再版に當りて、六月一日）

― 目　次 ―

口繪　ヒッチマン博士とベルグラー博士
第一章―緒論　女性の對男性心理…………………………（三）
第二章―一、女子性感の發達……………………………（一一）
　　　　二、女子性生活の特質…………………………（三三）
第三章―一、冷感症の概念、症候論並びに程度………（三七）
　　　　二、冷感症に特殊なる諸形式……………………（三一）
第四章―冷感症の分析治療二例…………………………（六四）
第五章―冷感症の豫防及び處置…………………………（八二）
附　錄　處女性の問題……………………………………（一―一七）
　　　　Zum Problem der Virginität………………………（一―一五）

冷感症とその治療

ヒッチマン及ベルグラー兩博士共著
大槻憲二・高水力太郎共譯

冷感症とその治療

第一章　序論

女性の對男性心理

女性と云ふものはその性滿足に於いて多少の差控へをするものであると云ふのが、公然の祕密となつてゐる。殊にその滿足への自然的要求を差控へさせるものは婦人に屢々あり勝ちな性的冷感症である。フロイドの推量に依れば、その原因は「攻擊慾の生物學的目的を果たすことが男性に委任せられてあつて、それに對する女性の應諸如何と云ふことゝは獨立的になつてゐると云ふ」點にあるとなつてゐる。

動物に就いて比較生理學的に研究して見ると、この事が確かめられる。ハムブルグの醫師エルカン（R, Elkan）は

或る近著の中で主張して曰く、雌の方に性的恍惚境があると云ふことは證明がつくにしても、それは動物界に於いては全く特殊な例外であると。雄がその精液を雌に注入する以前に、雌が性的行爲から逃げ出すことのないやうにと云ふ風に、自然は配慮してゐるのである。併しながらこの目的のために雌には動機として快感を與へず、雄の方に、雌がもし逃出さうとするならば、雌の動物を性的行爲の中へ引き摺り込むことの出來る力をその性器又は性器以外の部分に具へしめるのである。

このやうに、性器又は性器以外に强制的な組織を具へてゐることはあらゆる種族の雄に於いてあまねく證明せられ得ることであつて、それはエルカンが動物の多くの鬪に依つて證明を與へてゐる通りである。動物に四肢が生えてからは、强制的組織は退化して了つたか、或は消滅して了つた。たゞ例外（その例外が、この場合、一般的な證明となるのであるが）は、二種の動物（有骨魚類と白鳥と）である。これ等二種に於いては、雌の動物にもし心理感覺的反射（卽ち恍惚境）が與へられてゐなかつたならば性的行爲には入らないであらう。故に、これ等の場合に於いては、雌の恍惚境は目的觀的に理解せられ得るのである。でなければ、その恍惚境なるものは無駄なことになる。何となれば、雌は何も別に射出せねばならぬことはなく、而も雄の方から强制せられてゐるのであるから。このやうに雄の動物に於いてその性的態度は既に下等動物時代に於いて十分に確立せられてあるのだが、雌の方には、それが殆ど相當高等の動物に至るまで缺如してゐる。かう云ふ次第であるから、生物學的に雌の恍惚境の進化史的前階を發見することは不可能である。

このやうな基礎の不十分な、極端に悲觀的な生物學見地を精神分析學者として我々はそのまゝに受容れるわけには行かない。恍惚狀態（オルガスムス）は實際には「女の自然性」ではないのであらうか。恍惚境なるものはたゞ人間になつてから始めてその性交の價値を高めんとする結果として獲得せられた特性と見るべきであらうか。そこに一切の形態學的な根據がなく、一切の生理學的の必然性がなく、目的觀的に理解が出來ないからと云ふのでさう云へるであらうか。

今から三千年前のインドの戀愛教科書カーマスートラムに於いて、婦人の恍惚境が屢々只、男性の技巧的な方法に

依つてのみ齎らされてゐると云ふこと、原始人たちも刺戟を強める如き附加物をペニスに附することに依つてのみそれを果したと云ふこと、これに依つて見ると古もなほ今日の如く、西洋に於いても亦東洋に於けるが如く、十分にその感覺のある女もゐたではあらうが、冷感の女もゐたことが分るのである。

一般人よりも自由な考へを持ち、性的の力強く、その方の理解も十分にある男子と性的關係に入つて——或はまた處置法の場合で云ふならば、透徹した精神分析を受けて——それでもなほ不感であると云ふが如きは、稀なる例外である。かくの如きものは、體質的條件ある例外であり、そこに器質的要素があると、フロイドは云つてゐる。

性的冷感症の大部分の場合にして、結婚の間に、或は第二の夫に依つて、或は子供の生れることに依つて、或は心理的處置法に依つて、治癒せられ得るものは、その原因がたゞ心理的に條件づけられてゐるのだと云ふことが分るのである。

自慰、と云つても大抵はクリトリスに於ける自慰に依つて恍惚境に入るのは、既に女兒に於いて極めて一般的に見られることとである。また夜中に於いて粘液の射出を見ることは婦人に於いて、否處女に於いてさへも、あることである。冷感症の心理的契機、例へばリビドー發展の成り行きから起るもの、女の男性コムプレクス的願望から起るもの、發達過程中に婦人の主要な性的帶域が交替することから起るもの、同性愛的傾向及び變態的傾向から起るもの、不安感情、罪惡感情、嫌惡感情から起るもの、最後に相手たる男性の不能のために起るものなどいろ〳〵であるが、これ等は何れも細かく取調べて見なければならないものである。

エルカンの研究の結果を紹介したがあのやうな風に考へて見ると、女には性的恍惚と云ふものが考へられないばかりでなく、性的要求なるものが抑々あるかどうかと云ふことが考へられなくなる。が、男に於ける如く女にも生殖腺なるものがあつて、それに依つて彼女の有機體は不斷に色慾的亢奮を與へられてゐるのである。

併し女にはその全生涯を擧げて、その若い頃に受けた教育（性慾の拒否）を貫徹すること——これは男子には殆ど不可能である——に成功するものが澤山にあると云ふことを我々は知つてゐる。

女のリビドー發展の過程を考へるとこのことは一層よく說明がつくのであるが、それは後に譲るとして、これまでは冷感症的な婦人にしてその性的禁制を失ひ得る可能性を、それを精神分析的處置に依つて克服し得る可能性を、利用したものは甚だ少なかつたのである。性的冷感症が治るのだと云ふこと（それを知らせることが吾人の仕事でもあるのだが）が一般に知られた曉には、治療に努めるやうになるのは名譽心の高い女、夫を羨望してゐる女、或は失望してゐる夫から處置を受けよと勸められた妻ばかりではないであらう。我々の母親やその祖先の時代には男女兩性間の性的連絡をつけると云ふやうなことは殆ど考へられてゐなかつたのであるが、未來は多分さう云ふ傾向に進んで行くであらうと思はれる。

婦人の性的冷感症を心理學的に辿つて見ると云ふことは、まだ十分になし遂げられてはゐない。不感症的な妻の劣等感、夫がそのために彼女を低く扱ふこと、これ等二つのために結婚生活の間、妻は不自由な心持、依屬的な心持で生きてゐることになるであらう。「寺院の中で沈黙を守る」ことは殊に女らしいことであるが、これは性的なことには關係なく云はれてゐるのである。氣の毒な妻たちは、自分の性感が十分に誘導せられ發達してゐないために、夫が相對的に不能になつてゐるのだと云ふことを知らない場合が如何にも屢々である。夫はまた夫で、自分が不能であることを十分に意識してゐない場合がある。不能の夫は不感の妻の秘密をあまり人には洩らさない。それは只、彼にとつて不愉快なだけである。然るにそれに反し、その結婚以前に他の女に依つて十分に性的滿足を敎へられてゐる男は、容易に不忠誠になり勝ちであり、性的知識のある、冷感ならぬ女に就いて古き快樂を求めるやうになる。離婚、別居の話は屢々兩方から持出される。不感症の妻は得てして寂しさうな、見捨てられたやうな、欺かれたやうな、神經症的な、憂欝な、つまり病的な妻になり勝ちなのである。

ドレースデンの婦人科醫ケーラー教授（Prof. Kohrer）はその好著『不姙症の原因及び取扱法』（一九二二年）の中で、婦人の性生活の障害、殊に冷感を論じてゐる。教授の主張するところに依ると、幾月幾年もの間オルガスムスを經驗しないでゐるとその結果は甚だ厄介なこと丶なり、解剖的にも病理的な變革を來たし、婦人特有の骨盤の機構に

症候を生じ、神經は異常となり、遂には姙娠の困難にまで導いて行くと云ふ。ケーラーはこのやうに性生活の障害を來たしてゐる患者の一覽表を作製してゐる。ケーラーの云ふところによると彼等に對する診斷と取扱法とは大抵の場合誤つてゐるのであるが、それは何故であるかと云ふに、主として、過去の性問題の想起せられることを羞恥し、それを嫌惡するためであると云ふ。この練達堪能な婦人科專門醫家の與へた一覽表を見ると、次のやうな症狀が擧げられてゐる。——恥部の痒疹。挿入、摩擦、月經時などの苦痛。あらゆる種類の子宮の苦痛。腰部の苦痛。尿意の屢々なる催し。經血過少又は過多。子宮の肥大。筋腫の發生。* 痔疾など。

註* ケーラーの書中に説くところに依ると、結婚して不感症ならぬ婦人には子宮の筋腫は生じない。凡そ筋腫を病んでゐる婦人は永年の間性生活に障害のある者であることを證してゐると。

さう云ふ次第であるから、婦人科の手術を行つて見ても何の意義もなく、效果もないと云ふ場合が隨分に澤山にある。かくて胃神經症、心臟神經症、腸神經症、性的神經衰弱、ヒステリーなどが起きるのである。併しその原因は大抵誤つて診斷せられる。不安狀態又は憂鬱狀態が生ずる。衰弱、倦怠、無氣力、眩暈感情狀態、冷え込み、不眠、憔悴などがそれに伴ふ。始終頭痛がしたり、ポケットにピラミドンを入れたり、寢床に湯たんぽを入れたりするのは、性的に弱い者の型として誰知らぬものもない。このやうに結婚生活に於いて性的滿足を十分に味はない一聯の婦人が病氣になるものとすれば、婦人の冷感症と云ふことが大いに世人の注目を索いて然るべきものであることは當然であらう。事實上、婦人は破瓜せられた後に始めて、我々が性慾と呼ぶところのものを知るやうになるのが正常である。が、婦人の性生活と云ふ以上は、分娩や授乳までも包括させなければならない。

こゝで序ながら云つておきたいことは、民衆の間の多くのより原始的な婦人たちが元來不感症でありながら、さうして子供が次々と生れてもそれでもやはり不感症でありながら（性の喜びなるものを廣く知らないためもあつて）神經症にもならず、病氣にもならず、無事にその一生を終ると云ふのが少からずあると云ふことである。さう云ふ婦人も感傷愛的な、喜びの感情を行爲の間に味はないのではないが、併し自分では、性交なるものは男だけの喜ぶものだ

と云ふ風にきめてゐるのだ。「感傷愛的な、母親的な施與の氣持で性交に入り得る」女は幸だと、ギインの女流分析者ヘレーネ・ドイチ女史は云つてゐる。被虐性的な本能力を、性交の目的のために利用するのだからと云ふ理由である。もしそれでかゝる婦人たちが病氣にならないとすると、彼女等の「正常さ」（ともし云ひ得るならば）が問題となる。彼女等は常に無氣力と諦めの内に生きてゐるのではないのだらうか？　彼女等はその氣分の中に冷感症への素因をひろげてゐるのではないだらうか？　彼女はその行動に何かと禁制を覺えてゐるのではないだらうか？　何となく偏屈なのではないだらうか？　始終他人と衝突したりいら〳〵したりしてゐるのではないだらうか？

さう云ふ人々の型を擧げて見ると次のやうになる。――一、極端に潔癖で慾張り（肛門性格的）で、經濟のことにばかり氣を奪はれてゐる家庭婦人。二、あまりに男性的に昇華的で、精神的に落着きがなく、何かやれさうなことは何でも試みて見る名譽心の強い婦人。三、常に新しい男たちを身邊に引き寄せ、情交關係を作らうとしてゐる如き婦人。自分に滿足を與へてくれる男を徒らに待望しつゝ、冷感からして反對に媚態的になる婦人。四、神秘的傾向の性癖があつて、他方面に於ける優越を求めようとしてゐる婦人。五、屢々ある型で、この型の婦人はトランプ遊びや、着物のために大金を出すことや、一人旅することや、などに依つて自分の不滿足の償ひとしてゐる。六、被虐性的に惱んでゐる婦人、何もかも諦めてゐる婦人、かう云ふ型の人は結婚しても罪障感と苦惱を得るのみであることをよく知つてゐる。七、その夫を常に何とかかんとか批難してゐる婦人、世間へ出ると常に人の面前で亭主をこき下してゐる婦人、その理由の何たるかを自分でも知らないで。八、戀愛や結婚の不滿をその子供への溺愛に依つて償ひ、かくて子供を駄々つ子、神經症の子供にしてゐる婦人。九、引込思案の婦人で、沈默家で、罪障感で自己滿足してゐる。性交に關してもその調子である。十、「子供つぽい女」の型、その他。

偏屈、不平、嘘つき、家庭内に於ける乾いた雰圍氣、生活の喜びの缺けてゐること、人生觀が無意識的に片寄つてゐること、世間知らず、人間知らずであることなど。これ等の傾向のために彼女等は世間の人々から同情や同感を持たれない。もしかゝる傾向を脱する道があるならば、その道を進んで行かなければならない。その道を辿ることに依

つて婦人は完全に婦人となるのである。從つてそれがために結婚生活に入ることとの要求が生じて來、結婚生活の意義も高く見られることになる。婦人解放運動につきもの丶笑ふべき精神的腫物は消散してしまふ。と云つても、婦人の冷感症は婦人ばかりの責任ではなく、半ば男の弱さの責任でもあるので、體操の元祖フリードリヒ・ルドギヒ・ヤーン（F. L. Jahn）の云つたやうに、「男が男らしくあれば、女は自然女らしくなるのだ。」

より正確に云ふならば、右に擧げた諸々の型は或る部分、冷感症の結果としてのみは見られない、寧ろ男性コムプレクスの結果と見られねばならないのである。これ等の絶望感、劣等感、憎惡慾、復讐慾などに就いてはもつと精しく說かなければならないが、只今はその場合でない。たゞ婦人が自分の身體について不完全であるとの感情（去勢コムプレクス）を持つてゐるために、その不完全を補償しようとの努力をすると云ふことだけは明かに云つておかなければならない。婦人は外面を重視し飾り立て、想像上の肉體的缺陷の（卽ち自己醜惡視の）コムプレクスがゐゝと云ふことを云つておかなければならない。かう云ふコムプレクスあるために胸のあたりや何かを無暗に飾り立て、鼻の頭を白粉などで强調するやうになる。また男性器代償として種々なものを蒐集し、萬引癖、盜癖が起きることがある。これ等の特徴はこれを「補足コムプレクス」と名付けることが出來よう。

缺乏からして德を造らうとの試みに依り、男に反抗する婦人は別の途に進むやうになつた。例へばシカゴの女流ドクトル・アリス・ストクハムは『結婚改造』と題する一書を著し、その中で新しい形式の性交を提唱してゐる。卽ちその性交に於いてはオルガスムスには達しないで、性的結合を全然意志のまゝにしておくのである。このやうな方法を實行することに依つて、「超越的な生活からの幻想、精神的歡喜」がその間に生ずると云ふのである。

最後に附言しておきたいことは、婦人が戀愛關係に入ればオルガスムス的滿足はその自然的要素として當然求められなければならないであらう、さうしてたゞ精神的原因のみが禁制的に働いてゐる大部分の場合に對しては、婦人等をしてその性的正常能力を恢復せしめるには精神分析の力が有效であると云ふことである。（完）

譯者附記――原著者はこゝに冷感症を主題として取扱つてゐる古今の文豪たちを引用してゐるが、譯者は都合によりこれを割愛したが、併し全部を默殺するに忍びないから、その大要を紹介するならば、まづその擧げられてゐる詩人と詩とはオーヴィッドの『アルス・アマンデイ』、バルザックの『結婚の生理』、グスターフ・フレンセンの『聖地』、マルチン・モウリスの『未知の世界・戀愛』、マクシム・ゴルキーの『不幸なる戀愛』、テオドル・シトルムの『神秘』などである。右の內短い一二を譯するならば、バルザックは「男は女にとつて完全に力と偉大とを具へたものでなければならない、彼女を常に威壓するものでなければならない。」「結婚の將來は懸つてその初夜にあり。」と云ひ、フレンセンはこれまで子供のなかつた娘に向つて或る母親をしてから云はせてゐる。「あんたのお父さんは敏捷な、生々とした男でした。……併しあの人が私を腕にかゝえた時はゆつたりとしてまるで王樣のやうでした。」等々。

第二章　女子性感に就いて

本章は二節に分れ、内に術語が屡々そのまゝに用ゐられてゐるが、デリケートな問題を論ずるに際して無用の感情誘發を回避せんとした譯者の苦衷によるものであつて他意あるわけではない。專門語とは云へ、大抵初學の人々にも想像はつくであらうと思ふ。術語に就いては大槻著『精神分析概論』巻末語彙を參照せらるれば、十分の理解を持つて頂くことが出來るであらう。（譯者附記）

一、女子性感の發達

最近の研究を包含して、以下、精神分析學から見た女性感の發達を略叙して見よう。

フロイドの性感發達說は、人間の性感が思春期に於いて、宛も無から有を生ずるやうに、忽然として出現し來るものではないとするところから出發してゐる。

從來はたゞ漠然と常識的に（非心理學的に）「性感」又は「性慾」(Sexualität) と呼んでゐたものは、精神分析學的に精細に稱呼するならば、性器的性感 (Genitale Sexualität) である。この性器的性感はそれ以前の長き一聯の前階程の發展の結果である。これ等の前階程と云ふのは、口唇、肛門、尿道、男根の諸段階から成立つてゐて、これ等は何れも性的なものであるが、これが性的なることを理解し得るためには、まづ性感と性交とが同義語であるかの如き誤てる考へ方から解放せられることが必要である。如何にしてこのやうな誤てる考へ方が生ずるかと云ふに、それは成人の考へ方を、それとは全然性質の違つてゐる幼兒心理の中に投出するからである。

嬰兒の最初の性的顯現は、初めて乳房に吸付く時からである。食物攝取はこのやうに、この段階に於いては、性的な口唇快感と結びついてゐる。乳房はカロリーを供するのみならず、快感をも供するやうになる。するとやがて、嬰

兒は滿腹してゐるに拘らず、指しやぶり拳しやぶりをするやうになる。すると次にはその指しやぶり拳しやぶりから轉じて、身體のあちこちを撫でたり引張つたりするやうに手を動かす。遂には屢々性器を引張るやうになつて來る。そのやうにして自然、乳兒自慰と云ふ現象が起きざるを得なくなつて來る。

口唇快感と性感との間に關係があると云ふやうなことは甚だ突飛な主張のやうに人々は思ふかも知れないが、併しこれ等兩者の間の懸橋は、成人の性感に於いてもなほ接吻、吸莨、クニリングスその他となつて殘存してゐることを考へれば、敢て不思議ではなくなるのである。それのみならず、神經症者に見られる種々な症候を分析研究して見ると、例へばヒステリー性攝食障害などは、屢々喰物攝取と云ふことを性的な意味に無意識的に解してゐることにその原因があることが分る。それと云ふのもつまりは、攝食本能と口唇性感とが本來一つのものであつたことの結果である。

アブラハムが主張してフロイドが承認した意見に依ると、リビドー發展の最初の口唇段階は二つの部分に分れる。第一の部分には吸付きとしやぶりとが主になり、第二の部分には嚙付きが主になつてゐる。始めの程はたゞ吸付いてのみ居る乳兒もやがて極めて早く漸次に嚙付くやうになつて行くものであるが、この第二の段階は乳齒が生えて來ることゝ自然に平行して始まるわけである。この時代に於いては、子供の愛情の現れ方は、愛の對象を口に持つて行き、それを呑込むと云ふ形をとるのがその一種である。（喰つて了ひたいほど可愛いと云ふ言葉があるが、これは喰人本能がこの段階に殘留してゐることである。）勿論、人々は性感のこのやうによもやと思ふほどの早期前階のあることに就いても、純粹に精神分析に於いて、證明を與へることが出來る。が、この段階に定着し、且つこの段階に退行してゐる患者は夢の中でその愛する者を屢々喰物として表現すると云ふ事實を擧げても、精神分析を知らない人々はそれを確實な證明とは認めない。また常に忘れないやうにしてゐなければならないことは、既にこの第二の（嚙付き）段階に於いては、一切の人間的關係は「相反竝存」的であつて、「同じものに對して積極的（ポジチフ）及び消極的（ネガチフ）な感情を以て對してゐる」（ブロイラー）のである。

13

乳兒時代の性的顯現としては、吸付きとしやぶりと嚙付きとだけだと考へるならば、それは間違つてゐる。既にこの時代に於いて、糞尿の排泄、律動的な動搖（搖籃、ぶらんこ）、乳兒的自慰は快樂である。殊に大腸から快感が生ずるので、口唇段階から漸次に肛門段階に移動して行くのだと云ふことが出來る。が、そのやうな考へに對してまづ第一に反抗を示すのは、「正常な」成人である。この場合にもやはり、人々は成人の考へ方と子供の考へ方とを取違へてゐるのだ。後年に於ける抑壓の結果を抑壓以前のもの丶如くに考へてゐるのだ。約言すれば、子供時代の實際が如何であつたかを「忘れ」てゐるのだ。たゞ我々は、娛母たちが幼兒の排泄過程に對して如何に大きな關心を拂つてゐるかと云ふことに氣を配ればよい。また子供等が排尿排便に對して興味を持つてゐるのを見ても不思議に思はないがよい。大便の保留は腸粘膜に刺戟を與へ、かくて保留せられたる糞便が排泄口を通過する時に苦痛と快樂との混和した感覺を生ずる。婦人の性感發達に就いて云へば、これが婦人の後年の性感と結びついてゐる。卽ち、腸內の保留糞便はペニスの如く、直腸は膣の如く感ぜられるのである。

肛門段階も亦、これを二つの部分に分つことが出來る。第一のは糞便が肛門から出る時の快感がその特徵であつて、その際本人はその排泄せられるものに對して多少の攻擊的、排斥的な心持を抱く。子供はその愛するものを糞便に擬する奇癖を持つてゐる。そこに相反並存的傾向の著しいことが觀取せられる。一方に於いては、糞便を保留しておきたいと云ふ傾向があり、他方に於いてはこれを排擊したいと云ふ傾向が見逭せない。子供や成人の多くの神經症的下痢は如何に說明すべきかと云ふに、それは、何か失望したことがあると直ぐに下痢を起す神經症患者の症候に就いて見て明かである。それは心理的にはつまり對象を排擊すると云ふこと丶同じなのである。

肛門段階の第二期に於いては、糞便保留の保守的傾向が一層顯著になつて來る。この保留の快感のために糞便を愈々詰まらせ、また非常に價値の高いものだと思ひ込むやうになる。なほその上に子供を世話する人々が、子供の糞便に非常に大騷ぎをし、大袈裟にこれを扱ふから、愈々これが價値高いものだと子供等は思ふやうになり、かくて段々と糞便は子供等にとつて、自分を世話してくれる人々への贈物であると云ふ感じが起きるやうになつて來る。

第三の性器前期的段階――尿道性感――に就いてはあまり多くの事が分つてはゐない。この段階は女兒に於いては、その男性願望（これに就いては後に詳述する）といろ〳〵に結び付いてゐる。著者の分析した或るヒステリー婦人患者はまづこれに屬する方である。彼女は旣に成人でありながら、まだ「男のやうに」（つまり立つて）小便をするのであつた。

性器的段階と云ふのは、所謂「リビドーの男根（ファルス）中心組織化時代」を以て始まるのである。さうして男女兩性ともにこの段階は共通してゐるのである。女には男性器（ペニス）はないから幼兒期の自慰に於いても男根的（ファリッシュ）な快感は經驗する筈はないと云ふ反對說が起きるかも知れないが、併し女兒はその陰核をペニスとして知覺し、それによつて「男性的に」自慰するものであるから、その點で右の反對說は打破せられる。膣は心理的に默殺せられてゐる。＊かくて少女は心理的には男兒であつて、つまり彼女等自身としてはペニスを持つてゐるのである。成人になると男女兩性別存在の事實は殆ど問題にならないが、彼等成人に於いてはこの區別は始めから存在してゐたのだらうと云ふ假說の形で、右の不察が再び擡頭して來る。これに就いては今更管々しく云ふまでもないことであるが、多くの婦人たちが女の性的役割に甘んじてゐないと云ふ事實からして冷感症の素質的な要素の一つが結果して來るのである。

註　＊『國際精神分析學雜誌』一九三三年第三册、カーレン・ホルナイ稿『膣の否定』を參照。

男性器を見た時の態度は、男兒と女兒とでは全然違つてゐる。男兒が女兒の局部を始めて見た時には、その態度は曖昧である。始めの內はあまり興味を持たない。彼にとつて見れども見えないか、或はその見たるところを否定する。その知覺したところを弱め、自分の豫期したところと一致するやうな見解に到達しようと努める。やがて自慰をやつてその罰に去勢をすると脅かされ、その影響が起きるやうになつて、始めて前の觀察が彼にとつて重大な意義を帶びるやうになる。嘗て見たものを想起する事に依り、或は新たに見ることに依り、彼の內に本能感情の嵐が起こり、從前はたゞ威嚇に過ぎないと思はれてゐたことがどうやら本當にやられるかも知れないと云ふ信念となつて來る。かゝる事情からして二つの反應が生じ、かくて女性に對する彼の態度が持續的に決定せられる。大事なところを

失つてゐる人間に對する嫌惡の感情と、それに比較して自分の優越に就いて凱歌を奏する感情と。

女兒の方はこれとは全く違つてゐる。女兒たちは一見して自分の事は直ぐ分る。女兒は男兒に於いてペニスの存在を見、自分にはそれの缺けてゐることを知り、甚だ失望し、自分もそれを欲しいと思ふ。この心理からして所謂（女性の）男性コムプレクス（Männlichkeitskomplex）が生ずる。この男性コムプレクスがあると、さうしてこのコムプレクスが首尾よく克服されないと、前に略叙しておいたやうな、女らしさに發展することが非常に困難になつて來る。少女のペニス願望の背後には、やはり屢々口唇的な羨望感が裏付けてゐる。自分にも一つペニスが得られるかも知れない、さうして男性と同じやうになれるかも知れないとの希望は、女兒に於いてはまさかと思はれる程の後年に至るまで保存せられてゐる。或は現實狀勢が端的に否定せられ、彼女等に於いて男性器の缺如せる事實を認めることを拒み、自分等になほペニスが存在してゐると妄信し、その結果、自分が宛も男兒であるかの如くに振舞ふの外なきに立至るのである。男性器羨望が男性コムプレクスとして反動構成せられない限りは、この男性器羨望の心理的歸結は極めて複雜、且つ廣汎なものとなるのである。女兒等がナルチスムスの損傷（自己感情の病みつき）を自認すると共に、それは云はゞ傷痕の如くなつて、成人後の彼女等の劣等感となるのである。彼女等がその男性器の缺如を始めには個人的懲罰として自分に説明して聞かせるやうに試みるが、その後に至つてその試みを克服し、自分以外の女兒等も等しくその男性器を缺如せるものなることを發見すると共に、決定的な一點に於いて缺けてゐるところある性に對しては男性等とその輕蔑感に於いて同ずるやうになるのである。

なほこれ以上に理解を進めるためには、二つの事實に注意を拂ふことが必要である。即ち、兩性具有と、所謂エディポス・コムプレクスとの二つの事實である。兩性具有とは、男女を問はず一個人に於いて男性的な要素と女性的な要素とが共在してゐると云ふことである。エディポス・コムプレクスとは女兒（假りに女兒だけに就いて云へば）が母親と同樣に父親に依つて愛せられんと欲し、從つて母親の代りにならうと欲し、かくて母親に對して相反相並的な、即ち愛憎二元の矛盾した態度をとるやうになると云ふことである。併しながらエディポス・コムプレクスが相反並存

的であると云ふことは、各個人が兩性具有的であると云ふことに依つて重大な關係を及ぼされてゐるのであつて、かくて例へば女兒は父親に愛せられんと欲し、母親を憎むのみならず、他面に於いてその母親を愛して父親をその競爭者として排斥せんとするのである。這般の事情はエディポス・コムプレスの「前史(フォルゲシヒテ)」を檢べて見ることに依つて始めて明かになるのであつて、この前史とは所謂「エディポス前期に於ける母親への愛着」(Präödipale Mutterbindung)である。

エディポス前期に於ける女兒の母親への愛着は如何なる點に存してゐるのであるかと云ふに、それは父親への正常的愛着の前驅として、極幼兒はそのその心理的關係はたゞ一つしかないのであつて、その心理的關係とはつまり母親に對するものゝみである。この時代に於いては、父親はたゞ厄介な競爭者に過ぎない。多くの場合に於いては、女兒の母親への定着は四歳頃まで存續し、後年になつて父親に對する關係に於いて發見せらるべき殆ど總てのものは當時母親への關係に於いて既存し、後にそれ等が父親への關係に於いて委讓せられるのである。

母親に對する少女のリビドー關係は實に多樣な形態を具へてゐる。彼女等の母親に對するリビドー關係も幼兒性感の三段階の總てを通過するのであるから、その關係にも個々段階の諸性格が示され、從つて口唇的願望、肛門虐待的願望、並びに男根的願望に依つてそれ等の諸關係が表現せられる。これ等諸願望は能働的亢奮のものもあるし、受働的興奮のものもある。それのみならず、それ等の願望は全然相反並存的であつて、一方感傷愛的であつて、而も他方に敵對的、攻擊的性質を帶びてゐる。最も判然と表れるのは母を子供にしたいとの願望、又はこの願望と關係のある(母に子を產ませたいとの)願望である。或は母親に依つて殺される、毒殺される、誘惑される、と云ふ不安が擡頭する。この被誘惑空想に於いて誘惑者となるのは常に必ず母親である。この點に於いてこの空想は現實的根抵に觸れてゐる。何となれば、極幼兒時代から身體の世話をして性器に快感を與へたものは、恐らくは始めてその經驗をなさしめたものは、事實上母親であつたからだ。

女兒が極早期に母親に對してこのやうに力強い愛着を持ち、それが時と共に根抵的なものとなつて行く。母親から

の離反は母親への敵視となつて現れる。母親への愛着はそれへの憎惡となつて消失する。そのやうな憎惡は多少とも得體の知れないやうな一面を示し、全生涯を通じて保持せられ、後年には超過補償的に罪亡ぼしの親孝行になる。大抵の場合、それ等憎惡の一部分に克服せられてしまふが、他の一部分はそのまゝ殘つてゐる。母親からの離反の動機としてはさまざまに不平不快が持出される。母親がおつぱいをあまり十分に呉れなかつたと云ふ不滿、後から來て母親の愛を奪つて行つた弟妹に對する羨望、自分のオナニーを禁斷せられたに對する反抗など。より深き源因は子供の愛慾の無制限さとその性的願望の充足せられざることゝに存するであらう。女兒たちのこの最初の愛情關係は、最初のものであるが故に恐らくはやがて崩壞すべき運命にあるのである。何故に最初のものなるが故に崩壞するのかと云ふに、それはこの早期の對象纒綿が常に必ず高度に相反並存的だからである。強度な愛情の側には常に強度な攻撃的傾向が存在し、子供がその對象をいよ〳〵情熱的に愛すればするほど、その對象から一寸でも素氣ない樣子や艶消しな待遇を受けるとそれを非常な冷遇虐待であると思ひ込むからである。遂に愛情の城砦も憎惡の寄せ手の前に屈伏しなければならなくなる。更にもつと細かく云ふならば、主要教育者たる母親から大部分の拒否が出て來てゐると云ふわけになるのである。何となれば、最も優しい教育と雖も強制を用ゐたり制限を加へたりするものに外ならぬからである。併し、以上の總てを以てしても、女兒をして早期の母親への愛着を打棄てしめるには、なほ力及ばないのである。現に男兒と雖も同樣なことを體驗してゐるに拘らず、その母親への愛着を放棄しようとはしないからである。女兒の場合には、そこになほ特別な契機が加はる。それは去勢コムプレクスである。解剖上の區別はやはり心理上にもその歸結を及ぼさないわけはない。少女はそのペニス缺如に就いて母親をその責任者と見做し、かゝる損害を與へたことに就いて母親を容赦しようとしないのである。

　分析的に調べて見ると、女兒にもやはりペニス切斷（去勢）コムプレクスなるものゝ存することが認められざるを得ない。よしんばそのコムプレクスの内容は男兒の場合と餘程異つてはゐるにもせよ……。女兒の去勢コムプレクスもやはり異性の性器を一瞥することに依つて始められる。その時、女兒等は非常にいやな氣持になり、自分等も「あ

んなのが欲しい」と思ひ、かくてペニス羨望のコムプレクスが生ずる。さうしてこれは彼女等の發達及び性格構成上に拂拭すべからざる痕跡を殘す。最も輕い場合に於いてさへも相當に重大な心理上の打擊を被るのである。

自分に男性器缺如せることの發見は、彼女等の發達史上に於ける轉廻點をなすのである。この事實の發見からして彼女等の發達上に三つの方向が生ずる。その一つは神經症に導き、第二は男性コムプレクスの意味に於ける性格變化に導き、第三は正常の女らしさに導く。第一の方向の本質的內容をなすものは、これまで「男性的」に生きて來、自分等の陰核に依つて快感を得ることを知つてをり、さうしてこの陰核的活動と屢々能働的な(母親を相手とする)性的願望とを關係づけてゐた女兒等が、ペニス羨望の影響に依つて自分等の男根的性感の享受を毀損せられるやうになると云ふことである。男兒等の方は自分等よりは遙に具合よく出來てゐることを知つて自尊心を傷けられ、陰核による自慰的滿足を――多少とも強い程度に――斷念し母親への愛情を放棄し、その際に彼女等の性的活動一般のよい部分を抑壓してしまふことが稀ではない。母親からの離反と云ふことは、女兒等が一擧にして成し遂げるものではない。何となれば、女兒等は自分等の男性器缺如を始めには自分の個人的な不遇であると考へ、漸次にこれが他の女性たちにも擴充せられてあるものであると考へ、即ちまづ母親がそれであることを認めるやうになる。彼女がさきに母親を愛したのは母親にペニスの存在を豫想してのことであつたが、母親にそれが缺如してゐることが發見せられると、母親は自分の愛情の對象としての資格を喪失することになる。このやうにして永い間かゝつて築き上げられて來てゐた母親憎惡の奔流は一擧にして堰を切つて落されることになる。

クリトリスに依る自慰を部分的に廢止すると共に、女兒の性態度はその能働性をも部分的に放棄することになる。受働性が今や主調となり、父親への轉向が、愛働的本能亢奮の助勢を得て目立つて來る。以上の如き發展樣相に依つて男根的活動は一掃せられて、女性的活動が今やそれに代つて起きることになる。もしその際に抑壓に依つてあまりに多くが失はれさへしなければ、この女性的活動は常態的なものとなつて發展するのである。

女兒が父親へと轉向する時に抱いてゐる無意識的願望は元來ペニスへの願望である。それを母親は彼女に與へなか

つたので、今や父親からそれを期待するのである。併しながら女としての立場は、ペニスへの願望が子供への願望に依つて置換へられる時になつて、始めて確立するのである。子供はこのやうにして、ペニスの代りになるその象徴的等價物である。

併しながら女兒が、その願望に於いて――象徴的類似に誘はれて――ペニスから子供へと移行する前に、そこに肛門的段階が介在する。子供への願望の中には肛門性感的な亢奮と性器的亢奮（ペニス羨望）とが合一してゐる。併しペニスにはやはり、子供への興味からは獨立した肛門性感的意義がある。ペニスとそれに依つて充塡せられた亢奮せしめられてゐる粘膜孔との間の關係は、既に性器前期の、虐待肛門的の段階に於いて出來てゐる。糞便塊は空想中に於いて、云はゞ最初のペニスである。それに依つて亢奮を與へられる粘膜は大腸粘膜である。世人の內には思春前期に至るまでその肛門性感がそのまゝ強く殘つてゐる人がある。それ等の人々を分析的に調べて見ると、彼等はこの性器前期の段階に於いて空想並びに變態的戯れの中に於いて性器に類似した組織を作り上げてゐるのである。例へば、ペニスとワギナ（膣）とが糞便と大腸とに依つて代表せしめられてゐる如きである。神經症患者（强迫神經症患者）の間には、性器組織を退行的に低下せしめてゐるために或る結果を生じてゐる者のあることが分るのである。卽ち、總て性器として考へられた空想は肛門に轉向せられ、かくてペニスは糞便により、ワギナは直腸に依つて代償せしめられるのである。ペニスと糞便と子供の三つは總て固形體としてその出入に當り粘膜孔に亢奮を與へるものである。

子供卽ペニス願望が父親に向けられると共に、女兒はエディポス・コムプレクスの立場に入ることになるのである。母親への敵對感情は必ずしもその時擡頭するわけではないが、少くとも非常に强化せられる。何となれば、母親は女兒が父親から期待し憧憬してゐる一切を先取してゐるものとして競爭者となるからである。女兒にとつては、エディポス・コムプレクス的立場はその後の長き困難な發展への出發である。一種の準備的遂行の如きものである。

去勢（ペニス缺如關係）コムプレクスに對するエディポス・コムプレクスの關係には、男女兩性にとつてそれぞれその結果及ぼすところ重大なる區別がある。男兒はそのエディポス・コムプレクスに基きその母を占有しその父を競

爭者として除者にせんと欲するのであるが、このコムプレクスは彼等の男根期的性感段階から發展して來る。併しながら父から罰として去勢されるかも知れぬと云ふ脅威のために、彼は兩親に對する右の如き態度を放棄するやうになる。ペニスを喪失することの危險を感ずる時代に、エディポス・コムプレクスは放棄せられ、抑壓せられ、極めて正常の場合には根本的に粉碎せられてその遺產として强力なる超自我（良心の無意識的な部分）が構築せられる。別の云ひ表はし方をすれば、對象纏綿は放棄せられて同一化がその代りに生ずるのである。自我內に攝取せられたる父親（又は兩親）の權威はその內で超自我の中核を構成し、その超自我は父親から峻嚴さを借り來り、その近親姦禁斷を永續的にし、かくて自我はリビドー的對象纏綿の復活を確保するのである。エディポス・コムプレクスに屬してゐるリビドーの動きは一部分は性的性質を失ひ、昇華せられ、一部分はその目的を禁制せられ、感傷愛的なものに利用せられる。以上の如き全過程に依つて、一方に於いて、性器はその喪失の危機から救はれるが、他方に於いては、その機能は多少とも不自由になるのである。かゝる過程と共に、エディポス・コムプレクスの第一期開花（三歲から五歲まで）は終りを告げて、次に潛在期が始まり、それが思春期の始めまで續く。この思春期になると以前のエディポス願望が新たに蘇生して來て、かくて人間の運命たる健康か神經症かの別れ道が定まるのである。

ところで男兒にとつて右の如く發展するところのものは、女兒にとつては如何なるであらうか。女兒に於いて起るところのものは正にその正反對である。去勢コムプレクスはエディポス・コムプレクスを粉碎しないで、却つてこれを準備する。ペニス羨望のために女兒は母親への定着から追放せられてエディポス的立場の港へと逃込む。ペニス喪失の不安がなくなると共に、男兒をしてエディポス・コムプレクスを克服すべくせしめたところの主要動機は去つて行く。女兒の方は、これに反し、エディポス・コムプレクスに定めなく永く執着してをり、これを構築することも遲いが、これを離脫することも不完全である。超自我の構築はかゝる事情のために困難となり、男兒の超自我のやうに强烈なところがない。

さきに吾人は、女兒が自分にペニスの缺如せることを發見してその發達上に轉廻點が與へられ、その轉廻點から三

様の方向（正常的女らしさ、男性コムプレクスの意味に於ける性格變化、又は神經症、それに關する性慾禁制）の可能性が生ずると云ふことを述べておいた。ところで、男性コムプレクスに關しては、女兒はペニス缺如の不快なる事實を承認することを云はゞ心理的に拒否し、自分の從前の男性的傾向を反抗的に追及し、陰核的活動に固執し、男根を所有せるものと想像せられた時代の母親に、又は父親に自分を同一化してそこへ逃込むやうになる。このやうな逃道に出るには彼女等の體質的な要素がやはり多少の寄與をなす。この體質的要素が能働性のより大なる部分をなすことは、男兒の場合に於いてそれが特質的なのと同じである。この過程の本質は、女らしさへの轉向の道を開くべき受働性がこの發達點に於いては避けられると云ふことにある。この男性コムプレクスの最外面的な所行としては、その對象選擇が顯在的な同性愛の意味に於いて現れると云ふことである。よしんば、この變態は幼兒的な男性傾向を直接的に持續するものではなく、たゞ父親への短期間的愛着が迂曲して現れたものに過ぎないにもせよ……。

女兒が女らしさへの發達と、男兒が男らしさへの發達とを比較して見ると、女性の發達は男性の發達よりも本質的に一層錯雜してをり、且つ一層葛藤的であることが分る。殊にそれには二つの重大な原因がある。卽ち、女兒は最初の愛情對象たる母親を父親（後には夫）と取りかへなければならない事と、また性的帶域をクリトリスからワギナに轉換しなければならないことゝである。これに反し、男性は第一期性的開花の時代に實施したところのものを性的成熟期にまで持續することが出來るのである。

女兒に於いて性帶域が轉換すると云ふことは決定的な重要性を帶びてゐることである。幼兒性感の早期開花時代に於いてクリトリスが殆ど常に亢奮の中心となつてをり、さうしてワギナは心理的には未だ發見せられてゐないのに、クリトリスはその感受性とその重要性とを後に至つてワギナに委讓しなければならない。もしこの委讓がうまく行かないと、女性はその性行爲に於いて不感となり、せいぜい豫備快感的行爲に滿足しなければならないことになる。正常の高潮感（オルガスムス）はワギナに於ける感受を第一の且つ決定的な豫想として持つてゐるのである。

性××に際して女××が抱攝的、保持的、吸收的器關としての活動をなすものであるが、その事は（フェレンチー及

びヘレーネ・ドイチ*に從つて）攻擊的性要素が口唇段階から肛門段階に持ち越され、それが更にワギナにまで持續せられると云ふことを認識すれば、自ら理解せられる。ワギナはペニスの刺戟を受けて、且つ「上から下へ」の轉向機制に基き、吸收する口唇の役割を、「ペニス＝乳房」の方程式に從つて引き續くこの口唇的基礎工作が冷感症婦人の場合には、種々な口唇的症候に依つてぐらついてゐるのである。

註 *『女性の性的機能の精神分析』、國際精神分析學會發行（一九二五年版）參照。

以上は、女性感發達に關するフロイドの見解を紹介したものであるが、さうしてなほその詳細な諸點に關しては後章に精叙するところあるであらうが、簡單なものではなく、また精神分析には緣遠き多くの難問題を含んでゐるであらう。簡單ではあるが、以上は精神分析發祥以來四十年間の研究業績の諸部分を、その尨然たる文獻に就いて包含せしめておいたのである。このやうな困難を多少とも克服するために、フロイドのいろ〳〵の見解は彼自身の言葉を引用しておいたのである。こゝに女性の戀愛生活の發展上の個々の事實を分析學的な術語を以て表現しておいたが、これ等は兒童及び患者の觀察に依つて得たところであつて、分析の經驗なき人々には直ちに呑込めると云ふわけには行かないであらう。要するにそれ等は無意識的に、或は意識せられないで、起つてゐる心理過程を問題にするものである。かゝる結果を確證することは勿論たゞ、根本的分析に於いてのみ可能である。で、これ等は分析の門外漢からは極端であるとかこぢつけであるとか云つて拒否せられることのあるべきは怪しむに足らぬ。（完）

（譯者附記）以下類似の主題に關して參考のためにフロイドの『女性論』の一節を拔萃しておく。——我々は女子の性的發展を研究するに、二つの期待を以つて臨んだ。第一は、女性の素質を以てしても多少の努力を拂はねばその機能を果すやうにはならないのであらうと云ふこと。第二は、決定的の轉向は既に思春期以前に伏在してゐるか、或は完成してゐるのであらうと云ふこと、この二者は、やがて確證せられた。それのみならず、男女の子供の發達の樣子を比較して見ると、いろ〳〵の事が分つて來る。卽ち、少女が一人前の女に發育するのは一層むづかしくもあり複雜でもある。何となれば、女子の發育には男子の發育には見られない二つの問題が含まれてゐるからである。兩性の發達を始めから平行的に辿つて見よう。實は既にその材料からして男兒と女兒とでは違つてゐる。それを確めるには、精神分析を俟つまでもない。性器の構造が違ふ通りに、他の肉體上の相違も

これに伴つてゐる。また本能の性質に於いてもその相違は顯著であつて、それに依つて後年の女性的本質を豫知するに足る。少女は概してあまり攻撃的、反抗的、自立的ではなく、男兒よりも感傷愛を大人から供せられることを必要とするもの〻如く、從つてより從屬的であり、從順であるやうである。我々にはまた女兒の方が同年齢の男兒よりも知力も勝れ、生々としてゐるやうに感ぜられる。さうして外界に對してよりよく順應し、同じ頃に於いて對象に向つて一層力強くリビドーを纏綿する。このやうに發達の早いことには、何か確たる根據があるか。それを突きとめることが出來るかどうか私は知らないが、何れにもせよ、女兒が劣つてゐるものでないことだけは確かである。併しこの性的差違はあまり問題にはならない。それは個人の相違に依つて補ふことが出來る。

二、女子性生活の特質

吾人が既に說いておいた通り、早期に於ける母親への定着は一種の同性愛の素因をその發達の中に形成するものであり、また女兒が內部性器を有するものであると云ふことを彼女等の早期に說明してやることが不可能であり*、最後にまた、女子の生活に於いて性的主要帶域がクリトリスからワギナに轉換することが如何にも困難である。この最後の事は、別言すれば、少女が（一般の處女が）男性に屬してゐるとも云ふべき肉體個所に於いて性的感情を覺えると云ふことであるのだ。このやうに、少女は自分を男性として想像するが故に、そこに何物をも持たないと望むことよりも、そこにペニスを望むことの方が遙かに自然なのである。從つてまた內部性器の機能が常に容易に進展し難いと云ふことも極めて自然なのである。

註* Hitschmann "Eine natuerliche Schwierigkeit der Aufklaerung". Zeitschr. f. ps-a. Paedagogik, I. Jg, 1927, Heft 7-9.

更にまた、女子にとつて情交の結果が如何に重大であり（妊娠、仕事が障害を受けること、私通に依つて名譽を失ふこと、結婚難）、また現在の文化狀態に於いてその社會的歸結も重大であるかを思ふ時、教育が女子の貞操を强調するのも當然として人々の理解し得るところである。

原始文化は別問題としても、また性的啓蒙や獨立には事缺かぬプロレタリアや農民の生活態度は姑く問はぬとしても、市民生活を送る少女たちにとつては、云はゞ第二の潜在期とも云ふべき抑壓が、彼女等を待ち構へてゐるのである。青年男子たちには既に許されてゐる頃になつても、女子たちにはそれはまだ禁ぜられてゐる。言葉の狭義に於ける貞潔は――つまり、自慰や空想や所謂不法なる啓蒙や媚を示すことなどは別問題として――若い男子にとつてよりも少女にとつての方が遙に容易ならしめられてある。女子が性行爲を望むやうになるためには、最初はその愛人に依つて誘惑せられ、性的亢奮を敎へられなければならない。その時までは、女子はたゞ自分自身をナルチスティシュに愛撫してゐなければならない。併しあまりに早くいろ〳〵の事を知り過ぎると、貞潔の要求が決して守られず、またさう云ふ場合には市民の少女は危險回避のために誘導せられることも斷念するやうになり、或は結果を不安がることからワギナの冷感を伴ふやうになつて來る。

そこで我々は情熱よりは野心から企てられた戀愛關係の多くが失望的に破産して行くのを見るのである。秘密主義と機會の不完全なこともそれ相當の結果を示す。かくの如くにして亢奮は屢々途中で挫折するやうになり、獨身者又は婚約者の滿足は口唇に依つて或は手×に依つて果されることが屢々となる。このやうな狀態は、後年の結婚生活に於けるワギナの不感を促進するのみとなる。何となれば、このやうな狀態では、クリトリスの亢奮を助成し、總て男性的主要帶域を云はゞ增長せしめ、一度增長せしめられたそれ等の帶域は後年になつてもなか〳〵おとなしく引込んでゐないからである。女子が完全なる性愛行爲に於いて完全なる快感を得るために最小限度に必要なるものは、不安感情や罪惡感情を持つてゐないと云ふことである。十分な時間と快適なる寢臺とを持つてゐなくてはならない。そしてその相手たるものもこれと同樣な、第一義的な要求を持つてゐるわけであり、更に相當な技法を心得てをり、神經症的であつてはならない。殊にあまり早くエヤクラチオンがあつてはならないのである。

多くの人々は、結婚することに依りて始めて安靜なる寢臺を得、種々な不安や心配から解放せられるのである。併し女子が快感を完全に享受することを知るためには、これ等の諸條件は必要である。冷感、不安、苦痛に惱む者等は

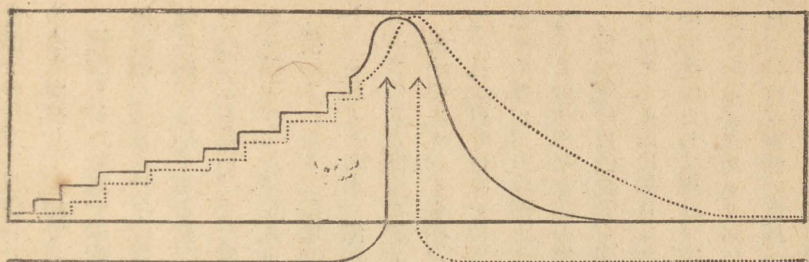
の速度が概して遲緩であり、その代りその亢奮の消滅のテムポも亦早くはない。當然その行爲の反復を拒否するが 併し健康なる若き女子たちはその反復を要望する。女子は男子よりもその亢奮へ

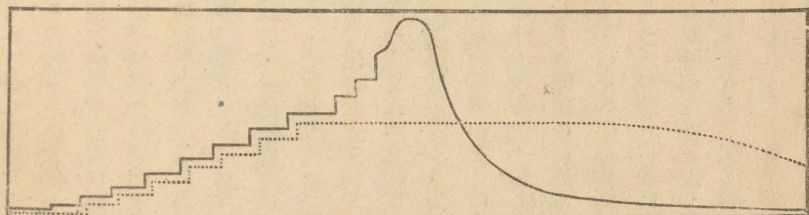
經驗を持たぬ處女が性的に情熱的な、完全に感受的な女となるためには、その豫備條件として錯雜な、無意識的發展過程を辿らなければならない。ワギナの筋肉活動は括約、保持、吸引などを經て遂にオルガスムスに至つて窮極境地に達するのであるが、この筋肉活動が破爪に於いて擡頭し得るためには、その發達期間中に豫めの形成を得てゐなければならない。これ等諸能力の否認、殊にワギナの否認が無意識的動機に依つてなされる時は、これ等諸能力の禁制を結果するやうになり、それは精神分析處置に依つて甫めて復活し來るのである。

接吻されたり、接觸せられたり、愛撫せられたり、或は愛慾行爲を受けたりしても只拒否と不快と冷淡とを以て應じ、それどころか、嫌惡、羨望、憎惡などを以て反應する冷感症者たちと、情熱的な、共感的な、歡喜を以てオルガスムスに入る健康な婦人との間の大きな對立相反は、文明病者と自然人との對比を端的に徵象するものである。

女子のオナニィも亦、彼女等の特性を示すものである。自分を損傷するとの不安が一つのより大なる役割を果してゐる。且つ自分自身を破爪することの不安がそこに伴つてゐる。それのみならず、自分は以前には男兒の如くに出來てゐたのだが、それがオナニィのために變化せしめられ、去勢せられたとの空想さへもが現れて來ることがあるのである。このやうな空想の擡頭をして可能ならしめるものは、彼女等の器官が外見的に目立たぬことにもよるのである。

彼女等の自己批難を强めるものはその經血の惱みである。器官に於いて既に正常ではないとの觀念、オナニィをしたことを夫に知られるであらうとの恐れ、子供を生むことが出來ないであらうと云ふ不安などが、それ以後の恐病症的症候として現れて來る。これ等が土臺となつてそこから結婚や出産への拒否が生じ、從つてまた冷感が當然に起きて來る。クリトリスに於けるオナニィ、肛門的オナニィ、或は禁斷に依つて性器官の周圍に轉位せられたオナニィは、云はゞ摩擦の快感への準備をしつらへる。併し未婚女子が器官に於いてオナニィすることは比較的稀少である。

大抵はたゞ誘惑の結果である。ワギナに於いて冷感の素因を持つことに就いては、勿論、これにその責めを歸するこ

男子のオルガスムス　　女子のオルガスムス

とは出來ない。

女子の正常的性行爲の、三段階を記述するならば次の如くになる。第一段に於いては、器官の濕潤を來たし、クリトリスの×起してゐることはその脈搏によつて明かになる。抱擁及び接吻の繼續の後に身體的結合への慾求が起り、更に進んではペニスのイムミシオとなる。その時、摩擦快感が始まり、それが漸次に上昇し來ることが知覺せられ、その持續が要求せられる。同時に、(男子のオルガスムスの直後に起ることが恐らく屢々であるが)、女子のオルガスムスが起り、かくて器官並びに骨盤に於ける筋肉の不隨意的縮約の下に性的緊張からの解放が生ずるのである。男子の方は比較的早く冷却するが、女子の方はそれに比すると、オルガスムス解消後と雖もそのまゝ共にある事を好み、ペニスを自己のもの內に保持してゐることを要求するのである。このやうな正常なる行爲の經過に就いて、當該婦人が如何なる點に缺陷あるかは、醫師の十分によく知り得るところであらう。上に揭げたる圖解は婦人科醫ケーラーの作製に係るものであるが、交媾の過程を誠によく明示せるものと云ふべきであらう。上圖は正常交媾曲線(可感曲線)であり、下圖は異常交媾曲線(不可感線)を示すものである。連續線は男子の場合點線は女子の場合を意味する。

第三章　婦人の冷感症

第一節　冷感症の概念、症候論並びに程度

冷感症とはワギナに於ける婦人オルガスムスの感覺不能を云ふ。但しその場合、婦人がコイトスに際して冷淡であるか亢奮するか、或は亢奮が强いか弱いか、或は彼女等が始めにその狀態になるか終り頃になるか、或は徐々になるか急速になるかは、冷感症の効果に對してはあまり大きな意味を持たないのだ。冷感の唯一の標準はワギナに於けるオルガスムスがないと云ふことである。

コイトスに際しての冷感症の典型的障害は多種多樣であるが、次のやうな數種にこれを分類することが出來よう。

（イ）　ワギナに於いて無感覺なる完全冷感症。

この類の婦人は全然興味がないのである。ワギナに於ける快感に就いてはその痕跡さへない。たゞ不快嫌惡を感じ「早く總てが濟めばよい」との願望を持つのみである。豫備快感的行爲に際しても濡潤なる性腺の分泌はなく、シヤイデ及びクリトリスに於ける感覺もない。行爲中にも放心してゐたり、眼をあけたまゝでゐたりする。

ワギニスムス（ワギナの不隨意緊縮のために苦痛を感ずる病患）はこの冷感症の一段と强化せられたものであり、卽ちそこに不安と、積極的防禦と、括約筋の不隨意的緊縮と、行爲の不可能とがある。

（ロ）　ワギナに於ける感覺の不十分なる完全冷感症。

コイトスの始めに當つての亢奮微弱、行爲中同じ程度の微弱亢奮に停まつてゐる。性腺分泌の形跡はあるが、コイトスの感覺は甚だ微弱なること。不隨意的なる筋肉の緊縮は見られない。

（ハ）　ワギナに於ける感覺は不十分なる不完全冷感症。

コイトスを考へることに依りまたそれを期待することに依り、相對的に强い亢奮はあるが、ベットに於ける行爲に臨んで總ての願望は消失する、その有樣は宛も(ロ)の場合の如くである。

(ニ) ワギナに於ける感覺はあるのだが、オルガスムス直前にて急に挫折する不完全冷感症。

比較的强い亢奮はあり、ワギナに於ける感覺障害は最小限であり、漸次に亢奮は上昇して行くが、不隨意的筋肉緊縮が始まる直前に至つて急に(時には徐々に)亢奮は冷却し、オルガムスには達しない。

(ホ) ワギナに於ける感覺は不十分にしてクリトリスにオルガスムスある冷感症。

この種の婦人はコイトスに際して相手に依りクリトリスに摩擦を與へられることに依りて、クリトリス的オルガスムスに達するのである。時としてはその摩擦は十五分間乃至半時間に及ぶことがある。亢奮及び性腺の分泌は十分であつても、ワギナに於けるオルガスムスは全くない。

(ヘ) 色情狂型冷感症。

亢奮は强烈であつて、その亢奮が反復上昇するが、オルガスムスは全然ない。飽くことなく男子を求めるが、誰彼の差別なく沒頭的である。

(ト) お務め的、並びにどちらでもよい的冷感症。

お務め的冷感症——右に述べて來た如き障害は大抵の場合、あらゆる男子に對して起き得べきものである。どちらでもよい的冷感症——これはある特定の男に對して或る條件(例へば、禁斷を冒してするとか、相手に尊敬を必要とせざる場合〔娼婦〕だとか、特別なコイトス的姿勢とかの如き)の下に於いては消失し、正常なるオルガスムスが可能となるのである。

(チ) 眞の冷感症と擬似冷感症。

イからトに至るまでの間に記述せられてゐるあらゆる場合は眞の冷感症であるが、擬似冷感症はこれ等と區別せらるべきものである。卽ち、後者は性への無智、無邪氣、誤れる性的見解への固執、正しからざる技法に囚はれてゐる

などに依つて條件づけられてゐるものである。

以上の他になほもつと細々したことは、特殊形態に關する條の下に於いて說くであらう。

婦人のオルガスムス問題の全般は以上の他に、男子の勃起力、コイトスの相關的相手の愛撫技術などに依つても亦左右せられるのである。また完全に健全な婦人は、相手に早漏的傾向の病弊ある場合、或は彼に禁制が働いてゐて豫備快感を十分に實施し得ざる場合などに於いては、ワギナに於けるオルガスムスに到達することは出來ないのである。何となれば、正常健康な婦人の場合に於いては、亢奮の上昇は男子の場合に於けるよりは徐々たるものであるから、豫備快感の技法に依つて亢奮の程度を相手のそれと同等にまで達せしめておくことはさまざまの意味に於いて必要である。

冷感症の無意識心理的原因として最も屢々見られるものは、(一)父親へのエディポス的定着のためにそれ以外の男子との性的交渉に無意識的懲罰願望を持ち、そのために性的享受を自己に拒否すること、(二)女性的、受働的、被虐的役割を引受けることへの拒否、(三)去勢コムプレクス並びに男性願望の未だ解消してゐないこと、(四)性器前期的段階の無意識空想並びに定着に固執し、力づくで取つて貰ひたいと云ふ願望を持てること、(五)無意識的同性愛、(六)性的行爲を禁制する思想、例へば宗教思想の如きを抱けること、などである。

次に吾人は冷感症の廣大なる分野を十八種の個々の型に分類せんとするものである。これ等の分類が必ずしも完全なものだと主張するわけではない。個々のものが相互に入混つてゐる。併しながら、次の如く分類することは冷感症がとり得る多くの形式を明かにしてゐる、さうしてとかく素人たちが何もかも同樣に見て、一般化して了ふことへの警告として役立つてゐる。別々の形式に依つて診斷も違つて來るのだから、それだけでもこのやうな考へ方は誤つてゐるのである。

さて吾人の分類は次の如くである。——

一、エディポス定着型。(本頁九、十行參照。)

二、エディポス定着型に去勢願望型の附加せるもの。
三、エディポス型に去勢復讐型の附加せるもの。
四、ワギナに於ける筋肉の不隨意的緊縮の苦痛あるもの。
（一から四まではヒステリー型の感覺不良型である。）
五、虐待的・肛門的（强迫神經症的）冷感症。
六、被虐的機制を伴へる冷感症。
（イ）不安快感への定着あるもの。
（ロ）被虐性的・正常女性的體驗を忌避するもの。
七、ナルチスム的機制を伴へる冷感症。
八、本能的性格（色情狂的偏執）の冷感症。
九、性器前期的定着の冷感症。（二六頁六行以下參照。）
十、倒錯（變態）の冷感症。
十一、神經症の部分現象としての冷感症。
十二、無意識的同性愛に於ける逃避反應の結果としての冷感症。
十三、子供を持つことへの神經症的不安から生ずる冷感症。
十四、特殊的諸條件を伴へる冷感症。
十五、母親としての婦人の冷感症。
十六、禁慾的、性慾敵視的思想に伴ふ冷感症。又は超自我型。（前頁一三行參照。）
十七、擬似的冷感症。（前々頁一八行參照。）
十八、體質的冷感症。

第二節　冷感症に特殊なる諸形式

冷感症の最も屢〻見られる形式はヒステリー型であるが、これはエディポス・コムプレクス並びに去勢コムプレクスの未解消の殘滓と聯合してゐる。正常の婦人に於いては、エディポス・コムプレクスは崩壞して他人の男（卽ち父親と同一人ならざる男）へとリビドーは轉向し行く。もしこのやうな崩壞が首尾よくなされざる場合には、婦人がその關係を結ぶべき一切の第二の男は父親と同一化せられる。かゝる事情は全然無意識的である。何となれば父親への本當の愛情が抑壓せられてあるからである。それと同樣に、エディポス型（近親愛的）願望に對する無意識的良心（超自我）の反應も亦、無意識である。さうしてこの反應は自己懲罰慾求となつて現はれる。その結果生ずべき神經症的症候は、無意識的本能力の貯藏庫たるエスと超自我との間の妥協として出來たものである。無意識的なエディポス願望は超自我の命令に基く懲罰といふ賠償を支拂ふことに依つて保持せられる。その賠償が卽ち冷感症である。ヒステリー婦人が例外なく冷感症であつて、エディポス的願望それ自身とヒステリー的症候と云ふ手段に依る懲罰願望との間に平均を保つてゐるのは、右のやうな工合に依つてゞある。卽ち、宛もエスはその要求を放棄することは拒み、超自我もその懲罰慾の放棄を肯んぜざるが如くである。で、もしこの妥協を分析的處置に依つて打破しようと試みると患者はその試みに對して猛然たる無意識反逆を示して來る。これを抵抗と呼ぶ。そこでヒステリーの病苦は不可解だと云ふ嘆きが生ずる。宛も患者たちの病氣の訴へが嘘であるかのやうに見られる。彼女等は總てを告白しないからである。何となれば、ヒステリー症候に於ける無意識の快感的利得は患者たちの意識に全然上つて來ないからである。分析治療に際しての患者等の防禦（抵抗）の具合を見れば、この快感的利得の如何に大きいかゞ分る。

そこで吾人は、ヒステリー的不良感受の群の內に於いて、次の四種を區別することが出來る。——

一、エディポス定着型

二、エディポス定着型に去勢願望型の附加せるもの。

三、エディポス定着型に去勢復讐型の附加せるもの。

四、ワギナに於ける不隨意的筋肉緊縮の苦痛あるもの。

以上四型は必ずしも截然區別せらるゝものではなくて、さまざまな形で相互に入混つてゐるものである。卽ち各々の境界は判然してゐない。以上の四項及び第廿八頁所揭の各項に就いて以下に説明を加へるであらう。

第一、エディポス定着型

幼兒期に於いて父親に對して無意識的に寄せられたる性愛は抑壓せられるが、併し父親に關係のある無意識的空想の中にそれはなほ低徊してゐる。その低徊せる性愛に對して本人の超自我は嚴重なる禁制を以て、それぞれの罪障感的傾向を以て、反應する。そこで生じ得べき歸結の一つは、本人が所謂老嬢となつて一切の性的享受の機會を拒け、後年になつてから――「殘念ながら」――既にその機會の遲くなり過ぎてゐることを示すやうになるのである。かゝる婦人がその父親のために家政をとつてやつたり、共通興味あるために世話をしてやつたりして、永くその側邊に待してゐるのを見ると、他人からは如何にも犧牲的な、自己沒却的な運命のやうな印象を與へられるが、併し本人にはそれは不幸な運命ではないのだ。

父親に對する關係は必ずしも愛情一點張りではない。それは非常に愛憎並存的である。この型の文藝上の實例としては、ゲルハルト・ハウプトマンの『日暮前』のベティナを擧げることが出來る。ベティナはその老父を偶像的に愛敬してゐるのだが、併し彼がその最初の妻（卽ちベティナの母）の死に會し、後妻を迎へようとの意志を示した時には、ベティナは熱愛する父親に對して禁治產的な方法をとるのである。

かゝる婦人が結婚生活に這入つた時、又はその他何らかの方法で性的關係に入るべく强要せられるに至つた時に、その悲劇は始まる。卽ち、典型的な冷感症と共にあらゆる神經症的傾向がそこに生じ來ることは必然の歸結である。婦人の戀愛對象が一般に父親の型に從つて選擇せられるとするならば、右の如き特殊な場合に於いては殊にさうなるのは當然である。最も屢々見られるのは「橫暴な男」に對する無意識的定着であつて、そのやうな男に依つての被虐

的な待遇を甘受するのである。で、最深部に於いては暴力的に支配せられることが婦人の原始願望であつて、それは冷感症的婦人達の夢の中に於いても我々はこれを發見するのである。
がう云ふ型に對しては分析の効果は望みがある。

第二、エディポス定着型に去勢願望型の附加せるもの。——

これはつまり、自分が女であつて男ではないと云ふ事實に就いて、無意識的に惱んでゐる婦人たちのことである。*幼兒時代から根差してゐる、男子でありたいとの深い願望の本質的內容は、自分もペニスを持ちたいと云ふことである。かゝる空想は抑壓せられて、意識せられてゐるのはたゞ理窟付けのみである。例へば、婦人は性的にも、經濟的にも、社會的にも行動の自由が少ししか與へられてゐないと云ふが如き不平となつて理窟づけられる。既に論じて來たやうに、少女達も亦、彼女等が元來ペニスを持つてゐたのだが、それが奪ひ去られたとか、切取られたとか、消滅せしめられたのだとか云ふ風に考へてゐる。この去勢に對して責任ありとせられるのは、例外なく母親であつて、この問責感情がエディポス前期に於ける對母親關係並びにそれの葛藤的な解消と密接なる聯關あることは明かである。このハンディキャップが少女達に依つて素直に承認せられると云ふことはなかなかあり得ない。彼女等は何とかその埋合せをしようとして種々の試みを形作る。卽ち、ペニス様のもの（クリトリスがそれとして見られる）がやがて生長してそれになるであらうとか、肛門的空想に依つて自然に生じた糞便塊を以てペニスに擬したり、或は父親が子供にペニスを與へるであらうとか、云ふ風に……。約言すれば、總てこれ等の空想（生育、自然發生、贈與など）は段々分裂して行つて、ペニス缺如のため他のハンディキャップ（例へば尿道性感、窃視慾及び露出慾の禁制、自慰願望の抑壓など）がそこに附隨すると、ペニスのないことの苦痛が愈々堪え難くなつて來る。（ホルニイ女使の研究に依る。）

註　*細部の表現に就いてはカール・アブラハムの古典的研究『女性の去勢コムプレクスの顯現形式』（『國際精神分析學雜誌』第七卷、一九二〇年）に依る。

男兒はその排泄物に對して自己愛的な買被り感を持つものであることは誰しもよく知るところである。例へば、彼

等は常に小便ごつこなどをして得意になつてゐる。この買被り感、並びにそれに聯關ある幼兒的全能感は、女兒に於いては見られない。それのみならず、男兒は排尿に際して自分の性器を見せることがある。さうして自分でもそれを眺め、公然とそれを眺めてゐる。云はゞ彼等は排尿の度毎に自然にその性的好奇心を、それが自分自身の肉體に關係してゐる限り、滿すことが出來る。それから最後に云つておかねばならないことは、男兒等は排尿に際してその性器を把握することが出來ると云ふ事情が、女兒等にはその自慰の許容せられてある如くに觀ぜられると云ふことである。立小便をすると云ふことがさう云ふ女兒等の願望であつて、その願望は試みられることもあるし、また夢に出ることもある。

女子の去勢コムプレクスは正常に發展して行けばどうなるかと云ふにそれは女性的・受働的(部分的には被虐性的(マゾヒスチック))な性役割を甘受することになる。その役割はペニス=子供の迂回路を辿つて達せられるのである。本源的にはこの子供への願望は父親に向けられるが、たゞ後に至つてこの願望は父を離れて夫に向けられることになるのである。

去勢コムプレクスから發展し來る、神經症的副産物は、アブラハム說に依れば、二群に分つことが出來る。卽ち、願望型と復讐型とである。前者は無意識的なペニス願望を示し、後者は女の役割の無意識拒否となり、「愛する」男に對する復讐衝動が一層顯著となる。これ等二群の間の截然たる區別は存在し得ない。

女性の去勢を拂拭せんとの最も徹底した願望充足は、彼女等がその女性たることをその正反對に轉換せんとする症候行爲となつて現れる。この種類の最も見事な實例は、ファン・オフイイゼン (Van Ophuijsen) の報告してゐる或る婦人患者の場合である。

これと同じ群に屬するものに「男性的」婦人等の或る態度がある。卽ち、彼女等は服裝や頭髮の刈り方や、步き振りや態度や、知的な興味や職業に於いて男子の眞似をするのである。この態度は併し、無意識的である。かう云ふ種類の婦人は意識的には大抵、男女の別は無意味であると云つてゐる。

著者の一人が嘗て分析したことのある、この種の或る婦人患者は、その兄弟が支那服を纏ひ辨髪を垂れてゐるところを夢の中に見た。この夢は男子同胞を引下げる（ボインの習俗に於いては、支那人であると云ふことは輕蔑を意味してゐる）ものであると共に、窃視慾を満たしてゐるものでもあるが、なほその上に次の事を意味してゐる。男のくせに婦人服を着たり辨髪を垂らしたりしてゐるくらゐだから、女だとて婦人服を着てゐても男になり得ないわけはなからう、と。

今一人の婦人患者は衣裳會の時にカウボイの服を着、長い鞭を持つて出た。別の婦人患者は小さい散歩杖を持つて行くことを好み、かうもり傘は「如何にも」女らしいとてこれを輕蔑した。

こゝにも一つ擧げておいてもよいと思はれるのは、數年前に屢々見られた或る神經症的な婦人等の斷髪恐怖である。二人の婦人患者は少くとも二十回は理髪師の前に座して見たが、いざ鋏が髪に翳されると又しても恐怖のあまり飛上るのである。これは頭髪＝ペニスの典型的象徴的意義を無意識裡に發見したゝめである。これは審美的見地から頭髪の美に未練があるためだと理窟付けられてはゐたが、實は去勢不安の防禦である。

ペニスの Erschlaffen は二重の意味に於ける去勢として考へられる。卽ち一方、自分のペニスが去勢せられたとして考へると共に、他方相手のそれを去勢したと考へる。女は自分の男性たることの空想が妨げられない限り亢奮する。女は、云はゞ自分が只今保有してゐるペニスが失はれることになる時に、亢奮を失ふか、「行くところまで行かない」と云ふ感じが屢々起きて、それがために

これはペニスを保有してゐることが出來ないと云ふ無意識的不安から生ずるのである。（ライヒ說。*）なほ、ライヒに依つて擧げられてゐる、女の性的不能の今一つの契機は、オルガスムスへの不安であつて、これは最深部に於いては去勢コムプレクスと關聯してゐるのである。——

註　*『オルガスムスの機能』（Reich: Die Funktion des Orgasmus, Intern. psychoalyt. Verlag, 1927.）

總てこれ等の婦人が外見的に男性的な態度を持つてゐると考へるならば、それは誤りであらう。種々な意味で、これ等の婦人は徹頭徹尾女性的な印象を與へるのである。男性化的願望は全然無意識的である。

この患者に於いて分析中に非常に判然と觀察せられるのは、ペニス願望が放棄せられ、男性的傾向が斷念せられてゐると云ふことである。或る日その患者は、その當時既に回復しつゝあつたのであるが、次のやうな症候的な行爲をなした。即ち、彼女は自分の着物の下腹の眞中の邊に垂れ下がつてゐるバンド(當時は金色の條の這入つた革製のバンドが流行してゐた)の、丁度××の前のあたりを剪刀で切つた。また治療を受けてゐる間の彼女の夢にも、ペニスへの斷念の認識に於いて同じ方向を示したものが見えてゐる。例へば、(一)彼女は病院で、子宮の故障のために手術を受ける、それはペニスの如くワギナの中から隆起してゐる。(二)彼女は齒に塡物をして貰ふために齒醫者の許に行く。醫者は下顎から四五本の齒を拔きとる。患者は驚いて眼をあけて見上げると、それは分析者であつた。(ずつと以前の夢に於いては、患者は男の齒よりももつと大きな齒を誇りかに示すのであつた。)*

註* 精神分析の病歴中からこのやうな短い拔粹をすることは、分析者が分析の後に時々書き留めておく短い覺え書きに相當する。分析中に覺え書きをするのは不適當である。

神經症者は個々の器關をペニスの代償として過大に評價するものである。それは「下方より上方へ」の轉位に依るものであつて、鼻、眼などがこのやうな機能を引受けるのである。

第四章に報告せられてゐるB患者の場合に於いては、就中、眼がまたペニスの意義を帶びてゐるのである。

男は屢々生物學的必然として比較的大目に見られるが、女に對してはさうでない。處女出產の空想は「女は一人で

何事でも出來る」と云ふ方法をとつて築き上げられる。このやうにして人々は屢々、子供への女の願望が全然男に關係なしに立てられるのを見るのである。男はこのやうに生殖行爲にも、肉體上に閉出されるのである。

この種の病氣には、分析治療の見込は十分にある。

第三、 エディポス定着型に去勢復讐型の附加したるもの。

この型には二つの無意識的な傾向が目立つ。卽ち、男性への復讐慾と、彼のペニスを暴力的に奪ひ取りたいとの慾望とである。

この型に屬する四十二歲の或る婦人患者、憂欝症と仕事の障害と自殺觀念その他のために分析を受けに來たのであるが、彼女の主張するところに依ると、一切の男子は不能症であると。かゝる主張はあまりに極端であると分析者が云ふと、患者は立ちどころに彼女が關係した男たちの名簿表を擧げた。總てこれ等の男たちは、二つの條件を具へてゐた。――不能であると共に、他方何からの點で病氣であつた。分析して見て判つたところに依ると、彼女は本能的な正確さを以て、不能にして病氣なる男を選擇し、それと關係を結んだのであつて、彼等が不能であり病氣であると云ふことは、彼女の去勢への無意識的復讐心を滿たすものであつた。

これ等の婦人は意識的にも男性に對してさまざまな形で非常に大きな憤怒と攻擊慾とを持ち、男のことを引下げて物云ふことを好むのである。例へば或る婦人患者が街の一角に立ち、非常に繁華な交叉點を交通する人々に對して交通巡査が信號を與へるのを待つてゐる時に、彼女の前に立つてゐる男が巡査の信號に直ちに從はなかつたので、彼女はその男の背中を小刀で突刺してやりたい衝動を覺えた。この婦人の大好きな空想は、ヴイン全體が空中に爆破してしまふことだ、さうなれば一切の男性が「くたばつてしまふ」からである。

さう云ふ加虐的な婦人たちが四肢を切斷せられた男、或は何らかの點で病氣の男に對して好んで親切を盡すのは、右のやうな事情のためである。

第四章に於いて引合ひに出してある患者Bはトルラーの『ヒンケマン』(Tollers „Hinkemann“)を讀んで非常に

感動を受けた。それは主人公が性器に於いて不具になつてゐたからである。

このやうな婦人等の無意識にとつては「傷ついた」男は去勢された男として考へられるのだ。他方に於いて、無意識的に自分自身の去勢の外傷は他人の去勢に依つて帳消しになるのだ。つまり、「發散（アブレアギーレン）」せられるのだ。このやうな婦人はとかく病人や、切斷手術を受けた者や、その他に惚込むやうになる。同じことはまたアーリアン民族の女たちのユダヤの男たちに對する偏好に於いて起ることが屢々である。ユダヤの男たちの割禮がアーリアン民族の女たちには去勢として感ぜられるのだ。

同樣なことはまた、攻撃的・冷感的のヒステリー女たちが受動的・女性的の弱い男を選ぶと云ふ事實に就いても云はれ得る。これ等の婦人たちはその心理の最深部に於いては、加虐的傾向ある男として無意識的に空想せられてゐる父親に執着してゐるのであるが、併し無意識的な罪障感からして、また意識的な警戒心からして、精力的・活動的な男を避けて、これを遇するには憎惡と輕蔑とを以てするのである。下積になつた母親の運命を自分自身も繰返して辿ると云ふことは、彼女等の肯んぜざるところである。*

註* バハオーフェンの『母權制度』（Bachofen, „Mutterrecht“）に、「婦人を淫婦として引下げた時代の後に、男性的な戰爭好きのアマゾンの時代が來た」と說いてあるのを參照のこと。

また別の患者に於いては、彼女等の**能動的な去勢願望**が止め度なき性的欲求となつて現れることがある。それは彼女等が滿足してゐないことを示すばかりでなく、就中、相手を「參らせ」てしまふ、つまり不能にしてしまはうとするものである。更に一歩を進めたものとしては、相手を亢奮させておいてあとは立往生させると云ふ手がある。また間接的な衝動としては、夫を打つたり噛付いたり（口唇加虐性）するのがある。このやうな去勢願望を實施する今一つの無意識的技法としては、性行爲を卑しいとして拒ける手である。このやうな神經症的な性拒否は相手に對して快樂減少の效果を及ぼす。何となれば、男性の性能力も女性の良感と同じやうに心理的影響を被るものであるからである。

かくて男子の性能力の障害は生ずるのである。

多くの冷感症婦人にとつては、彼女等の對男性加虐慾は單に結婚不安又は性行爲不安として意識せられる。「もし私に失望させるやうならば、夫を殺すであらう」と云ふのが、この種の婦人の口癖である。その背後に、就中、夫に對する加虐的衝動の防禦が隱れてゐる。或は「夫を失望させる」との不安が前景に押しやられて出て來てゐる。このやうな婦人は受動的、女性的な男たちの大勢に交渉を持ち、何れに對しても、コイトスの後に、彼等が女に滿足を與へることの出來ないことに就いて、一々槍玉に上げられる。

冷感症の婦人たちは、迅かにその愛人を取換へる。何となれば、彼女等の意見に依れば、自分の方に手應へのないのは、自分のせいではなく、男の方のせいであるからである。彼女等は最近に出來た相手に對して、コイトスの後に、いつもきまつて云ふ、「あなたは他の男たちと同樣に、やはり女に滿足を與へることが出來ない」と。偶然、彼女が劣等感を持つてゐる男に出會して、右の言葉を本當だと云ふやうなことがあるならば、患者は復讐の快感を覺えるのである。

この復讐傾向はまた性格的な形で現れることがある。夫に莫大な金を使はせ、その「財產」（無意識的には性能力）を彼から引離してしまはうとする女が多い。また多くの女たちの時間を守つたりすることの不正確さは手のつけられない場合があるが、それはやはり右の類に屬するのである。女が性行爲に際して待つてゐる態度に强ひられるのは、この事實の裏返しである。日常生活の多くの機會に於いて、女は夫を待たしておく。或はコイトスを出來るだけ長く斷つてゐることがある。それからその行爲を全く事務的に行ふのである。或る女は夫に對して「もう濟んだの？」と極めて皮肉に尋ね、また別の女はわざとらしく家事上の相談を持出したりする。

コイトスの間にもその後にも、これ等の婦人には一切の感傷愛が缺けてゐる。屢々男たちは不當にも、その「野獸性と無遠慮」とを難ぜられ、「始終あんなこと」（と云ふのは勿論分つてゐるが）を要求すると責められる。一切の豫備快感や種々な愛撫行爲は拒けられ、そんなことは賣春婦のすることとですと一蹴せられる。

屢々また、生れながら肉體上の缺陷があつて、それが彼女のナルチスムスを傷けてゐると、それが夫のせいだとせられることがある。

或る患者は結婚前に、大學教育を受けた男と情事があつた。併し彼女は氣のいゝ、粗野な、且つ首都には住つてゐない或る商人を夫として選ぶことになつた。この結婚に依つて、田舎の富有な商人が、戰爭中に破産してしまつた父親を助けてくれることになるわけであつた。敬愛する父親のためのこの犧牲は、極めて自然なことに思はれたが、併し現實は復讐に依つてこの事の不自然なりしを證明した。患者の青春期は父親への定着に滿ちてゐた。彼女の最初の求愛者を拒け、一切の戀愛關係の途上に立塞つたこの粗野な男は、やはり彼女の無意識理想であつたのだ。確に、彼女は一切の性愛は罪惡だと感じてゐた。殊に料理用のスプーンの柄でなした少女期の惡戲は罪惡感をあとに殘してゐた。で彼女は結婚に於いてたゞ感傷愛をのみ求めてゐたのだ。ペニスを持たない男をのみ求めてゐたのだ。ペニスはまた排尿にも資すべきものであると云ふことは、彼女は考へたくなかつたのだ。彼女はたゞ自分の身體にのみ惚れ込んでゐた。その身體は子供を生んだために、老け、且つ駄目になつてゐた。就中いけないことは、彼女の乳房がだらりとなつてゐることであつた。彼女の內にある何物かゞ出産のために破壞せられた。その時以來、彼女は屢々、自分が再び少女に返つたと云ふ樂しい夢を見た。目が覺めて夫が側に寢てゐるのを見ると、全世界が見知らぬところのやうに思はれ（非人格化）、夫は嫌惡の對象となる。夜中の活動を想ひ出して、彼女は「何か或る力（父親？）が自分に乘り移つてゐたかのやうに」思ふ。お産の苦を味つて以來、夫から氣持が離れた。コイトスの後にたゞ復讐と憎惡の感情を持つた。時として思ふことは、自分の結婚生活に缺けてゐるものは、自分を始終打擲してゐたつらい父親の缺けてゐることであると思ふ。父親が「外套に乘つて飛行し」この結婚生活から自分を救ひ出しに來てくれるやうに空想する。彼女の結婚の幸福はたゞ二ヶ月續いたゞけであつた。崇拜的に夫が取扱つてくれるならば、滿足したが、姙娠させられた時には夫を敵視した。要するに、冷感症によるこの不幸なる結婚の場合は、次のやうに說明することが出來る。――

虛榮心の強い、暴君的な父想から鐘愛せられたゝめに、そのナルチスムスとマゾ スムスとを强められた少女は、父親に定着し、何の愛情をも持たない男と、父親のために金故の結婚をした。初めには多少色氣の芽生えも見えたが、併し他の男たちに比べて夫が餘りに粗野である上に、田舎での生活、父親からの隔離などの不平が重なり、その上姙娠や出産の苦痛、就中そのために身體が不具的になることなどを思ふて、夫への反撥と內的拒否とを覺えた。出産のために損はれるとの感じに、ペニスがなくて不完全であるとの幼兒期の思想と結びついたのである。（去勢コムプレクス。）理想化せられた父親と比較せられたのでは、夫

たるものはたまらないが、これはヒステリー特有の空想傾向、現實逃避傾向、苦痛拒否傾向であり、夫及びその環境に對する防禦感情に外ならないのである。元來、道德的マゾヒスムスの性向の強い彼女は、分析を終りまで受けることをしないで、受難的な生活の中に這入つて行つた。その父及び冷淡な母の上品ぶつた育て方に對して、また冷やかな田舍くさい夫に對して復讐するために、身を持崩し、かつて落着きと平和とを得たことがなかつた。

またその他の種々な場合――これ等の場合に於いて女の去勢コムプレクスが如何に廣汎であり如何に變化に富んだものであるかゞ分るのであるが――夫が性的に近付いて行く事は許される。但し、彼は性器を避けねばならない。そこは怪我をしたところでいやなところと考へられてゐるのである。そのやうな場合に於いては、リビドーは他の性的帶域（口唇、肛門）に轉位せられ、かゝる轉位の無意識的理由は、それが性器前期時代の口唇時代の名殘りがそこにあるがためのみならず、またこれ等の器關は女性特有のものではないためでもある。屢々種々な獨尊自愛的な空想が築き上げられ、且つ實行に移される。例へば、男を誘惑しておいて彼が性的慾望を起しさうになると肘鐵を喰はせるのである。このやうに性交を輕蔑的に拒否することに依り男を侮辱することが女にとつての滿足であり享樂であるのだ。このやうな女は夫に向つて「この豚は始終こんなことをしたがる」などゝ云ふ。

次の場合は冷感症に依る娼婦型の一實例である。

子供を育てる場合に、冷感症の婦人が性を嫌惡することは、特に痛ましい結果を招くことがある。彼女等はその娘に對し、男と性交とを憎み拒けるやうに訓練するのである。第四章のBの場合に於いて、母親が患者に、性は汚らはしい行ひであつて、それは男が自分の快樂のために女を供してこれを侮辱するために發明したことだと吹き込んだのである。

今一つの場合は復讐感と拒絶とが如何にして克服せられるかを一層明かに示してゐる。――

子供の時分にその女患者は上下に男女一組づゝの同胞があつて、その間に狹つて孤獨であつた。彼女は常に男兒のやうに振舞ひたいと思つてゐた。何となれば、兩親が彼女の代りに男の兒が生れゝばよかつたと思つてゐたからである。殊に父親は彼女が娘であつたので失望してゐた。彼女は精力的な、自負的な男を見ると我慢がならなかつた。彼女の見るところに依ると、大部分の結婚は「女が蹂躪せられてゐる」が故に不幸であつた。まだほんの小娘の頃に彼女は「自分だけは彼等に蹂躪せられない」と考へてゐた。男が近付いて來ると、彼女は憤怒に滿ちた。彼女は常に不幸な妻君たちを招いて彼女等に「脊骨を與へる」(「硬骨にする」の意、分析的には「ペニスを與へる」の意)を好んだ。彼女の母は寡婦になつた時、もう結婚なんか斷じてしないと宣言した。母の感化の下に彼女は「子供を持つためには、子供の母たるに價するためには、私たちは絕對に純潔でなければならない」との思想を抱くやうになつた。彼女は純潔無垢なる懷姙と云ふものがあるとの空想を持ち、男との性交渉は常に邪惡なものだと考へてゐた。夫は單に子供への手段たるべきであつた。彼女は方便的に女のやうな男と結婚し、六年後に別れた。既に結婚の夜に於いて彼はクンニリングスを行つた。苦しい破瓜の二週間後に於いて、彼女は深い失望を感じ、嫌惡に充たされた。彼女は

あらゆることに夫を牛耳り、夫は受動的な態度に出てゐた。今では彼女は一人の愛人を持つてゐるが、その人は彼女には男らしい人に思はれた。さうして彼に依つて性的に滿足を與へられたく願望し、さうして彼に依つて一兒を得たく思つてゐる。――治療せられたいと云ふ氣持はこの患者に於いては强かつた。醫師に對する患者の期待は熱心であつた。

分析中の彼女の最初の夢は次の如くであつた。

それに對して母親は答へる。「私は部分的にだけ男なのだよ、そして何でもかでもをお前に與へることは出來ない」と。患者は夢の中で考へた、「私の愛人が與へてくれるものに比して母の與へてくれるものは何であらうか」と。分析の實際に習熟した人々は、この夢のやうに母に一種の性器があると考へるのは同性愛の夢であると解する。別の二三の夢に就いて見ると、患者が自分の男性的傾向を、以前には持つてゐたペニス願望を直ちに放棄せんとの用意あることが分る。このペニスが缺如してゐることのために、彼女は以前には一切の男性に對して反感を持つたのであつたが……。最後に同性愛的の夢が現れた。――

彼女は屢々思つた。（と患者は付け加へた。）彼女の愛人に對してむしろ能動的な立場をとり、コイトスに際して男の立場にとつて代りたいと思つた。

男根切斷の夢――「患者は姙婦の服を纒うて劇場内にをり、生れ來る赤ん坊に就いて非常に喜んでゐる。彼女は自分の耳飾りに手を觸れた、併し眞珠はこぼれて手に落ちた。彼女のブローチも破損し、片々になつて落ちて來た。始めに眞珠が落ち、次に小環が落ち、そのために彼女の服は胸のあたりではだけた。彼女は屢々、齒が手にこぼれる夢を見た。彼女の骨も砂のやうに散つた。父を思はせる彼女の愛人に對して受容的な氣持があるに拘らず、また始めて完全に愛を覺えてゐるに拘らず、今や三十五歲になつてゐるこの婦人は彼女の冷感に依つて大いに障害せられた。愛人に對して豫め内的の動悸を感ずるのは、彼女が我慢のないためであらうか？　こゝで人々は女の早漏を云々せんとするかも知れない。復讐型の男性コムプレクスが不成功の結婚のために一層强められたのが、この知力的な婦人に依つて比較的短時日の間に克服せられ、かくて彼女はコイトスに於いて女性的となり、オルガスムスの滿足をも完全に得るやうになつた。併しながら彼女はその性格的特徴をどうやら保持してゐたらしく、彼女の二番目の夫となつた男をも常に喜ばせると云ふわけでなかつた。

分析的に治療せられたるワギナ的冷感症の一患者の場合からの次の抜粋は、これが他の多くの患者の場合と違つてゐる點のあるがためにこゝに提示して見たのである。その違つてゐる點と云ふのは、主要性帶域がクリトリスからワギナに變化すると云ふことがそこに何の役割をも果してゐない點である。

まだ極幼なかつた頃、彼女はその姉を羨み、更に兄の方を一層羨んだ。兄は彼女より十歳年長で、常に彼女を虐めてゐた。自分の毛が薄かつたことなどのために劣等感を持ち、自己不滿に陷り、多くの誘惑的行爲に依り自分が魅惑的であると云ふことを證明せんとしたのは、極めて早くからであつた。多くの男たちを亢奮させておいて、すつぽらかした。父親は巨人のやうであつたが、それが粗暴に可愛がつた。父は彼女が男の子であればよかつたと云つた。彼女の口唇的定着は彼女が二歳になるまで指しやぶりを續けてゐたこと、及び接吻に依つて甚だ亢奮し易いことに於いて現れてゐた。彼女の肛門定着はそこに於けるオナニーに依つて、幼兒期記憶の執拗なることに依つて、また頑強な便秘などに依つて察せられた。

コイトスの間に彼女はペニスが自分の内に殘つてゐればよいと願望した。それに依つて自分が完全になり、そのところが充足するやうに思つた。行爲中に彼女はその夫の顏を覗き見し、自分には拒まれてある享樂を夫のみが得るのを肯んじなかつた。夫は彼女には印象するところなかつた。彼はあまりに小男で、何事にかけても自分より優れてはゐなかつた。彼女は逃込場所を求めてそんなに早く結婚したのだ。何となれば、自分のことを魅力的でないと思つてゐたからである。分析を續けてゐる間に、患者は性的滿足を得ようと望んでゐないことを知るやうになつた。何となれば、さうなれば「男を牛耳ることが出來なくなる」ことを恐れたからである。更にまた、「男は自分に滿足を與ふるに慣せず」との感を益々深く彼から受けることを匿さうとしつゝあつたことを知るやうになつた。ペニスが自分の内に入ると。それを自分で取つてゐる、呑込んでゐると云ふ感じがした。コイトスは男を不具にすることのやうに思つた。自分がヒタと彼に吸付いてゐるやうに思へた。——彼女の夢は口唇的であり、肛

門的であり、また時には活潑に同性愛的であつた。もつと屢々見るのは、種々な男（その内には×も這入つてゐた）との××な夢であつた。――これは十八歳になる不幸な婦人で、結婚してゐながらオナニーし、離婚せられることを望み、不親切で、嫉妬的で、家庭婦人としての役目を果すことが嫌いで、氣が小さくて仕事するのが厭であつた。――分析に依つて親切になり、家庭婦人らしくなり、教職にいそしむやうになつた。彼女は一兒を得ようと決心した。さうして精神分析の恩を感じ、それを支持してゐる。彼女がその後完全に性的滿足を得るやうになつたのは、分析のお蔭であると感謝してゐる。

右の如き場合に於いては、分析の治療は效果がある。

第四、ワギナに於ける不隨意的筋肉緊縮の苦痛あるもの。

ワギナに於ける筋肉緊縮の苦痛ある所謂ワギニスムスは、前に述べたエディポス定着型に去勢復讐型の附加せられたものゝ最高の力强い顯現である。ワギニスムスの傾向ある婦人は沒入を許さざるのみならず、もし沒入したならばそれを押へて放さぬと云ふわけである。別の云ひ方をすれば、相手を去勢し、女性的な性的役割を拒否する無意識的傾向が現れてゐるのである。この場合に於ける男の去勢は、括約筋に依つて直接的に企てられてゐるのである。更にまた別の云ひ表はし方をするならば、ワギニスムスは男性拒否の最も端的な、生理的表現である。

或る患者の場合に於いて、その夫は約半年間ほどいろ／＼に手をつくし、また別の患者に於いては四年間手をつくし、その結果遂に女の方から分析を受ける決心を固めて來た。何れの場合に於いても、ワギナは醫師たちによつて「擴大」せられてあつたがかゝる虐待はナンセンスであつて、醫師等が單にワギニスムスの精神生理的起源を理解せざることを示してゐるに過ぎない。ワギニスムスを有する婦人たちは破瓜への誇張せられたる恐怖を有し、破瓜は彼女等の空想に於いては粉々に片々に引裂かれると云ふ風に考へられてゐる。

多くの原始民族の間に於いては、フロイドがその論『處女性のタブー』の中で指摘してゐるやうに、破瓜は夫に依つてなされず、王侯、僧侶、老女などに依つてなされたと云ふのは興味あることである。かくの如くにして夫は一つの危險から守護せられたのである。その危險とは、婦人は始め幼兒期空想に於いて去勢せられたと感じてゐるのに、初夜の破瓜は第二の去勢として感ぜられて、こゝに妻の攻撃慾と復讐慾とは無意識的に反應し來るからである。初夜の後に見た最初の夢を多くの花嫁に就いて分析的に調べて見た人々の報告を見るに、そこに去勢願望が活潑に現れてゐることが異口同音的に述べられてゐる。

時として或る婦人は最初の結婚に於いては冷感であるが、第二の結婚に於いてはさうでない。「古代的反應は最初の對象に就いて解消してしまつたのである。」（フロイド）性的感覺が子供の生れた後に現れることも同樣に稀である。ワギニスムスが分娩の後に（併し冷感症は消失しないで）解消すると云ふことも稀である。これを心理學的に說明するには、早期に子供とペニスを無意識的に同一視したことにまで溯る。子供が生れゝば冷感症もワギニスムスも癒るからと云つてきかす醫師が多いが、さう云ふ說は拒けられねばならない。經驗に徵するに、このやうにして「癒つた」婦人の數は極めて少いが、併しこのやうにして望まぬ子供を受胎して神經症となつたものゝ數は甚だ多い。

ワギニスムスの婦人たちは、殊に月經期に於いて攻撃的であり、加虐的である。正常の場合に於いても、月經は無意識的には去勢空想の記憶を呼びさまし、多くの婦人が月經期に於いて惱む鬱憂症狀態はこの方面から說明がつくのである。（婦人たち自身の理屈づけはこれとは甚だ違つてゐる。）これの背後には、ワギナを以て血を流す創口であるとする考へがひそんでゐる。

ワギニスムスの病癖ある或る婦人患者は月經前の期間に於いてそんなことゝは露知らぬその夫を散々に打擲した。何となれば、彼女は夫の素振りをコイトスへの要求と誤解したからであつた。「妻は忽ち夜叉のやうになり、打ち、嚙みつき、咆え、まるで氣狂ひのやうであつた」とその夫は報告して居る。

冷感症及びワギニスムスの心理的性質を知るために甚だ有益で重要なのは、結婚後しばらく經つまで病氣が顯現せ

ず、或は微弱であつた如き患者の場合である。

ワギニスムスの病癖ある或る若い女が結婚の丁度始めに破瓜せられ、姙娠したとの空想を持つと共に子宮搔抓をなした。その時始めて、明かに姙娠忌避も條件となつて、ワギニスムスが現れて來た。それは新婚の夜の失望（苦痛、强迫）への反動であつた。（處女性タブー。）患者は以前から自分に觸られることに恐怖と嫌惡とを示して居たが、灌腸をして泣き出すし、手術は極度に恐ろしがつた。

ワギニスムスに對する分析の治療效果は概して良好である。併しながら内には無意識復讐傾向があまりに强烈であつて、患者たちがこの滿足を放棄せんと欲せざるものがあるのである。

或る婦人は結婚後數年になつてもコイトスをなすことが出來なかつた。彼女に於いては去勢願望が熾んである側に、治療への一つの超え難い障碍は父親に對する復讐を果す必要があつたことであつた。その父親は患者のエディポス・コムプレクスが絕頂に達した時に、患者の母を離別して第二の母を娶つたのであつた。「よくもこんな目に會はせたな、今に見ろ」と云ふのが患者の生活及び願望の無意識的內容であつた。無意識的動機からして患者はやがて間もなく分析處置を中斷して了つた。治療の中絕の一つの動機は彼女のナルチスムスであつた。頗る美人で多くの讃美者を持つて居た。この患者の場合、及びこれに類する場合には、量的要素もまた分析の歸結を決定することが分るのである。

第五、 肛門虐待的（强迫神經症的）冷感症。

冷感症は婦人の强迫神經症の部分的現象として常に必ず隨伴するものである。これ等の婦人は一般の性標準にまで達してゐないか、或は早期の肛門虐待的水準にまで退行してゐるのである。無意識空想は肛門的性格を具へてゐる。

著者の一人ベルグラーがかつて『國際精神分析學雜誌』に發表した論文『肛門的本能亢奮に就いて』に於いて言及した一患者があるが、その患者は他人の前で放屁しさうな强迫的恐怖を感ずるのであつた。その症候の意味は重複決定的であつた。上述の論文に於いては多くの要素が擧げられるが、その本質をなすのは肛門性感論であつた。例へば、患者が近付き來るあらゆる男性に對して反應する防響は全然肛門的であつて、放屁又は放屁願望が强迫的に生じて來るのであつた。

强迫神經症的な性感不良に關する特別の困難は、これ等の婦人が强烈な無意識的同性愛を有してをり（無意識的に自分を男と考へてをり）從つて、攻擊慾と加虐慾とを有してゐることである。これ等二者は正常なる婦人的役割を果すに適當せしめないものである。

或る强迫神經症の婦人に於いてはワギナは時として男性的器官であるかの如くに用ゐられ、さうして男性的な意味でオルガスムスに達することがあると報告してゐる學者がある。これは敵視してゐる男性に同一化してゐることである。分泌の盛んなるは男性の射精への模倣である。我々はまだこの型のオルガスムス的能力を有する婦人を觀察したことはない。

肛門加虐的冷感症への分析效果は疑はしい。

第六、 被虐的機制を伴へる冷感症。

この項目下に於いては吾人は被虐的傾向を共通に有する二種類を分つことが出來る。卽ち、（イ）幼兒期に於いて暴虐的取扱ひを受けたりとの空想より生じたる不安快感の定着ある婦人。これ等の婦人に就いては、性的享受は不安快感の純粹に被虐的期待から成り立つてゐる。（ロ）被虐的の正常女性的體驗を逃避せんとするもの。

（イ）不安快感の定着。

あらゆる少女は或る段階に於いてコイトスを父親の殘酷な、加虐的行爲として考へ、それに對して慄れな、無力な母親は犧牲にせられるのだと考へることを知つてゐる。少女は母親に同一化し、彼女がこの同一化に依つて覺える恐怖は第二次的に性慾化せられ（「恐怖の色慾化」）、さうして恐怖に於ける被虐的快樂として旣に空想中に於いて享樂せ

られてゐる。もし少女がこの點に於いて定着してゐるならば、彼女は正常のワギナ的オルガスムスに到達することは出來ない。それはエディポス空想と結びついてゐる罪障感に依つて妨げられるからである。性感の快樂的要素はたゞ不安快感、又は不安快感の期待としてのみ殘るのである。

「不安の色慾化」の全問題はこの種の冷感症を理解するに不可缺なものと思はれるが故に、優秀なるパリの同學ルネ・ラフォルグ博士が『國際精神分析學雜誌』（一九三〇年）に寄せた論文『不安の色慾化に就いて』の一節をこゝに拔粹しておく。これ等の條件の精細なる臨床的記述は氏に負ふものである。ラフォルグは何よりもまづ不安色慾化の事實を確立するに示唆するところ多き種々の病歷を以てしてゐる。曰く「多くの患者の場合に於いて、不安が色慾化して、互に滿足を求めて相鬪爭する種々のリビドー的傾向の間の唯一の可能なる妥協を表はすやうになるのでないだらうか。またさう云ふ妥協として正常のオルガスムスへの代償となるのでないだらうかと、我々は自問して見なければならない。正常のオルガスムスに比較して見れば、さう云ふ代償は到達し得べき最高の理想であると考へられる。大人のコイトスを見た子供等がオルガスムスを元來恐怖として解釋し、從つて恐怖はこれ等の患者たちがそのリビドー滿足に對して持つた唯一の型となつたのであらうとの假定をラフォルグは下してゐる。そこで、恐怖として理解せられたるこの最初の性的亢奮は定着となり、「エディポス的事情に於いて定着として殘つてゐるリビドーに對する滿足ともなり、懲罰ともなつて役立つ」のであらう。それ故に不安神經症に於いては、不安の症候はまた願望の充足ともなつてゐるのであらう。さうして不安を生ずる影像は無意識的に願望せられたる不安を生ぜしめる手段となり、そこにはまた常に第二次的快感の本能感情に導きさうな何物かを意識的に排除する必要も伴つてゐるのであらう。何となれば、この本能感情はエディポス・コムプレクスに結び付いてゐる罪障感を觸發する結果になるからであらう。或る犯罪行爲は懲罰への必要に役立つのみならず、恐怖及び懲罰を緩和するに役立つ。この場合の恐怖は豫めの快樂に類するものである。懲罰は窮極の快樂に類するものである。多くの人々は不斷にグランド・グィニォルの場面を演じつゝあるのだ。恐怖は彼等にとつてはオルガスムスと同じものになつてゐる。ラフォルグは遂に結論して云ふ、或る患者

にとつて恐怖は危險への反應であるばかりでなく、「また多くの患者に於いてはそこに人爲的な、不自然な恐怖と呼ばれ得べきものがある。さうしてそれが色慾的滿足の目的に役立つのである。それのみならず、色慾化した恐怖と色慾化した罪障感との間には密接な關係が存する。このやうにして『良心の咎め』は王侯の如き氣前よさを以て被虐的快樂を供しつゝあるところの暴君である。」と。＊

註＊この一節はベルグラーの原著にはない部分であるが、P・L・ワイル氏の英譯書に附加してあつたので、なるほどあれば日本の讀者にとつても便利であると思ひ、こゝに附加しておいた次第である。（邦譯者）

仕事に對する深刻な心理的障碍を持つてゐる或る婦人患者が分析を受けに來た。實はその直前に彼女は久しく望んでゐた仕事にありつくことが出來たのだ。その仕事にさへありつくことが出來れば、金錢上で獨立することが出來、從つて加虐的な夫から離れることが出來るわけであつたのだ。この夫と云ふのは、世にも稀なる暴虐者であつた。彼女自身の論理的洞察と親戚の者等の切なる勸めに從つて、財政上で獨立することが出來さへするならば直ぐにも夫と別れるやうにするのだと誓つてゐた。ところが、その條件が協へられるや否や、彼女は深い沈鬱に陷り、仕事が出來なくなつてしまつた。ところがこれを分析して見ると、患者はその夫の暴虐を無意識的に是認し、被虐的に享受してゐたことが分つた。夫の暴虐の加へ方は道德的苛責の完全に微妙な體系を形成してゐたのだ。殊に意味深長なることは、患者がその夫に對しては全然冷感であり、彼女の滿足は不安の快感の享受にあつたが、その他にまた懲罰への強い要求があつた。患者がその症候の意味を理解した時、彼女は間もなくある口實を構へて分析處置を放棄した。この患者の場合は、終りの頃には變態的被虐性へと密接に近づいて行つた。本來彼女の道德的被虐性及び色慾的被虐性は全然無意識的であつた。

今一つ似た樣な患者を扱つたことがあつたが、その場合も同樣な結果に終つた。

これ等の種類の患者の分析診療の結果は疑はしい。

（ロ）被虐性的、正常女性的體驗からの逃避。

この型に關してヘレーネ・ドイチはその論文『女性的被虐性並びにその冷感症への關係』（『國際精神分析學雜誌』一九三〇年）の中で注意を促して曰く、母の性的體驗を特に被虐的に考へてゐる少女は、この母の體驗を拒否することも特に强烈であると。危險を齎す如き、被虐的な願望充足への不安からして性は拒否せられる。正常の場合には、男

根的傾向の能動的壓迫の代りに被虐的空想が這入り込んで來る。――「私は父さんに去勢――克服――せられたい。さうして××を持ちたい。」と。この去勢・克服・分娩の三位一體は明かに被虐的性格を帶びてゐる。被虐的傾向が抑壓せられる結果、病理的な場合には女性的自我への强烈なナルチスティツシュな纒綿が現れて來る。女性的自我はエスの被虐的傾向のために脅威を感じ、ナルチスティッシュな防禦的地位に已れをおくやうになる。――

破瓜及びその苦痛に對する被虐性的不安は屢々極端な割合に達する。それが被虐性的空想に依つて誇張せられるためである。出産もまた重大な損傷、被裂と云ふ風に考へられて、頑强に拒否せられる。性に關聯した一切の接觸を恐怖し、それを苦痛であると考へてゐる婦人がある。恐れてゐた子供が生れると益々夫への憎惡が增してくる。赤ん坊を世話したり哺乳したりせねばならぬことは、愈々自分の立場の惡いことの理由となる。「男が一瞬の快をとるために女は片輪になつたり破滅に陷つたるする結果となる」と云つたようなことを口にするが、そこに如何に混亂があるかは明かである。エスの方では苦痛、受難、攻擊などを願望してゐるが、自我の方ではそれを容認することが誇りを傷けられると云ふその困難が被虐性となつて現れてゐるのだ。時としては、この方面に向ふ早期の亢奮的空想が罪障感のために抑壓せられることがある。もしも被虐的衝動が第二次的で、早期の加虐的衝動のあとに附け加はつたものであるならば、罪障感は前者の方に一層緊密に結び付いてゐる。これ等の被虐的冷感症は、前に述べた願望型、復讐型の精力的な、名譽慾盛んな冷感症とはその本質に於いて異つてゐる。前者は受動的で忍耐的で、受難に喜びを感じないやうに見え、不安的にあまりに敏感で、接觸及び快感增加に對して含羞草(ミモザ)のやうに不安的である。彼女等の夢には屢々種々の失敗が現れる。

この種の患者の治療には非常な困難が橫はつてゐる。と云ふのは、彼女等の被虐性を意識化してやつても、それが相手の加虐に滿足を感じる能力が出て來るとは限らないからである。とは云ふものゝ、時々癒ることはあるのだ。併しながら、その父に依ての如くその夫に依つて打たれることの空想を持つてゐる冷感症の婦人は、その打たれることに依つて性的感應を得るのだときめてしまふわけには行かない。

診療の結果如何はその被虐性の程度如何に懸つてゐる。

第七、ナルチスムス的機制を伴へる冷感症。

根柢に於いて自分自身をのみ愛し、他を愛さうとは思はず、寧ろ自分自身の愛されることをのみ考へてゐる婦人が即ちこの型である。男から望まれるといふことは、この型の婦にとつては、彼女等自身の自惚の評量を意味するに過ぎないのである。

フロイドはその論文『ナルチスムス序說』（邦譯『分析戀愛論』の內）の中で、對象選擇には二種の別――依憑型と自己愛型――ある事を指摘してゐる。依憑型は母の面影に基いて選び、自己愛型は自分自身の面影に基いて選ぶ。人は本來二個の性的對象を持つてゐるのだ、即ち彼自身並びに彼を世話した女である。男と女とを比較して見ると、その對象選擇型の傾向に根本的な相違が（少くとも概觀的には）ある。男に於いては、依憑型に基いての對象への完全な執着が特質的である。そこには性對象の著しい買被りが示され、その買被りは幼兒に本來なるナルチスムスから發現し、それを對象に轉嫁したものに外ならない。この性的買被りからは獨特の、神經症的强迫に酷似した惚れ込み狀態を生ぜしめるに至る。が、女の場合はさうでない。女の場合には、思春期になると共に、本來的なナルチスムスが高まつて來る、これは性的買被りの當然齎す對象執着と相容れざるものである。殊に年と共に美しさがいや增して行くと自己滿足感が生じ、そのために女が對象を選擇することの自由が社會的に制限せられてあることの苦痛が大したことではなくなるのである。嚴密に云へば、そのやうな婦人は彼女等が男たちに依つて愛されるのと同じやうな激しさを以て自分自身を愛してゐるのだ。彼女等には愛する要求はなくて愛せられる要求があるのみである。で、この條件を滿たしてくれる男たちを好むのである。そのやうな婦人は或る男たちには絕大な魅力である。それ等の婦人が甚だ美人であるからと云ふ審美的理由のためのみならず、また彼女等のナルチスムスが、自分自身のナルチスムスの保全を失ひその缺を補ふために對象愛にあこがれてゐる人々にとつては最大の魅惑であるからでもある。

男に對して冷淡になつてゐるナルチスムス的な婦人等にとつても、對象愛へと導かれる一つの路が開かれてゐる。

それは自分の生んだ子供であつて、これは彼女自身の肉體の一部分であるから、これのみは彼女等が完全な對象執着をナルチスティッシュに供し得る特別の對象であるからである。それに加へて（フロイドの最近の補說的論述に依れば）彼女等も自ら母となることに依つて自分自身の母と同一化することが出來るやうになる。實はその母に對しては結婚の時まで反抗を續けて來たのであつたが……。ペニスが缺如してゐると云ふ理由は昔ながらに消失してはゐないと云ふことは、生れた子供が男兒か女兒かと云ふことへの母親の態度の相違に依つて判るのである。たゞ息子への性目的の禁制せられた愛のみが母親にとつては無制限の滿足を齎すものであるのだ。それは如何なる場合にも最も申分のないものであり、あらゆる人的關係の相反並存性を殆ど完全に脫却してゐるものである。母は自分自身の內に抑壓する外なかつた野心をその息子に轉嫁し交付することが出來る。母はその男性コムプレクスの一切の殘滓の滿足を期待することが出來る。フロイドの云ふところに依れば、結婚でさへも、妻はその夫を息子とし、彼に對して母親として振舞ふことに成功するまでは落着かないのである。分析に於いては、ナルチスス型の婦人は治療に對して最大の抵抗を示す。オルガスムスはなくともやはり愛せられてゐるのだと信じてゐることが屢々である。

　これに對して分析治療の效果の擧がるのは、患者をしてそのナルチスムスの補償的性質を納得せしめ、その背後に匿れてゐる去勢コムプレクスを本能感情的に再體驗せしめ得る場合に於いてのみである。

　第八、本能的性格（色情狂的偏執（ニムフオマニイ））の冷感症。

　今や我々がこゝに扱はうとしてゐるのは、殆ど不斷にコイトスへの願望を持ち、從つて相手關はず我が身を提供せんとする類の婦人である。コイトスの間には彼女等は甚だ亢奮するが、亢奮消長の弧線は常に上昇するがオルガスムスに達することはない。コイトスの後に、そこに何ら正常の弛緩がない。常に必ず「神經」的症候（頭痛不眠など）が現れる。

　それが如何なる心理的起源に由るかは、複雜した問題である。オルガスムスに達することが出來ないと云ふことの中には患者たちの廻避してゐる被去勢願望や、父への性願望、母への死願望のための罪障感、夫（父）への復讐とそ

れに伴つて起る娼婦空想などが混入してゐる。

ニムフォマニイ（色情狂的偏執）的特徴を有する或る婦人患者は彼女の始終變つてゐる愛人をコイトスに依つて懲罰してゐるのだとの奇妙な考へを抱いてゐた。その懲罰とは、今は亡き父に對する死後の復讐であることが分つた。如何にしてそれが復讐かと云ふに「お父さんが私を愛してくれないなら私は娼婦になります。さうしてそれはお父さんの責任です」と云ふ風である。同時にまたこの懲罰の中に「抑壓せられたるもの丶復歸」が見られる。懲罰の迂路を通つて父との合一のなき幼兒的願望が現實せられる。併しながらコイトスはオルガスムスがなくては意味ないのであるから無意識的良心の苛責は緩和せられるのである。

また或る別の患者の場合に於いては、彼女はコイトスの後に男から金錢を要求した。純粋の戀愛から關係に這入つたと信じてゐる男を面喰はせ喫驚させることが何とも云へず樂しかつたのである。同時に無意識の去勢影像が金を要求すること丶結びついてゐた。この患者はまたその幼兒期の失望とは正反對のことを行動してゐたのだ。父は彼女に失望させたのであるから、父の影像たる男への興味を合せて、その失望の返報をしようと思つたのである。

男に對する飽くことなき要求を示すこと丶共に、今一つニムフォマニイの特徴をなすことは、クリトリス自慰の決して放棄せられない事實である。同じことは冷感症婦人の多くの型に就いて眞實であつて、彼女等は結婚その他に依つて正常の性生活を營んでゐるに拘らずその惡癖を放棄せず、而もそれに就いて時として壓倒的な罪障感を覺えてゐるのである。

長期の分析を試みるならば、その治療效果は悲觀的ではない。

第九、男根期以前に定着ある冷感症。

第二章の序に於いて論じておいた通り、性器的性慾が完成するまでにはその準備として、口唇期、肛門加虐期、尿道期、男根期の諸段階を通過しなければならないのである。これ等の各段階に於いて、定着（リビドーの固執）又は退行（既に放棄した位置にリビドーが返流すること）の現象が起る。コイトス又はオルガスムスの間に「困つた事になりさうだ」と云ふこれ等の婦人たちの屢々な恐怖の中にこの事實を認識することが出來る。困つた事とは何事かと云ふに、それは糞尿の排泄を意味するのである。今一つ外面に現れる特徴は、間違つた性的理論に固執してゐること

である。

而も他方に於いて、甚だしいが加虐特徴が明かに認められた。最深層に於いては母子間の口唇的遊戯に類するものが存し、その遊戯に於いて男は授乳せられる幼兒の役割を演ずるのであつた。

冷感症が分析に依つて解消するところを見ると、性器前期的定着説の正しいことが切實に證明せられるのである。

現に、强烈な肛門定着を持つてゐる或る婦人患者は、相當分析の進んだ或る中間の段階に於いて、肛門とワギナとの間に强い亢奮を覺えた。その患者は以前には完全な冷感症者であつたが、時々はワギニスムスの徵候を示し、性慾から完全に退いてしまふことがあつた。

この群に所屬するものとしてはまた、以前に論及した强迫神經症者の性的障碍と云ふのがある。

分析診療の效果は區々で、定着の强度及び深度の如何に依る。

第十、 到錯（變態）の冷感症。

加虐行爲だの同性愛だのと云ふ變態行爲を實行してゐる婦人たちは、正常の對象との間に於いてワギナ的オルガスムスを持つてことは出來ない。吾人はこれ等の變態が何に起源するかを尋ねて行くべき場合で只今はないが、たゞ經

驗した事實を述べておくならば、變態の治療は神經症の治療よりも遙かに問題の餘地があるが、たゞ婦人患者たちが自分らの變態の故に內面的に葛藤を感じてゐる場合には、成功の見込みがある。

第十一、神經症の部分的現象としての冷感症。

冷感症を精神分析に依つて治療することが出來るなどゝ云ふことは、一般の人々は殆ど知らないところであるから、冷感症それ自身のために分析處置を受けに來ると云ふ患者は稀である。大抵は何らかの神經症的症候を有するが故に來るのであるが、やがて冷感症も存すると云ふことが分るのである。

或る婦人患者は動物恐怖症の故に處置を受けに來た。分析して見ると、彼女の性生活（彼女は冷感症であつた）は二つの層に於いて起ることが分つた。その夫に對しては冷淡で性拒絕的であつたが、その幻覺的な動物恐怖の中に於いて彼女はその無意識的な攻擊空想（その中心には父想があつた）を生かした。この場合、恐怖は一方に於いて無意識的願望に對する防禦であると共に、他方に於いて內的衝動からの威赫的危險に對する自我の警戒である。同時に彼女の病苦はそのエディボス的願望に對する懲罰の無意識的願望を滿足させるものであつた。意識的にはその患者は症候の故に頗る不幸で、且つ沈欝であつた。

あらゆるヒステリー及び强迫神經症に於いて、吾人は同樣な狀態を觀察する。

多くの恐怖症並びに「運命神經症」に於いてオルガスムスは可能か不可能かの問題に關しては、分析の間でもその說が區々で、或る者はこの種の患者に於いてもオルガスムスは觀察せられると云ふに對し、他の者はその可能性を否定する。如何なる場合に於いても、オルガスムスの發見は寧ろ稀少のことであらう。

外出（臨場）恐怖症の或る患者の場合（ベルグラー稿『外出恐怖症の一患者の分析』精神療法中央雜誌所載）に於いて本人は正常のオルガスムスを持つてゐたが、その病氣の最高頂に於いては彼女はコイトスに興味を失つてゐた。前述の如く、問題は寧ろ稀少と云ふ點にある。一切の神經症にはオルガスムスの障害が伴ふとの命題（フェレンチー及びライヒの共著參照）は、多少の例外はあるにもせよ、なほ妥當するからである。

次に擧げる患者の場合に於いては、外出恐怖は分析中に完全に消失した。結婚のために多くの恐怖と驚きとを經驗したのだ。彼女は常に男兒たらむことを望み、好んでヅボンを穿き、その父の眞似をした。その男同胞はその反對に極めて女性的であつ

た。

患者がその行爲に於いて夫と同一化し、同時に治療の進展をも示してゐる二つの夢があるが、それをこゝに擧げて見る。――（一）彼女は段々狹くなつて行く階段を昇つて行かなければならない。頭がクラクラする。頂上に非常に狹い場所があつて、そこを通つて行かなければならない。子供が頭から落ちて行くのを着物を摑んで止めた。彼女はその子供を救つたのであつた。（二）或る古い家の中の階段を患者は子供を連れて敵から遁れてゐる。階段は高いが、明るく暖く、美しく裝飾せられ、お祭りのやうに華やかである。誰かに勵まされつゝ彼女は安全に頂上に達した。……家の中へ突入すると云ふこと、狹い階段に押込むと云ふことは、男性的の象徴である。男性的願望がコイトスの刺戟に依つて强化せられてゐる。さうしてコイトスの間に彼女は相手と共に男性的の運動と侵入とを經驗し、彼女自身の感覺を味ふことをしなかつたのだ。

或る婦人が何となく氣持が變で神經症になりさうな感がすると云ふので分析を受けに來た。男性的な精力を以てこの婦人は或る政治上の位置に就いた。彼女は常に野心的で、その父親に同一化してゐた。四歳位の時に女中に誘惑せられて性器に觸れることを覺えた。彼女の母は結婚に於いて從屬的位置にあつたので、彼女は「奴隷的結婚」に入ることを決して肯じなかつた。また色慾的に自分を提供することを欲しなかつた。つまり彼女は完全に冷感であつた。併しながら子供を欲しがることは强烈で、彼女の知人で生れの非常に純粹な男を選んでそれに身を任せ、姙娠するや否や、その男と別れてしまつた。性交の後に、彼女は氣持が悪いと云つて入浴した。夢に依つて見ると、無意識的な同性愛があつた。また彼女が十四歳當時に母親と一緒に寢てゐて、その××に觸れたいとの衝動を感じたことを想起すると云つてゐる。性格學的には甚だ敏感で、男と接觸することを好み、常に男を牛耳ることに無意識的に腐心してゐた。性的には全然冷感であるが、そのくせ自由戀愛の熱烈な擁護者であつた。

二十八歳になる婦人患者が、ヒステリー性の嘔吐、口唇的變態、並びに冷感症のために分析を受けに來た。彼女は結婚して二年になるが、既に十七歳の時に甫めて神經症狀を示した。新婦となつてまた何も喰べることが出來ず、新婚旅行の際に不安になりまた屢々嘔吐した。平凡な男とこの平凡な結婚に於いて、全然冷感的であり、嫌惡してその××を拒み、やがて教養ある堂々たる男に戀愛し、その男には熱烈に接吻した。常に嘔吐の不安に惱み、朝食をとることが出來ず、社交から退いてしまつた。

患者の母親は患者が八歳の時から或る性的態度を持つやうになつた。それは變態的（フェラチオ）であると云ふことを彼女は知つてゐた。その時に患者はいやな氣持がした。彼女は常に接吻することを好んだ。四歳の時に母を熱烈に接吻するので、人々は彼女を引離さねばならなかつたほどである。彼女の夢で見ると、そのヒステリー性の嘔吐癖は、ヒステリーには典型的である如く、抑壓せられたるフェラチオ空想がその根柢に横たはつてゐた。例へば、彼女は夢の中で、「机の上に皮を剝がれた、長く延びた小鷄の頸の横たはつてゐるのを見た。その頸は生きてゐた。で、チョン切らねばならなかつた。いやな氣持になつて、彼女はナイフの柄でその頭を打たせた。」彼女は屢々ヒステリー球を喉頭に感じ、そこに結帶があるやうな氣がした。彼女は自分の父親を思はせるやうな或る男と戀愛に陷り、その男と夢中になつて接吻した。彼と會ふことを期待してゐる時に、彼女は急に胸が惡くなる。ワギナに於いて冷感であると共に、他方に於いてこのやうに口唇的色慾感が强烈であつた。ヒステリー性の嘔吐癖はフェラチオ空想に依存してゐるのである。兩親への定着が大きな役割を果してゐた。母親との同一化がフェラチオ空想並びに嘔吐癖の條件となつてゐた。

分析治療は（强迫神經症は例外として）見込みがある。

第十二、無意識的同性愛への逃避反應の結果としての冷感症。

無意識的同性愛の廣汎な範圍から吾人は次の型を選ぶ。――エディポス・コムプレクスを解消する一つの可能の道は父から離れて自分を沒性慾的に高められた母親に第二次的に同一化することである。それにはエディポス的空想から生ずる無意識的罪障感が參與する。そこでこれ等の婦人は「沒性慾的」となり、友情の形で昇華せられたる同性愛に傾くやうになる。

或る婦人患者が冷感症の故に分析を受けに來た。患者の夫はその妻を次のやうな不思議な條件を提出して何れとも妻の了見次第だと云つた。――彼は公然と或る情婦を持つてゐるが、妻が感じを持つやうになるまでは、その情婦との關係を續けてゐると云ふのである。夫は明かに妻の冷感がその惡意に出づることを察してゐるのである。ところで、その妻君たる患者の方は夫の情婦に對して同性愛的に愛着を覺えてゐるのであるから、このことを薄々感ずるやうになるや否や（勿論、分析中にそんなことを云ひはしなかつたのだが）數回の分析談合の後に處置を中止してしまつた。

他の患者の場合に於いては、このやうな無意識抵抗を打破して、診療を有效ならしめるに成功してゐるのである。

第十三、子供を持つことへの神經症的不安からの冷感症。

こゝに云ふのは子供を持つことへの神經症的不安であつて、現實上の不安ではないのだ。現實上の不安も凝似冷感症に導くことはあり得る。（第十七項參照。）

或るヒステリーの婦人患者、自ら承知の上で夫の子を姙娠すること數回、而も絕對に墮胎すると云つてきかなかつた。その婦人の住んでゐる國は淸敎徒的な國柄であるから、そこで墮胎をするのは事實上不可能であつた。彼女は國外に出て、そこで隨分苦勞して手術のために金を工面した。その後、一二年してその婦人は結婚生活上の別の惱み（彼女は冷感症であつた）のために分析を受けに來たが、併し料金が續かなくなつたので、中絕して鄕里へ歸つて行つた。少しばかり分析しただけであつたが彼女はその最近親者に依つて子を得たいとの無意識願望を有することが分つた。その願望の存することを氣付いて彼女は痛切な罪障感を覺え、そのために姙娠を中絕して了つた。分析は四ヶ月續いて、勿論そんな短時日では分析は完成しなかつたか、それでもその婦人の心持は非常に落着いて來た。分析を中止した直後に彼女は姙娠したが、その後寄越した便りに依ると、事情は非常にくて姙娠を中絕しようと云ふ要求は起きないとのことであつた。

子供を持つことへの神經症的不安はエディポス的定着、即ち神經症の一部分に過ぎないことが屢々である。

或る婦人患者は不斷に姙娠を恐れてゐた。何かにつけて心配なのは姙娠することであつた。避姙のためにいろんな道具や手段を用ゐてゐたがそれでもなほ心配であつた。患者は分析治療を受けること拒んだが、その理由は自分の不安は「現實」に根差してゐるのだと云ふにあつた。彼女の冷感は「生れつき」のものだと說明した。

また或る種の神經症的婦人たちは、子供を持つことの不安を回避するために、隨分奇妙な手段を用ゐることが屢々である。

或る婦人患者は行爲に際して「感じ」が行くと、それで姙娠するのだと云ふ考へを持つてゐた。今、彼女は完全に不感症であつた。さうして彼女の「感じ」はコイトスする夫との男性的同一化にあるのであつた。彼女はその時、「拳鬪を見た」時のやうな加虐的な感情を味ふのであつた。この快樂を彼女は自ら拒否し、痙攣的に何か別のことを考へてゐるのであつた。

第十四。特別な條件の下に起る冷感症。

この種の患者に對しては分析は見込がある。

これ等は「機能的」冷感症である。即ち或る男（大抵は夫）に對してのみ起る冷感症である。

フロイドは數年前に、禁斷と云ふ條件に人々の注意を牽いた。本來、性感なるものは既に幼兒時代から表向き禁慾的な觀念と結びついてゐるのであるから、從つて禁制と云ふ條件と密接に結びついてゐて、性慾を自由に享受出來る（例へば結婚に於いて）と云ふことは既に役に立たないのである。その結果として夫に對しては（而も夫は粗野にも交渉を義務と心得えゐるので愈々）妻は冷感となり、そこに多少の危險の伴ふ愛人との間にオルガスムスが感ぜられるやうになるのである。

以上の他なほ特別な條件としては、娼婦的立場のそれがある。婦人の內には、幼女時代に考へた娼婦への誤解的な觀念のこびりついてゐるお上品な人達がある。この考へ方によると、娼婦は性生活に禁制なく、且つ享樂を購ふに墮落を以てするものであると云ふのである。從つて彼女等は二重人格的な心理生活を持つのである。つまり、上品な婦人としては冷感症者であり、娼婦としては十分にオルガスムスの感じがあるのである。

今一つの「特別な條件」はコイトスの姿勢である。例へば、兩脚を密着せしめて行はれむことを要求する如きである。これには二樣の說明が與へられる。意識的には、クリトリスに刺戟を得むと欲するものであり、無意識的には相手のものをカストラチオンせんとするのである。今一つの「特別なる條件」は背後から行ふものである。これは幼兒的な肛門的空想に結びついてゐる。この場合に於いてクリトリスの刺戟が要求せられること屢々である。

以上の諸種の場合に對しては、分析的處置は効果がある。

第十五、母親型婦人の冷感症。

また親切な母親型の婦人があつて、彼女等は完全に冷感であるのだが、己れの冷感をよく我慢し、相手が滿足してをればそれを無上に喜んでゐるのである。この場合、そのそのやうな婦人は無意識的には母子關係を反復してゐるのであつて、即ち夫はその立場に於いて「おいたの坊や」である。

その原因は種々雑多であつて、これまで擧げに來た冷感症の總ての理由はこれに適てはまるのであるが、併し抑壓の歸結は比較的呑氣で人を怨む如きことはない。が、このやうな性的諦めはたゞ一般に永續きがしないと云ふことを注意せねばならない。暫くは「母親的」無關心さで過ごしては來たが、やがて重い症候神經症に罹り、漸次に心理的冷感に墮して行つたと云ふ婦人がある。

これに對しては、分析は見込がある。

第十六、禁慾的、性慾敵視的觀念を持てる冷感症（超自我型。）

冷感症婦人の多くは性器的性慾に關しては嫌惡と侮蔑とを以て語ると云ふのが屢々である。否、殆ど皆がさうだと云つて差支へがない。それは無意識的に抑壓せられたる願望への防禦であるのだが、そんな事は意識は全然與り知つてゐない。子供がこのやうな性的嫌惡を押しつけられることが屢々である。冷感的な、肛門性感的な母親がその子供に向つて、性に對する憎惡と輕侮とを組織的に與へると云ふことを、考へて御覧なさい。その子供は母親の敎へを心に銘じ、それが彼の超自我となり、彼自身のエディポス的願望への防禦手段となる。敎育は幸か不幸か今日の狀態を齎してゐるが、その狀態に於いて或る人がなほ性的に健全であるとするならば、それは彼の受けた敎育に依つてと云ふよりは、敎育に拘らずと云ふわけである。

これ等婦人の多くは、オルガスムスと云ふことが實際に存すると云ふことを疑ふ。さうしてそんな事は單に虛構に過ぎないのだらうと思つてゐる。或る人々はコイトスの後に常に必ず云ふ、「さぞ馬鹿な奴だと思つてゐるんでせう？」と。

分析處置の見込みはある。

第十七、擬似冷感症。

この項に來るべきものとしては、性的無知、素朴にして技巧の誤てること、子供を持つことへの現實的不安、男子の不能症などがある。診斷によつて眞性冷感症と擬似冷感症とを區別することは必ずしも容易ではない。

例へば、成熟せる婦人に性的知識の缺けてゐることは、彼女の心理的態度の結果であることを我とはよく承知してゐる。既婚の婦人にして外陰部と子宮との間には何もないと信じてゐる如きは、即ち膣の存在を知つてゐないやうなのは、そこに何かの心理的異常を豫想せざるを得ないのである。

擬似冷感症の最も重大な顯現は男子の不能症から起る。這般の事情を知らずして惱んでゐる多くの氣の毒な婦人がある。そのやうな場合はまづ男の方から分析處置してかゝらねばならぬ。

これは分析によつて癒える。

第十八、素質的冷感症。

この群に屬するものには、發育不全や、破壞的な手術の結果などがある。これ等の場合に對しては、分析治療は適當でない。

第四章　冷感症分析治療二例報告

第一例

こゝに報告するのは廿六歳になる、氣象の勝つた、名譽慾の強い、若い、ハンガリーの一母性の典型的な實例である。彼女は結婚以來四年になり、息子は三歳である。愛情生活に於いて滿足を得てゐないがために、その夫に對する評價が漸次に減少して行つた。その夫を本來彼女は愛してはゐたのだ、さうして、その夫の兄が元々彼女の戀愛的空想の對象であつた。一體に不機嫌でいら〳〵し、殊にそれがために子供に向つて當るやうになり、性質善良な、自己犧牲的な夫に對して邪慳であり、元は勤勉で光明的であつた彼女の性格は今や絕望的で仕事の能力が禁制せられてゐた。

或る嫌惡の感じが克服せられなかつたのは、性器は肛門に隣接してゐるためだと云ふのであつた。夫は押付がましいことはせず、大人しくて我慢強かつたが、その夫のことを彼女は「貧弱な雛子」と呼んでゐた。たゞその例外は、彼が激怒した時、或は妻を打つて來た時で、さう云ふ場合には夫は印象的であつた。併しこの事は愛情行爲に於いては殆ど不可能であつた。何となれば彼女の最も深い空想は巨人に克服せられることであつたからである。

後になつて彼女の告白したところに依ると、結婚したのは就中、夫をつくづく觀察し得るためであつて、その夫に

對して彼女は行爲中に自己を同一化してゐたのだ。

彼女自身の局部的感覺に考へが集中せず。寧ろ夫の行動と感情とに一種の同一化をなし、そのために自然と、別の失望と羨望とが新たに擡頭した。コイトスのあつた翌日は夫に對する不機嫌は殊に甚だしく、且つ自分でいら〳〵してゐて嫌な氣持がしてゐた。

愛情行爲に對する相反並存感情を一層よく理解するためには、それに關する早期の空想を考へて見るやうにしなければならない。その空想に於いては行爲による磨擦だの軋轢だの緩和だのを知らず、胸と胸とを接して横はることの理想、或は互に離れると云ふことさへない理想を築き上げてゐたのである。彼女は獨自の肉體的感覺、部分的な人格破綻を想起し、自分の肉體に就いては、宛もその下半身がないかの如く、たゞ自分は首のみになつたかのやうに、上半身は獅子の首のやうに前方に重くなつたやうに、脚と上半身とはあるが、臀部はなくなつたかのやうに感ずるのであつた。性器及びその周圍の「抑壓」は明白に現れる。彼女はまた冷たい、鐵の煙突の如きものを體内に頭内に覺え胸には堅い骨があるやうな氣がする。「そこで彼女の本質もあのやうに頑固であるのだ。」こゝに少女の肉體上の男性的補足を認めるに困難を覺えないであらう。

分析中に或る早期の記憶が出て來た。それによると、彼女の母はその初兒(即ち患者)を育てた時に乳が十分でなかつたことが分つた。併しそれがどこまでが本當の記憶で、どこまで人から聞いたことの記憶か、判明しなかつた。母は殊に晩年は病弱であつた。欲しいものを十分に呑ませて貰へなかつたと云ふ感じがこの患者にあつて、それに關聯して母に對する一種の批難(患者が男兒として生れなかつたのは母の責任であるかの如き批難)が起きた。彼女は不きりやうな子であつた。

併しながら彼女はとにかく初兒であり、さうしてやはりどうやら兩兒の愛子であつたらしい。併しながら彼女が三歳と三ケ月になつたときに弟が生れて、事情は忽ち一變した。父は元來男の兒が欲しかつたのだからと云ふので愛情の全部を弟に傾注し、女の兒などは一向欲しくないと云ふやうなことを公言した。患者は嫉妬を覺え不幸を感じ、弟を深く憎惡した。弟をそこに入れて眠らせる乳母車を彼女は屢々激しく壁に打ちつけた。女兒が段々剛情になるので、父親は愈々これを打檻し且つ心持を離した。このやうにして父親の態度が變つて來たので、四歳の女兒は家出をすることに決心し、或る日遂にそれを實行した。彼女の唯一の荷物はしやぶりこであつた。それを彼女は當時まだ愛用してゐた。彼女の口唇性感は後に言及する機會がある。彼女は遠くの草原の上で發見せられた。

兩親間の性關係に就いての唯一の記憶は、母が消極的であつたと云ふことであつた。彼女は父の膝に座して父獨特の臭ひを嗅いだことなどや、父が彼女の背後に立つて兩腕で抱えたことを思ひ出した。併し彼女は今はこの父に對して、自分を見棄てた不正な父として、たゞ憎惡を感ずるのみであつた。とは云へ、父はその娘が學業を續けることを許した。小學校を終へてから、高等女學校に入り、さうして大學——それ等はみな外國にあつた——の課程を終へた。彼女は名譽慾強く、且つ鋭敏であつた。女らしい乳房を恥ぢて、深くそれを押込んでゐた。十三歳の頃に精神上に一變化が起きたことを想起する、その頃から一層勤勉に、清潔好きに、且つ自分に對して嚴格となつた。またその當時からクリトリスの自慰を行らないやうになつた。彼女はそのやうに、夫のために一切を犧牲にし、總てを男に捧げたりするやうにはなりたくないと思つた。彼女は總て頭と眼と胸と胸との、併し性器や肉體を接することなき「純眞愛」を計畫した。彼女が甫めてそのワギナを發見又は再發見したのは、二十歳の時であつたと主張してゐる。これ

に依つてペニス缺如が一層慘めなことであるかのやうに思つたに相違ない。

それ以後、時たま自慰する時には「世界に唯一人」と云ふナルチスティッシュな空想が起こり、特に太陽の下に横はり自然と合一してゐる感があつた。寢床の中に横たはつては、彼女は自分の全身をナルチスス的に觸れて見るのが常であつた。學生時代には男兒的な樣子を好み、男帽子を被つてゐた。上品で、大人しい、女性的な或る男、自分を親切に扱つて、父が母が扱つたやうな風ではない或る男と、結婚しようと決心した。この學生と一緒に休暇の旅行に出掛けたが、その男が彼女を自分のものにしようと試みないのが驚きであつた。彼は甚だ嚴格な母の訓練の下に育てられて、生長が遲れてゐるやうに思へた。彼はその母親に對して極めて尊敬してゐた。後年彼女はやはりこの男をその結婚の相手に選んだのではあつたが、その心の奥底では、彼女の理想の男性はもつと違つたものではあつた。その理想の男とは暴力的で、女を地面に叩きつけ、怒鳴りつけ、毆りつける程の男でなければならない。これは彼女がその父親に就いての影像の名殘りである。

×

この患者の本能的素質の內で、主要なものは口唇本能と加虐性とであつた。彼女は大きな口と大きな齒とを持つてゐた。四歲から五歲頃まで情熱的に指しやぶりをなし後には母の指をしやぶつて、凡そ十歲の頃に及んだ。大食家であつたが、そのため動物的だと云ふ罪障感を持つてゐた。結婚後はあまり食べなくなつた。嚙み付いたり切り裂いたりすることの空想を持つた。その際、口や手に或る亢奮を覺えた。その他の空想に於いては、夫が×××を××させて背後にゐる。それを引裂き、切り取り、嚙切り、或は×××でちぎり取りたいと云ふことを考へた。時には夫と角力をとり、夫を寢床の上に投げ倒してやらうとするが、うまく行かないので、頭のまはりに輪をはめられたやうな感じがした。また子供殺しの空想を持つこともあつた。筋肉的快感に近い亢奮を覺えることもあつた。慾張りで、羨望的で、憎惡的で、執念深かくて、復讐的であつた。

註 ＊フランス風の舌頭接吻を覺えてから優位に立たうとの葛藤が生じた。

から云ふ活動に丁度ぴつたりあてはまつてゐるのはこの患者の男性的傾向である。それを我々また同様に同性愛として、或は男性コムプレクスとして云々することも出來るのである。少女がその××に觸れること、相互に××し合ふことが話頭に登つた。彼女は女の肉體の方が好きであると云ふ。女から觸られることには一種の不安症的な忌避を覺えた。××する時には顔を伏せてするのが好きであつた。彼女は女を脱衣させることに亢奮空想を持つた。性的交渉をなしつゝある男として自分を空想するのであつた。本を讀んでも、男性の亢奮を描寫してあるところが好きであつた。また美しい女に非常に興味を持つた。男性的、能動的な夢に於いて、彼女は「この女を如何にすべきか?」と云ふやうなことを自問する。

分析處置中に見た夢の中から女性的な特質的なものを選び出して見るならば、女性的な、受動的な不安の夢が現れた。例へば、車に轢かれる夢とか、馬に蹴られる夢とか、男が自分の室內に闖入して來て襲つた夢とか云ふ如きである。齒のぬけた夢、全部の齒が脱落した夢を分析を受ける以前にも見たが、さう云ふ夢は繰返して時々見た。或る夢に於いては、彼女の叔父が馬に乘ることを教へてゐた。反復して見るのは、彼女が男のヅボンを、殊に夫のヅボンを穿いてゐるところであつた。次の二三の夢は甚だ特質的であるから、言葉もそのまゝ引用しておいて見よう。

一、赤毛の少女が安樂椅子の上で滑つてゐた。その娘は白い胸を露はに出してゐた。やがてこの娘は患者を自分の上に引き寄せるので、二人は胸と胸とを接して横はる。患者は赫となり亢奮し、男のやうに振舞ふが、併し自分が女であることをよく知つてゐる。「私はこの女をどうしようかな?」と彼女は自問する。併しその時、彼女は自分が背後から一人の男にムヅと摑まれるのを感ずる。

二、患者は夫の或る部分を噛み切る。併し別に怒つてしたのではない。

繰返して見るのは、彼女の子供が死ぬ夢である。彼女が旅行してゐる間に、その子供は、例へば停車場に捨て置かれてゐたりすると云ふ風の夢である。その他の夢に於いては、暴力的な父親が出て來ることもあるし、父親代理としての醫師が出て來て、それに彼女が轉嫁を起してゐる。

醫師への轉嫁は大抵は父親への積極（陽性）轉嫁として出て居るので、それと分る。醫師は善き父親を代表してゐる。患者は醫師の娘を羨望してゐたので、非常な感動を以て彼女に同一化してゐた。ナルチスムスの抵抗並びに分析中のいやな思ひの抵抗はあまり激しくなく、容易に克服せられる程度のものであつた。患者の本性の鋭さと攻擊慾とは段々緩和せられて行き、彼女の知力と名譽慾とは幇助的な要素となつた。彼女はクリトリス・オナニー及び一般の自巳觸感（皮膚感滿足）を放棄することの必要を完全に理解した。

こゝに簡單に報告したワギナ冷感症の婦人の場合は、精神分析に依つて完全に治癒して再發することはなかつた。この有能の婦人は幸福な結婚を送り、その後も子供を生んだ。それ等の子供たちを彼女は夫への新たなる愛の果實として最初の子供よりもずつと多く愛した。彼女は自分の以前の教養の過程を土臺として一つの實際的な職業を選び、また自分を役立たせ、夫を助けると云ふ彼女の名譽慾を滿足させてゐるのである。

發展過程の要約——

小さい弟が生れて來たゝめにこれまで自分が獨占してゐた父親の愛の王座から轉落し、强大にして威力ある男性の理想を提示してくれた畏敬すべき父親からは袖にせられ、偏愛せられてゐる弟への羨望、殊にその男性なることへの嫉妬に滿たされて、口唇加虐的な素質のこの娘は剛情な、不平滿々たる子供となり、始終叱られ、折檻を受けてばかりゐた。

何人にも理解せられない內的葛藤を持つたこの孤獨の、有能の娘は今や努力的な女學生となつた。男性的な精神的教養は到底持つことの出來ない男性的肉體部分の代償となつたに相違ない。漸次生育し來る乳房を押へつけておいた事や、男子學生風の服裝を身につけたことなどを見ると、彼女の男性願望の如何に强烈であつたかが分るのである。母の禁止や宗教學校の規定のために、自分自身の性器に就いては何事をも知らず、ひたすら「純愛」の理想を築き上げて、そこには性器の參與する餘地はなかつたのだ。この娘の肉體觀の內には腹部は包含せられてゐなかつた。頭と

眼と胸と（上方への轉位に依つて）愛の機能は果されるのであつた。

恐らくはやはり父親への反抗からして、家出を決行し、二三の、これまたやはり父親の如く攻擊的な男子たちと交渉を持つたが、併し半處女のまゝであつた。相手が亢奮するとたゞ手を以て滿足を與へ、かくてこれを弱め、「去勢」するのであつた。

併し夫としては彼女は自分を支配するやうな（父の母に於ける如き）威壓的な、力強い男を選ばなかつた。却つて教養ある、自分より地位の高い家庭に育つたをとなしい、優しい、若い男を選んだ。徒步旅行をしてゐた間に、彼は愛撫中にも拘らず不思議に××させなかつた。而も正にこの男が夫に選ばれたのである！　實はこの結婚は社會的地位の上昇であつたのだ。環境は快適であつた。永い間の生活の苦闘も終りを告げて今は平和が訪れて來た。併し性行爲は彼女を冷感のまゝにし、失望と嫌厭とを感ぜしめた。尤も彼女は間もなく姙娠はしたが……。コイトスは好奇心を以て期待してゐたところであつたが、それに伴ふ感情は次の如くであつた。――相手に對してたゞ羨望と憤りを感ずるのみで、その相手に同一化しようと思つた。單にその下にあつてその快を供するに過ぎない對象ではなく、彼の如くあらまほしと思つた。刻々に彼の感情の動きに從いて行くことは出來るが、それに應じて自分の感情を出すことは出來なかつた。以前の空想に於いては、自分は下位に立たうとは思はなかつたのであつた。

彼女は自分自身の感情には從はず、外部の感情に從つてゐるのである。彼女は自分を與へ、打開き、受容しようと云ふ氣はなかつたのだ、彼女は依然、自分のワギナに就いては何の知るところもなかつた。たゞ自然が自分に與へるべきものを全然與へてゐないと云ふことを信じてゐるのみであつた。それ故にワギナは煖房設備なき座敷の如く、不用のまゝに放置せられてあつた、それは自然が與へた傑作の遊樂室であるのに、そこは死んでゐるのだ、何らの働きをなさないのだ。

こゝには女として生れたことの呪ひの聲、オナニーに對する父の呪、母の威赫の聲が聞こえる。その結果や知るべきのみである。古い罪障感が蘇生つて來る。自分は戀愛にも結婚にも不向きな片輪者であると考へる。

それとも男の方に責任があるのであらうか。この善良にして氣の弱い男は他の女との經驗をこの結婚に持込んで來たと云ふわけでもないのに……。それがいけないと云ふなら、こんな若き燕型の男でなしに、力强い、壓制的な誘惑者型の男を選べはよかつたではないか？

友達が精神分析法に依つて冷感症から救治せられたことを知つて、彼女もそれを受ける決心を眞劍に固めた。分析に於いて、彼女は自分の精神的發達のあとを活動映畫に於ける如く繰り展げられて行くのを見、また始めて自分の嫉妬や憎惡を理解するに至つた。彼女の本能的素質、家族關係、父親の性格などが彼女を誤つた方向に驅り立てたのであつた。女の肉體を持つて生れたのであるから、彼女は受働的服從に、受容に、開放に、任ずべきであつたのだ。「より强き性」と同一化すべきではなかつたのだ。

分析は今や彼女の誤れる發展を闡明した。思ひもよらなかつた洞察の道がそこに開かれた。氷りついてゐた力が伸び始めた。女らしさ、母親への同一化、母性的傾向、家庭婦人らしさが前面へ出て來た。

自然はペニスを所有する性を存在せしめてゐるのみでなく、第二の、これとて同樣豊富に與へられてゐる性を創つてゐるのだ。併しこの第二の性は幸福を内に感ずる程のものである。古き誤りは放棄せられなければならない。正しくない、幼兒的な考へ方は是正せられなければならない。女性的な部分への興味は一層大きくなつて來た。それを眺めそれを觸れて見るやうになつた。

分析者は嚴密に受働的な分析的態度を離れて、說明的な話をしてやることを辭さない。器關としてのクリトリスは少くとも時々は放棄せられて、これに觸れないやうにしなければならない。ワギナは筋肉的な支配を持つと云ふことが漸次に分つて來た。發展の道程に於いてワギナは云はゞ口唇及び肛門の役割保持を繼承するものであることを我々は知る。肛門括約筋で遊ぶ習慣のあつたこの患者は、ワギナに於いてもまたこれを遊ぶことが出來ることを自分で知つた。このやうにして漸次に、ペニスへの願望は起り、肉體的幸福感への精神的集中の下に摩擦の快感を味ふことが出來るやうになり、且つそれが發展して行き、遂にはオルガスムスを以て點睛せられるに至つた。新しい世界が開け

た。ベッドの中に於いて、コイトスに於いて女性であると云ふことは、職業上で男性的努力をすることゝ、或は結婚生活に於いて優位に立たうとすることゝ矛盾しないことになつた。併しながら結婚に於いて共同の感情、「私達」の感情・「御互」の感情は段々大きくなつた。家庭婦人としての興味と職業人としての興味とが今や一致し、母への同一化と父への同一化とが相提擧して進んだ。夫の人格の立派な點が正當に評價せられるやうになつた。

註* ヒッチマン稿『不能症及び冷感症の精神分析的處置に對する二三の實踐的方法に就いて』（精神療法雜誌、一九二八年）參照。

このやうに滿足が得られてゐるので氣持が漸次に落着いて行き、氣持が鎭まつてゐるので協調的になつて行つた。隣人に對するあらゆる關係は許容的となり、理解的となつた。父親に對する敵視と不快の感情は一掃せられた。何となれば、人々は自分の分析に依り自分の發達の運命的なところを知悉するやうになると、他の人々も、殊に我等の隣人も、彼等自身の如く、その素質とその早期體驗とに依つてさうなつたに違ひなつと云ふことが分るやうになるからである。

このやうにして、不幸で、不平家で、劣等感の強い、仕事に氣乘りのしない、不公正で、癇癪持ちで、氣まぐれな婦人は分析の力に依つて、幸福な、他人をも幸福に出來る、結婚生活を喜ぶことの出來る、母たることの喜びを味ひ得る、而も職業に於ける名譽慾にも滿足してゐる人間となつたのである。不快な、不幸な結婚——而も姦通の脅威に常にさらされてゐるやうな結婚は、このやうにして、當事者双方にとつて不斷に滿足的なものとなつたのである。感情が歪つで馬鹿にされてゐるやうに感じてゐて、理由なく不機嫌であつた人間は完全な開花を見せたのである。ワギナの冷感から解放せられた不感症婦人は社會的價値に於いても間然するところなき別人となつたのである。

第二例

廿八歳になる或るロシア婦人が冷感症の故に分析を受けに來た。患者は七年間結婚生活を續けて來たが　而も××

に於いては全然冷感であつた。豫備的行爲は彼女の許さないところであつた。早期の時代には、自分の冷感を相當よく怺えてゐた。處置を受ける前の數ケ月には、行爲中に夫への嫌惡が擡頭して來た。財政的には、全然夫に依存してゐる以上、如何にも自分で滿足を得てゐるやうな風を裝ふて見せなければならなかつたので、愈々さう云ふお芝居は我慢のならないことゝなつた。行爲の間にワギナば全然×いて了ふのであつた。彼女の頭に浮んで來る唯一の考へは「早く濟んでしまはないかなア」と云ふことであつた。夫がオルガスムスを味つてゐる間に、彼女は羨望と憤怒と憂愁の混つた感情を覺えてゐるのであつた。かう云ふ狀態は結婚の始まり以來、加速度的に上昇して行つた。

患者が後に自分の夫となつた男を知つたのは、彼女の十八の時であつた。兩親、殊に父親はその求婚著に對して直ちに拒絕的であつた。患者は、併しその男が氣に入り、かくて彼のために永年の攻擊的な戰ひが續けられた。性的に聽すことは、一つの判然たる反逆行動であつたのだ。破瓜に就いては、患者は別に何も云ふところはなかつた。夫に對する攻擊的、敵視的態度は、兩親に對する愉快なる復念讐のに依つて被はれてゐた。兩親は外的理由のために別の市に移住してゐたし、愛人は遠隔の地に越して行つてゐた。患者は又一人市中に停り、而も自分が妊娠してゐることを知つた。兩親や愛人に知らせずに、一人で分娩した。ところがそれが難産で、出血のために危く死ぬところであつた。そのために慢性の膠着症狀を來たし、それが患者の不姙の原因となつて分析の始めの頃までそのまゝであつた。一寸した氣候の變化や、遊戲のために緊張したりすると、そこが痛むのであつた。一寸した定時的の病勢亢進がある度に批難は責あつて責なき夫に向けられるのであつた。

患者は美人で、いさゝか羞恥家で、內氣で、甚だナルチスティッシュな、知的な婦人であつた。彼女の過敏は著しいものがあつた。で、屢々自分のことを「ミモザ」と綽名してゐた。併し彼女がその殼を破つた時には、內面的に甚だ攻擊的で、始終無視せられてゐるやうに感じ、常に感情を害されてゐるやうに思ふ理由を搜してゐるやうに、人々には觀えた。また辛辣骨を刺すやうな言葉を吐くに巧みであつた。

その前半生の略傳は次の如くであつた。――患者は兩親の最年長の子供で、彼女が三歲半の時に弟が生れ、それが

兩親の寵兒となつた。併し兩親は前から男の子が欲しかつたのだと、彼女に云ひ聞かせた。父親は仕事のために大抵は家にゐなかつたが、「お前なんか女の子だから」と云つたやうな物の云ひ方をした。ところで、分析的經驗の教へるところに依ると、親が「女の子なんか」と云つたやうな口の利き方でその不滿を表はすと、それが女兒の發達の上に如何に決定的な要因となり得るかゞ分つてゐるのだ。そのために女としての役割を忌避するやうになり。それが昂じて冷感症となり、果ては神經症ともなる。

×

譯者曰――以下數頁、雜誌に連載中、當局の注意に依り削除することゝなつた故、こゝに收載することは遠慮した。たゞ譯者としては前後の連絡をつけるためにその數頁の間に原著者がどのやうなことを論じてゐるかを、簡略に紹介しておかなければならない。

このやうに弟に對する反感と嫉妬とが男性一般に擴充せられるやうになつて、それが冷感症の遠因をなしてゐるとの論述から始めて、次には父母の性生活が報告せられる。父は飲んだくれの、家に落着かない、性的にもだらしのない男であり、母は父を憎んで寧ろ一人の樂みに耽る方で、患者は嘗てその場面を見て強い打擊を受けた。いろいろの性的禁制の當の發令者たる母親の矛盾した行動は彼女に道德的懷疑を起させた。その後自分でも一人の樂みを行ふやうになつたが、現在の夫と知合つたのはその當時であつた。

分析處置の初めには患者は猛烈な抵抗を示し、性は嫌惡すべきものとの先入觀念を固執して動かなかつた。三つの夢を分析することに依り、彼女の對男性攻擊欲が明白に觀取せられた。その夢の一つの中には男性象徵としての松茸が出て來てゐた。彼女はそれを喰ふのであつた。さうして不味いと云ふ。そのやうにとかく口唇に關する夢が多かつた。右の夢の次に出て來たのは、分析者への轉嫁の假面を被つた父親コムプレクスの夢であつた。父親コムプレクスとその轉嫁とこの二つは患者には苦しかつた。(以上譯者。)

×

患者は兩方とも――父親に對する無意識な、積極的（愛情的）願望も、轉嫁に於けるそれの反覆――も否認して了

つた。「父親に就いての話」は馬鹿氣てゐるし、「轉嫁に關する話」は典型的な、男性的誇大妄想であると患者は云ふ。が、夢が明かになるに連れて、彼女はをとなしくなつて來た。今度は、理論と攻撃とを以て反應して來た。その「科學的」理論と云ふのはかうであつた――無意識*と云ふやうな假定的な機關が抑々存在してゐるとしても、それが意識よりも强力であるとは彼女には考へられない。「私が人もあらうにお父さんに對して無意識的な性的願望を持つたんですつて？　だつて私は父を豚だと思つてゐるし、それに凡そ性の事を考へるだけでも私は胸がむかついて來るのですのに？」抵抗として差向けられたる嘲笑的攻撃の最高のものは、貴女の見てゐる分析者は現實の人間ではないと云ふ點に就いてゞあつた。「だつて貴方は御祖父さんの椅子に腰かけたお婆さんのやうに、そこに掛けてゐられるではありませんか。そこで靴下を編むでゐらつしやらないだけのことです。」と。

註＊こゝでは表現の簡明を期する上から、分析處置の複雜した過程が極めて簡略化して說いてある。人格の中の「エス」の成分はこゝでは大雜束に「無意識」として名付けてある。併し實は超自我も同樣に無意識的で、而もそれで自我の一部分をなしてもゐるのだ。

やがてこの患者も分析學の根本要件たるエディポス・コムプレクスに親熟して來たので、彼女は男性からの一切の輕侮に對して最大の攻撃を以て反應する、卽ち彼女は復讐として去勢せんとする、と分析者は云つてきかせた。このやうにして、彼女の見た分析者は現實の人間に非ざること、彼女は松茸の夢に於いて男性を同樣に去勢したのだと云ふことを、彼女は立證した。分析者は更に患者の矛盾を指摘して聞かせた。卽ち彼女は一方分析者が分析室に於ける事情を惡用しはせぬかと云ふ心配を持つてゐると共に、他方に於いて、分析者がさう云ふことを一向せず、彼女が認めた通り、全く端正であつたので、「お婆さん」のやうだと分析者を批難した。その矛盾を指摘して聞かせた。分析は自己否定の中に進まなければならない。患者は機嫌のよい時には、自分が特にトルラーの『ヒンケマン*』を愛誦するものだと云ふことを告白した。さうして、一體人間つて性なしに生きて行けないものでせうかと諦めたやうに尋ねるのであつた。「だつて貴女自身性なしに生きてはゐないではありませんか」と分析者は云ひ、さうして一切の神

經症者に於ける如く、彼女の性も無意識的空想の形をとり、それが彼女の病因に外ならないのだと云つてきかす。同時にまた彼女の「超道德」を分析してやり、それが補償的な性質を帶びたものであり、從つて彼女の無意識的な性的願望から自分を守備するための防壁に外ならないことを證明してやる。患者はいたく意氣悄沈して「私は自分で考へてゐたほど立派な女でもなかつたのですね」と述懷する。

註＊エルンスト・トルラーの戲曲『ヒンケマン』は歐洲大戰中に負傷に依り去勢せられたる男を取扱つてゐる。北村喜八氏の邦譯（大正十三年十一月、新詩壇社發行）あり。（譯者）

次に出て來たのは飛行の夢で、その中で彼女は分析を放棄してゐる。最後に患者は「可愛らしい妥協」を試みて來た。分析者が二つの條件を受容れてくれるならば、續けて分析を受けて行かうと云ふのである。その條件の一つは、夢の分析を放棄することであり、第二は「分析の根本規定」（即ち分析時に患者の頭腦に去來する一切の思ひ當りを告白すること）を廢棄すること。聯想を秘密にしておきたいのは、思ひ當ることゝ云ふのは實際いやな苦しいことばかりだからです」と患者は云ふ。が分析者は、凡そ分析は根本規定の嚴守の下に於いてのみ可能であると云つてきかせる。「二三の思ひ當りをまけておく」ことは、即ち聯想報告を控へさせることは、到底出來ないと分析者は云ふ。同樣な要求がフロイドに向つてなされた時に、フロイドは患者に向つて、それは自分の所有でないものを以て贈物にするに等しいと云つたことを、引用してきかせる。そこで、患者は再び攻勢を以て反應して來た。「私は貴方の顏に爪を立てゝやりたい、貴方の眼鏡をたゝき落したい。血を流してあげたい。」併しそれもならぬので、彼女はその代りに分析者を繃帶してやるのだと想像する。彼女は一體にその殘酷な空想の後に、空想中で損はれたる男を優しく親切に厄介してやるところをいつも考へて見るのだが、丁度そのやうに分析者に對して空想する。それはつまり、去勢せられた男は受容れて親切に扱つてやることが出來ると云ふわけである。（ヒンケマンに就いての聯想の條を參照。）

やがて患者は自己批難の段階に這入つて來る。彼女は意志薄弱である。たゞ弱者のみが無意識に拘泥してゐるのである。或る日彼女はそのディレムマから脫却して端的にかう云つた。「無意識なんてありません。フロイドは間違つて

ゐます。偉大な人にも誤謬があります。」と。最後の切札として彼女は勝誇つて云ふ。「それに無意識つてやはり男の發見したものですわ。フロイドが男だつてことが問題だわ。」と。その後の分析の過程中に現れた夢に於いては、加虐的なものとしてコイトスを誤解してゐる、明かに幼兒的な彼女の考へが出てゐる。これ等の夢に於いて婦人はいぢめられ辱められ、惡遇せられてゐる。約言すれば、それ等の夢は典型的な、ヒステリーの暴行空想であつて、それを患者は夢の中であまりにもまざ／＼と經驗したので、朝になつて眼覺めた時にはすつかり疲れてゐたほどであつた。これ等の暴行空想に於いて彼女は男性女性兩方の反應を示してゐるのであつて、これまた典型的にヒステリー的である。ところで、患者は××のコイトスを見たり聽いたりした時の感情を思ひ出したが、その時彼女は一方が他に「何か恐ろしい事」をなしつゝあると感じた。母の抵抗を彼女は加へられたる苦痛に對する防禦として解釋した。これに加へても一つ典型的な、幼兒的誤解は、母の下着に付いてゐたメンストルアチオンの×痕であつた。それを彼女はコイトスの加虐的なる所以の證據と受取つた。このためにエディポス期の無意識な性的願望への道が開けて行つた。母は父親の事を始終喞してゐたのだから、母は別室に寢て、自分がお父さんと一緒に居ようと云ふ提案をしたことを患者は思ひ出した。父親がこの案に反對しこれを拒けた時に、患者は甚だ憤激したことを自ら承認した。

　とかくありがちのやうに、この後に抵抗强化の時期が續いた。患者は既に受容れたことをも總て撤回し、聯想をとることに對して再び闘爭を始めた。彼女は既に「男の命令」の下に於いては、何事をも思ひ當ることが出來なくなつた。分析談合中の思ひ當りを總て云つてくれとの依頼を彼女は「命令」であると誤解し、これに反抗するのであつたが、もつと深い層に於いては、彼女は聯想の强要を被虐的に享受せられたる暴行として、快樂的に考へてゐた。彼女の經驗に於いては、性的な事柄は彼女が己れを無意識思想に沒してしまつた時に起り來ると云ふことは、患者がこれを卒直に認めた。たゞ彼女はそれをしたくないだけである。患者は甚だ神經質になり、夫とのコイトスを全然我慢のならぬものとし、彼を打擲してやりたいと思ふのであつた。その夫はまた殆ど心理的洞察力のない男である。彼は男のナルチスムスに依つて妻君の性拒否を（彼女は「意地惡」とか「無情」だとか云つてそれを難ずるのであつた）氣

付かず、このやうな時期に於いて、コイトスに際して妻君に尋ねるのであつた。「お前も第七天國にゐるのぢやないか」と。彼女は激昂のあまり何とかして殺してやりたいとさへ思つたと、報告した。

その後の甚だ永引いた抵抗を克服した後に、患者は、その父親に無意識的に愛着してゐることを容認した。この事を認識したことの衝撃は、彼女の意識的願望と無意識的願望との間の大きな裂目にあつた。意識的には彼女は父親を「豚」として輕蔑してゐるのだ。「お父さんは、私の夫に怪畫を見せた。私は激怒した。」と。患者の「超道德」がその無意識願望に對して己を守護する防壁であるとは前に述べたが、これはもつと正確に述べるならば、父親（また部分的にはその兄）に關する無意識願望に對する防壁であつた。確に、それ等願望は高度に相反並存性を帶びてゐた。彼女は母のやうに父親に依つて加虐的に暴行せられたいと願望すると同時に、父を去勢し、彼女自ら男たられむと望んだのであつた。

患者は父母及び兄への自分の態度全體を再吟味することになつた。そのために再び數週間に互る最も鋭い抵抗を惹起するやうになつたが、その抵抗は次のやうな論據に基くものであつた。自分は既に三十歳に近い、もう十五年か二十年も經てば更年期に入る、そのやうな「短日月」の間の冷感症を治癒するなどは、意味ないことでなからうか。或は自分がいつかコイトスを享受するやうになるであらうとは想像出來ぬことだ。「それは宛も貴方が妾を下水道のところへ連れて行き、いつかはこれが好きになるでせう、と云ふやうなものです。」と云ふ風である。もしこの言葉尻を捕へて、それは貴女が幼兒期に肛門で性交すると考へてゐた名殘が出てゐるのですなどゝ云はうものなら、大變な權幕でいきり立つて來るのである。こゝに於いて暴露せられてゐる典型的な事實は、患者が幼少時代にワギナの存在を知らず男子はそのペニスを肛門又は口唇に挿入するのだと考へてゐたことである。*後の方の空想は完全に抑壓せられ、それを意識するのは最も強い嫌惡感を伴うた。さうして夢の中に吸莖空想が出て來たことこそは、患者が「今まで陽の目を見なかつた仄暗い願望が私の中に眠つてゐる」とて無意識の力を承認し、それに降參するに就いての最も力強い理由の一つとなつた。

註* 患者の幼年時代には自分の便をペニスとして認め、從つて自分を男兒であると考へてゐる時代があつた。これ等肛門的空想は口唇的なものと混合せられてゐた。それ故に彼女の夢の「偉大なる未知」は屢々チョコレートに關したものを出すのであつた。その他また「肛門に於ける姙娠や出產」の空想の出ることもあつた。

その次の時期に於いては、彼女はその夢に於いて而もペニスを有する男子として登場し、甚だ殘酷であつて、女子を去勢するのであつた。彼女は今や己れを男子に同一化したのであつた。「それは段々美しくなるでせうね」と彼女は云つた。さうして美的見地から云つて、男子は「だらしのない姿だ」と斷じた。その考へはやがて、患者自身が「だらしなく」、つまり去勢せられたものとして感じてゐると云ふ事實の投出に過ぎないと云ふことが分つた。この審美論に對しては、分析は美の問題に就いてはあまり云ふことはないが、婦人のペニス願望に就いては大いに大いに云ふことがあると云ふので、うまく逃げを打つた。

患者は幼兒時代にペニス缺如が甚だ彼女を失望させたことを想起し、承認した。弟のそれを見て甚だ不快を感じ、彼に對して攻擊欲を覺え、或る時の如き彼を強く胸に抱きしめて息づまるやうな思ひをさせたこともあり、また時には「偶然」赤ん坊をとり落したこともあつた

彼女の幼兒期オナニーはクリトリスに於いてなされた。つまり男性的であつた。彼女は、クリトリスはペニスであると思つてゐた。が、それに伴ふ空想のために罪障感が生じ、その罰として去勢せられると云ふ典型的な空想が生じた。クリトリス（ペニス）の小なるは去勢の結果であると考へられてゐた。這般の消息からして彼女の母親への關係を論じることが可能となつた。母親への關係は超過補償的であつた。意識的には彼女の母親への態度は溫良で、仲がよかつた。殊に性を侮辱する點に於いては氣が合つた。が、その背後にはエディポス的なものがあつて、父を中心に競爭心が匿されてゐた。始めには母親に對して愛憎兩樣の感情を持つてゐることを承認したがらなかつた。が、夢の中にそれが出て來たので、彼女もそれを拒否するわけに行かなくなつた。分析者への轉嫁感情の中で患者は時として分析者を母親と同一化した。それ故に彼女は分析者が「お爺さんの椅子にかけてゐるお婆さんのやうだ」などゝ云つ

たのであつた。

やがて彼女はまた分析解釋に對して憎惡的な態度を示すやうになり、抵抗は猛烈となり、分析者を激しく攻擊して來「貴方は何の權利があつて私の蔭で私の夫に面會したりしてゐるのです」と喰つてかゝつて來た。「私は貴女の御良人にはまだお目にかゝつた事はありませんよ」と答へると、分析者の云ふ事などは一語だつて信用出來ないと叫ぶのであつた。それは、患者が平生暗中でコイトスすることを撰ぶのに（それはペニス缺如を恥づる故に）夫が明るみでなさうとの提案をしたことに就いて生じたのであつた。それには分析者が夫と何か打合せをしたと察したものであつた。それにつれて、彼女は今まで匿してゐた一つの重大なことを告白した。それは彼女がコイトスの間にも、獨座の時にも出て來るのであつた。いかにも不思議な眼が彼女を觀察してゐると云ふ感じのすることであつた。それは彼女が數年前、或る婦人科醫の講演を聽き、その醫師が冷靜な、科學的態度で性問題を論じつゝあつたのを見た時からのことであつた。それは確に誰それの眼と云ふわけではないが、彼女の背後から彼女を眺めてゐるのであつた。が、とにかくそれは男の眼であつた。分析を受けるやうになつてからは、それは分析者の眼となつた。その眼は彼女を揶揄的に眺め、暫時にして消失する。彼女はその眼を不快に思ひ、寧ろ恐れてゐるのであつた。

それからまた、ヒステリー的幻覺もあつた。その幻覺には現實的な意味が十分に含まれてゐた。それはいろいろに說明することが出來た。まづその眼は超自我（つまり良心の無意識的部分）を代表するとも解せられた。また自分自身の人格の投出せられたものとも解せられた。その良心が彼女を「お前は自分で考へてゐるほど道德的ではない」と難ずるのであつた。それが男の眼であると云ふのは、患者が自分を男だと感じてゐるためであつた。

このやうにして分析は幾月も幾月も續いたが、その間屢々強い抵抗に依つて中斷せられた。分析が進捗し性的事情がよくなるにつれて、彼女の加虐的攻擊慾は增大して行つた。「分析に依つて得をするのは私の夫です。私はこの夫のためによくなるのです。」男全般に對する憎惡は甚だしくて、自分が分析を受けるのは自分のためであると云ふことに氣がつかなかつた程である。

分析の最後の一二ケ月に於いて、二つの相反する傾向が平行して出て來た。受身的な被暴行空想と、以前に轉嫁に於いて現はれた加虐的攻撃欲とである。このやうにして患者は最初にオルガスムスを味つた後に、分析者に向つて憤激を勃發させた。その時伴つた空想は、シュワルツェンベルグプラッツに於ける光の泉は活々としてゐる。その最高の光線の尖端のところに分析者の首が燃えてゐると云ふのであつた。この空想には既に性器的滿足が多少とも仄見えてゐる。

男子たる分析者に癒して貰ふと云ふことへの反抗により、またもや男性全體に對する憎惡が燃上つた。この最後の抵抗を閲し終つた後に、さうして轉嫁を解消し得た後に、患者は完全なオルガスムスを持つことが出來るやうになつて、分析者の許を辭することゝなつた。この成功、即ちオルガスムスの獲得と眼の症候の消失と以來、三年は經過した。患者はそのやり方に於いて一層女性的となり、つまり性格的にも變化したわけである。

第五章　冷感症の豫防及び處置

冷感症が生活及び仕事の喜び並びに人格の全機能に對して如何に大きな影響を有するものであるかは、今日まで殆ど氣付かれずに來たが、吾人が右に縷述し來つたところに依つて、冷感症豫防への二三の見地は既に展開せられた。

女兒の養育はとかくあまりに端正に過ぎ、あまりに抑壓の機會が多過ぎて、知らしむべきを知らしめることも遲れ勝ちになり、或は全然省略せられてしまふと云ふ點も手傳つてゐるので、吾人はこゝに冷感症豫防の方法を說かねばならないのである。それは同時に神經症の豫防を、性格改善その他を說くことにもなるのである。

男兒を欲しいと思つてゐた兩親がアテの外れた嘆きを漏したり、娘に男の綽名をつけたりするものだから、娘の方ではとかく男性空想を持つやうになりがちであつて、分析を理解してゐる教育者なればこれを豫防する道を心得てゐるのである。

男性及び女性の器關が平等の價値を有するものであることを知悉せしめることは、思春期に至るまで待たねばならない。併しこの期に於いては是非ともこれを怠つてはならない。

性的な事、殊にオナニーに關して嚴しく責め立てることは、避けねばならない。恐怖や罪障感を惹起すやうな一切の事は有害である。幼兒期のオナニーは無難であり不可避であるが、思春期以後にクリトリスのオナニーをあまりに激しく行ふこと、或は誰か相手にクリトリスの刺戟を濫りに與へしめることは、内部女性器の亢奮力を禁制するやうになるから、これは看過すべからざることである。何もかも承知の上でその最初の戀愛關係を經驗し、結婚生活に入り、感傷愛に基く關係に入つた婦人は、何もかも承知し、性的に有能な相手の助けに依つて、よしんば初夜は失望的であつたにもせよ、その後首尾よく進んで行くようになるであらう。このやうにして彼女はその將來の性生活をこの夫に委せるやうになるであらう。併しながら、無知、誤解、幼兒的禁制、見當違ひの同一化、神經症、變態、その他

の心理傾向あるために持續的に禁制的な難點を有する婦人たちは、直ちに分析を受けるやうにしたがよい。でないと、後悔と失望のために現在の調和を攪亂し、妻としての心持が他の男に移つて行くやうになるであらう。分析は長い期間を要するものであるから、婦人科醫の勸めに依つて豫め、出産や醫師の忠告や説明や、性交の位置を變へて見ることや、その他に依つて何とかなるのでなからうかと待つて見ることが屡々である。或はまたホルモンの服用を試みて見ることもある。* 道德的にあまり禁制のない多くの人々は浮氣などをして見ることもあるが、その甲斐は一向にない。さう云ふ試みをいつまでもやつてゐたり、双方で失望したりしてゐる内には、遂に有害な結果になつてしまふ。

註* 最新藥プロヂノンその他の效果に就いても意見は色々である。試驗は未だ十分に徹底してゐない。ヒツチマンの『ホルモンに對抗する精神分析』(一般精神醫療雜誌、五卷一號、一九二八年)參照。

もし第二の夫に依つて滿足が得られると云ふならば、第一の夫たるはつらいことである。フランスの小説家モーリス(Maurice)の作『未知國、戀愛』の中に描かれてゐるやうに、妻が夫以外の男に依つて始めて味を知り、それ以後夫ともよくなつたと云ふやうな風には、現實では行かないやうである。

健康にして何もかも心得てゐる夫がその相手であると云ふことは、精神分析の治療效果が持續してあり得るためには必然的な豫想でなければならない。分析の間に夫が妻の身近に居て不斷に要求してゐると云ふことは有利なことではない。何となれば、失敗の反復せられることは患者を失望させることになるからである。

分析を完全に行つて見るならば、その結果は大部分の患者に於いて好調である。あまり香ばしい反響を示さない患者も時々あるが、それ等はフロイドの云ふやうに、體質的なもの、或は解剖的なものに依つて決定せられてゐるのであつて、この事は既に前に論及しておいた。我々の分析が成功した場合には、ホルモンのやうな藥物の支持を受けないのである。勿論多少の暗示や啓蒙の助力を借りることはあるが、その事は前に述べておいた。

最後に正直なところを云ふならば、婦人の冷感症を處置するにはやはり男子分析者が適任であると云ふことを匿す

わけに行かない。

處置は性交の成功を以て滿足すべきではない。無意識の事情が意識化せられ、幼兒期にまで發展の過程を辿つて行き、男性に對する心理態度が正常になるまでは、分析治療は未だ終りを告げたとは云ひ難い。まだ神經症者であつた當時は、その神經症的コムプレクスに基いて夫を擇んだと云ふ事實を如何に調節するかと云ふ問題は、勿論、なかなか完全には行かない。男性的な昇華傾向が屢々既存して、それが昇華機會を要求することは稀でない。

冷感症が神經症の部分的症候である場合には、治癒効果は根本神經症の治療効果に一致する。冷感症の治療は如何なる場合にも、神經症の成行に對しては好い影響を及ぼすばかりである。

×

性的冷感が分析法に依つて屢々治療可能なることの知られることは、婦人の氣分からその重苦しさを取去るものであらう。女性が性的に一見劣等なる如く思はれるけれども、そんな考へに固執することはない。從つて諦めて禁制を持續することはないのである。もし妻たり母たることが婦人にとつて獨身生活や自由戀愛など——これ等は根柢に於いて病的又は非社會的な心理態度を有してゐる——よりも愉快なものとなるならば、婦人に對する尊敬の念は多少高められるやうになるであらうことを吾人は信ずるものである。

『冷感症とその治療』終

附錄

處女性の問題

處女性の問題に就いて

エドムント・ベルグラー

小序

東京の『精神分析』雜誌編輯部から、精神分析學に興味を持つ日本の讀者のために處女性の問題に就いて一論を草するやうにとの光榮ある依囑を、こゝに喜びを以てお受けする。

處女性の問題に就いての分析學的文獻を通觀すると、驚いた事には、フロイドの有名な論文『處女性のタブー』以來、別にこれと云ふ本質的な觀察が公刊せられてゐない事を知るのである。幾千人の婦人患者の分析に當つて處女性の問題は又しても話題に上つたに相違ないに拘らず、さうしてあらゆる國々の幾百の分析者がその觀察したところを纒めてゐるに拘らず、何等これと云ふやうな新しいことが觀察せられてゐないと云ふことは瞠目すべきことである。

と云ふのはつまり、フロイドの發見したところが又しても確證せられるに過ぎず、既にそこに云ふべきことが云ひ盡されてゐると云ふことに外ならないのである。實は、處女性タブーの原因の發見は正に一つの「暗中射擊」であつたのだ。正にフロイドのこの論文に於いて、我々は常々如何に諸々の問題の解決が――もしそれを精神分析學父祖級の大才を以て企てる時には――偉大にして同時に簡單なものであるかを、又しても驚嘆するのである。

またわが尊敬する同學大槻憲二氏の書翰を受取り、處女性に就いて執筆してくれとの高囑に接した時の私の主觀的印象は、まづ第一にかうであつた。――「そこには何も云ふことは殘つてゐない。總て本質的なことは、實は既に一

九一四年にフロイドに依つて語られて了つてゐる」と。併しながら私は、貴誌編輯部が件の論文を主題に依つて一定の區分を與へるやうに要求してゐられるのだとも考へたからして、而も他方に私はフロイドの論旨を引用して同じやうなことを繰返す氣持には勿論ならないからして、自分の婦人患者に就いて處女性の心理に關する限りも一度探索して見るために、彼等を内的に調べて見ることに決心したのである。ところが私は二三の――あまり重大ならぬことかも知れないが――補説を加へることは可能であるとの結論に到達したのである。と云ふのは、フロイド自身並びにその學徒たちに依つて一九一四年以來爲されて來た種々の進歩は、處女性の問題に關してはこれを逸してゐるがために猶更さうであるのだ。

一、男根定着期に於ける處女性問題の心理的上部構造

まづ第一に云つておかねばならない事は、フロイドの大論文では男根期に關係づけてあることである。卽ち、處女の無意識に於いては、エディポス時代からペニス願望が動的に働いてゐて、そのために彼女等は處女膜の破却を二度目の去勢と感ずると云ふのである。この想像せられたる去勢は彼女等がその夫への無意識的な復讐反應を呼覺すことになる。そこで多くの民族に於いて初夜權の行使がその將來の夫たるべき男に委ねられずして、或る方面に於いては老婦人等に依つて道具を以て破瓜が行はれ、或る方面に於いては僧侶叉は父代償等に依つて直接的に、行使せられたと云ふ事も成程と首肯せられるのである。かくすることに依つて夫たちはその妻君等の無意識的憎惡に對して無意識的に自己防衛をしたのである。多くの女が第一の結婚に於いてうまく行かなくても第二の結婚に於いてうまく行くと云ふことをフロイドは取擧げてゐるが、この事實も右の見解に依つて說明がつくのである。想像せられたる去勢の故の憎惡反應は、第一の男に依つて解消してゐるのである。更にそれを證明するものは處女性を喪失した女の夢である。それ等の夢に於いて、去勢願望が明白に夫に向けられてゐる。

フロイドの論旨をもつと精しく知りたい方々はその原文をお讀みになるがよろしい。が、幸にしてフロイドの日本

文翻譯者たる同學大槻憲二氏の大業に依つて、この部分は實は既に日本語に譯せられてある。日本譯第九卷中にそれは包含せられてゐる。

ところがさてこゝにまづ問題になるのは、無意識的に發動せられる處女たちの憎惡の危險あるに拘らず、この處女性なるものに特別の價値を置く男たちが存在するかと云ふことである。或はその價値が彼等の無意識動機となり得るかと云ふことである。女の無意識中に破瓜者に對する嗜虐的な調子の心理的結合が保有せられるやうになるからだとフロイドはその論文中で論じてゐるが、成程この役割を强調することは至當である。フロイドはそれに就いてかう云つてゐる。「文明の程度がもつと高くなると、從屬の見込みがなくなることの危險(處女の攻擊慾)をあまり重要視しなくなるのである。女の方から進んで來ること、その他の諸動機の危險をあまり重要視しなくなるのである。」と。ところでこゝに云ふ「その他の諸動機」とは如何なるものを云ふのであるか。

社會學的契機及び社會的契機が確にそこに地方的な交互的役割を果たし、種々の文化圏內に於いて種々の意義を持つたことであらうと思ふ。私は斷つておくが、私の論旨はたゞヨーロッパ及び北部アメリカの患者の資料にのみ關係があるのである。確に合理的な動機もそこに働いてゐる。例へば、子供がわが子であると云ふことを確めることも一つの役割を果してゐる。(「父親は常に不確かである」とのラテンの諺あり。)併しながらこれ等の合理的動機は非合理的動機に對して必ずしも決定的ではない。現に種々な合理的理由(妊娠や責任加重の不安、已むなく結婚しなければならない不安、金を捲上げられる不安など)の下に於いて、處女に對して何事をも仕ようとはせぬ一群の男子達がゐるからである。實際に於いて、これ等の男たちの無意識に於いては、非合理的なものに基礎を置いてゐる破瓜不安が潜在してゐるのである。不能症に關する拙著(ベルン、一九三七年發行)に於いて次の如き一節がある。――

破瓜時の不能。 ヒステリー型の性能力の特別の條件は、性對象が必ずしも處女たるを要しないと云ふことである。破瓜に對する男の恐怖には種々な無意識動機があり得る。

自己の攻擊慾に對する不安。 ワギナを突破つて肛門との間に通路を作るとの無意識空想を發見することがある。

罪惡感の解消。破瓜者にはそれだけの責任がある。

流血に對する神經症的畏怖。母に對する幼兒的加虐願望の抑壓せられてゐたものゝ復活。

以上總ては、フロイドが擧げてゐる女の復讐慾に對する不安とは別物である。卽ち女達が破瓜を第二の去勢として自尊心の傷害として考へ、そのために彼女等は男に對して復讐慾を持つのである。

これ等の男たちの述べるところには特徴がある。彼等はその愛人選擇に際して不思議に常に困ることがあるのである。彼等はその經驗に依り、處女に對しては自分等の不能であることを知つてゐるので、努めてこれを避けようとしてゐるに拘らず、常にそれに打つかるのである。それは勿論、彼等にとつて齒の立たない處女等をその對象として無意識的に求めてゐると云ふことなのである。(四六頁)

私はこのやうな型を、ヒステリー的性能力障害に於ける「特殊的諸條件」の條下に入れる。「特殊的諸條件」と私が云ふのは、一聯の「不可缺的諸條件」("Conditiones sine quibus non")のことであつて、これ等の諸條件は多くの神經症者がコイトスに際し、又は愛人選擇に際して持ち出すところであり、これ等は非常に固着的で拔きさしならぬものであつて、この條件さへ協へられてあるならばいつでも性能力はあるに拘らず、人格の行動の半徑が漸次狹められると、性能力の障害が云々せられるやうになる。

性對象として「絕對的」に處女でなければならないと云ふ人々を更に分析的に調べて見ると、また別の決定要素がそこに働いてゐることが分るのである。そこに三つの型が區別せられることを、私は發見する。

(一)　比較の不安

この群の神經症者たちは、性的經驗ある女を恐れるあまり處女の許に逃げて來るのである。何となれば經驗ある女たちは以前の愛の對象と現在の自分とを比較することが出來るからである。これ等の神經症者たちは自分の弱力を、時に能力あり時に無力になることを承知してゐるが故に、無經驗な處女を選擇することに依つてこの不確實さを蔽はんとするのである。

(二) 無意識的同性愛への防禦

この群の神經症者はまた、强い無意識的な同性愛傾向から逃避しようとするものである。經驗ある一切の女たち(寡婦、出戻り女、「過去のある」娘)は、フロイドが始めて指摘した型の女(「男への懸橋としての女」)として、この群の神經症者等にとつては誘惑の危險あるものである。處女は、この種の神經症者等にとつては、「お前は女を求めてゐるのではなく、實は男を求めてゐるのだ」との無意識的な良心の批難を最も美事に反撃するものである。で、この場合、處女愛は無意識的な防禦機制として利用せられてあるのだ。

(三) 兩親のコイトスの否認

サドガーはそのヘッベル研究(一九一二年)の中で、早期にフロイドが認識したところに附加して、次の點に人々の注意を促してゐる。卽ち、兩親のコイトスを否定して母を無垢の處女として高めるのが幼兒期空想の一つの歸結である、と。經驗に依つてこの空想が確證せられるのである。よしんば正にその反對の事が——醜怪にと、特に附加しておいてもよからう——屢々起らうとも……。人々も知る通り、母は娼婦にまで引下げられるが、それは內的不安を節する目的のためであつて、さう云ふ女と交渉を持つことならば、多くの男にとつてもそれほど禁斷せられることゝは思はれないのである。

×

處女性の問題が人々の思想感情の中に於いて如何に生々と明白に現れてゐるかは、先頃の二篇の文藝作品に於いて指示せられると思ふ。それはハンガリーの小說家ラヨス・ヂラヒの『囚はれたる二人』、及び英國の作家アーサー・コールダー・マーシャルの『我等は昨日結婚した』の二篇であつて、これ等は共に、一九三七年ヴインのゾルナイ出版社からドイツ語譯本として公刊せられてゐる。ヂラヒの小說に於いては、處女の心理狀態が次のやうに描寫せられてゐる。その娘は新婚の夜の後に戀愛を感じて結婚したのであつた。——

長く深い眠りの後に、ミーテは眼を開けた。部屋の中は旣に明るくなつてゐた。面喰つて彼女は天井を見上げ

た。さうして自分は家にゐるのだらうと信じた。が、眠氣が彼女の眼頭から去つた時に、彼女の視線の落ちた個所は妙に見知らぬところに思はれた。徐ろに、さうして機械的に、彼女は部屋の天井の一點から他の點へと眼を移した。而も部屋全體を眺め廻すことを敢てし得なかつた。「一體、私は何處に居るのだらう？」と彼女は不安に滿ちて自問した。彼女の視線は今や壁面に落ちた。そこには箪笥の上に、金縁の鏡が前に傾いて掛かつてゐた。その斜めになつた鏡面には、自分の寢臺が垂直に立つてゐるのが見えた。窓の前には、暗赤色の帷がゆるやかな襞をなして垂れ下がつてゐた。陰氣な空には雲脚が迅く、その空は驚くほど近いやうに思はれた。寢臺はいつもよりは高く、さうして狹い小さなこの部屋に於いて總ては恐ろしく他所々々しいものに思はれた。安樂椅子の背の形、戸棚の錠前の眞鍮の金具、自分の寢臺の傍の敷物の色合ひ、箪笥の上の硝子の水容れと水吸み、……總てが何もかも夢のやうで、全然見なれぬもののやうであつた。やがて彼女は或る椅子の上に男の着物が掛けてあるのを氣付いた。椅子の背の上に氣をつけて掛けてある鼠色の服とチョッキとは一人の人間の胴のやうに見えた。彼女の傍の寢臺には見知らぬ男が眠つてゐた！　彼女のかッと見開いた眼には、彼女に襲ひかゝつたあらゆる事柄の記憶が錯綜して映つた。深い眠りのために彼女の思想の連鎖は斷切られてゐた。この狀態はたゞ二三瞬間續いたに過ぎなかつた。徐々に、彼女にとつてそれは新婚の夜であると云ふことが意識に上つて來た。彼女は自分が何處に居るかを、また自分の傍に寢てゐるのはペーターであることを旣に承知してゐた。彼女はも一つの寢臺を見遣つた。そこに彼は顏をあちらに向け、頭を深く枕に埋めて、そこに横たはつてゐた。彼の頭は枕の間から仄黑く際立つてゐた。彼の髮は鳶色の波となつて額の上に落ちかゝり、彼の頸筋は少年のそれのやうに可愛らしく見えた。彼女は痲醉したやうであつた。宵には黑い、甘い葡萄酒を飮んだのであつた。さうして今や彼女は頭の中に鈍い壓迫を感ずるのであつた。宛も、額の周りに鐵の輪をはめてゐるかのやうであつた。彼女は燒けるやうな渴きを覺えた。寢臺の上に起上つて手をコップの方にさし延べた。併し切るやうな苦痛が彼女を激しく貫いたので、彼女は水を呑むことを中止して、低い呻き聲と共にその唇を嚙んだ。「どうしたのだらう？」忽ち渴きはやんでしまつた。枕の方に戻つて、彼女は不安に滿ちて自分を觀察し始めた。彼女の意識は徐々に明度を增して行き、その記憶は漸次に再び生々として來た。さうだ、やつと彼女は想ひ出した。彼等は食堂で晩餐をとつたのであつた。彼等の向ひ側には空色の服を着

た太つた淑女と額の廣い紳士とが席をとつてゐた。その紳士は笑ふとその大きな黄色い齒が見えた。……總ては混亂してゐた。それを彼女は想起しようと努めた。晩餐の後に、彼女はペーターの腕に支へられて階段を昇つて來た。彼女は足元が危なかつた。頭の中では甘い重い葡萄酒が泡立つてゐた。燕尾服を着た一人の紳士が口笛を吹きながら階段の上を彼等の方に向つて來た。そこで彼女はその曲をもつと大きな音で口笛を鳴らした。「靜かにしてゐ給へ……」とペーターはやさしく彼女に囁いた。階段途中の踊り場には炬火を持つた青銅像が立つてゐた。その像の腕の恰好を彼女はよく覺えてゐた。腕の筋肉の上に光線が當つてゐた。彼等の傍を通りぬけて行くエレベーターの音を判然と聽いた。併し、自分たちが何階を登りつゝあるかは、彼女にはもう分らなかつた。も一度、彼女は燕尾服を着て口笛を吹いてゐた紳士のことを考へて見た。が、彼の樣子がどんなであつたか、大男であつたか小男であつたか、肥つてゐたか瘦せてゐたか、彼女は知らなかつた。大して重要でない、細々した點はあり〳〵と記憶に殘つてゐたが、併し重要な事柄に就いては彼女は一向覺えてゐなかつた。彼女が實際に經驗したことか夢想したことか少しも確かでないことがあつた。それから廊下！　また彼等が階段を登りきつた時長い廊下を彼女は見た。その廊下は、無限に續いてゐた。あちこちの扉の前には靴が生物のやうに並んでゐて、それが見張番をしてゐるやうであつた。その前を通り過ぎると、その靴が吠えつきさうであつた。……彼女は立ちすくんで男の肩に頭をもたれ掛けたことを想ひ起す。「どうしてこんなに澤山お酒を飲ませたの？」「今に寢床へ運びこんであげるから、さうすれば何もかもよくなるよ。」「あなた、私を愛してゐる？」「勿論、愛してゐるさ。」彼女はペーターの頸の周りに抱きついた。「私をとても愛してゐる？」「とても愛してゐるさ。」それから彼女はやがて部屋の中に這入り、ペーターが扉を內側から閉めたことを彼女は覺えてゐる。部屋の中ではたゞ簞笥の上に、大きな傘を被つたラムプが點つてゐるだけであつた。種々な彩取りに遮られた光線と深い煖い影とが家具の上に橫たはつてゐた。彼女はまた自分が微笑したことを知つてゐる。併しそれは生氣のない微笑で、たゞ口邊が妙に引きつつたに過ぎなかつた。彼女はそれを何とも遁れることは出來なかつた。他人に何かを唇のあたりにくつ付けられたやうな風であつた。彼女は銘酊してゐた。

今や淡黃色の朝の光の中に昨夜の出來事を冷靜に追想すると、おゝ、總ては何と混亂し、無意味なことであらう！　その後何が起きたかに思ひを廻らした時、彼女は喫驚して寢床に起き上つた。彼女は斜になつた鏡面を仰ぎ、そこに髮を振亂し、蒼白い顏をしてゐる自分自身を見出した。

さうしてあちこち引裂かれた布團からは馬の毛が嫌らしくはみ出してゐた。彼女の視線は鏡の額緣に落ちた。そこには空色の翼を持つた水蜻蛉が宛も金色の木の枝に止まつてゐるかのやうに留つてゐた。多分この蜻蛉は昨日既にこゝへ飛込み、一夜をこゝに閉込められてゐたのであらう。

さうして總てをこの冷酷な、白々とした朝の光の中に眺めると、宛も輕蔑的に事物を指示するかのやうであつた。見よ、これが現實である！　彼女はどつかとまた枕の中に倒れ、さうしてシク〳〵と泣いた。陰氣な、押しつけるやうな頭痛がし、刺すやうな獨特な感じが全身にして、そのために彼女は自分に起きたことを殘酷な目に會つたと感じたのであつた。

何となれば、この瞬間に於いてはペーターはその見知らなさに於いて正に憎惡に値するものと思はれたからである。一年前には會つたこともないし、世の中にゐると云ふことを知り

もしなかつたこの男、而もこの男が今や自分の上に所有權を發動させてゐる。一體この人間は誰なのか。彼女は苦痛のために心臟を引き締め、自分の處女性を奪つた男に對する女の原始本能を以て彼を憎んだ。「この人間は誰なのか？」と彼女はまた自問した。と、あらゆる血が彼女の心臟から消え失せるやうな感じがした。如何なる匿されたる缺陷が、如何なる精神上及び肉體上の缺點が、まだこれから彼に於いて現れることであらうか？　もしも毎日共通の生活を送つてそのため、彼女がお祭りの衣裳のやうに大切にし、それを愛だの、なさけだの、優しさだの、鄭重さだのと呼びならはして來たものが奪はれてしまふとしたら……？　如何なる邪惡な情熱が彼の心臟の中に匿されてゐて、それがやがて勃發しないと云へよう？　もし彼が實際には粗暴な、我慢のならない男で、或は堪え難いいやな習慣を持つてゐて、それをこれまで細心に隱してゐたのだとすれば、どうなるであらうか？　彼女がこれまで見聞した大抵の結婚がさま〴〵な形の不幸で破綻し、また彼女がこれまで讀んだ小說が人間の生活をすつかり粗暴なものとして描寫し、美しい衣裳や美しい言葉で匿してはゐるものゝ人間の魂は常にその粗笨さを露出させるものだと述べてゐるが、それは何處から來るのであらうか？　自分の傍にゐるこの男は何者であるか？　この男が自分の許に辿りつくまでに、何處をほつゝき歩いて來たことやら、どんな汚らはしいことを散々やつて來たことやら？　これからの毎日毎月毎年にどんな事が待受けてゐることやら？　子供を生むやうなことになれば、どんな思ひもよらぬ苦痛が自分の肉體を虐むことであらう？　どんなに痛ましい絕望が、どんな煩らはしさが、どんなに苦しい諦めが、自分の心臟をなほもくた〳〵にし、悲慘にすることであらう……？　それ等總てを知り、而も眼を閉いてぢつと見てゐなければならないとは……！　人生とは旣にさう云ふものであつた。而も自分の生活のみがその例外であると云ふ希望は殆どあり得ない。「どうして私には母さんがないのだらう？……」とて彼女の內に泣くものがあつた。忽ち彼女は、自分が甞てその母を知らないと云ふことが如何にも恐ろしいことに思はれて來た。心臟が苦痛と懷疑とに滿ち充ちてゐる時には、平常は最も深い底に眠つてゐることが眼醒めて來る。母親を持たないと云ふ思ひはたゞ彼女が最も苦しい時にのみミーテを苦めるのであつたが、その思ひが今や彼女の心臟を引裂くのであつた。

マーシャルの小說に於いては次のやうな狀勢が描かれてゐる。兩親の意志に反して戀愛結婚した若い二人が新婚の

夜の翌日に海邊にボートを泛べて遊び、大膽に沖合ひに漕ぎ出し、水游してゐる中に一本の橈を失くする。逆流のためにボートは片方の橈だけで、ジャブ〳〵やつてゐるのではなか〳〵その場から進まず、若い二人は一晝夜を海上に過ごし、遂に救はれるに至つた。この作品は新婚者の攻擊的な考へを頗る美事に描いてゐる。例へば、この小說の書き出しのところで、新郎は攻擊的な氣持からして損じたボートを借りるのであつた。そのわけはたゞ、そのボートの名が新婦の名と同じであつたからと云ふに過ぎないのであつた。——

澤山のボートはゴタ〳〵と叢がつて一本の鐵杭に繫いであつた。その內の一つに「エルザ」と云ふ名前のがあつた。「あれにしよう。」「いゝでせう。」と彼女は云つた。「併し隨分失禮しちやうわね。」その小舟は塗りも禿げてゐて可成り老んぼろであつた。

やがて新郎は何心なく沖の方へ漕ぎ出して行く。が、明かにそれは攻擊的な心持ちからである。妻は夫が水泳中にやり損ひのあつたことを攻擊的に喜び、彼の性器を襲擊することに依つて、復讐をするのであつた。

「水にお這入りなさい」と彼女は云つた。「私もついて這入るわ。」「ぢやア氣をつけてね。僕は先に船首のところから飛込むよ。」彼は匍匐上り、危く平均をとつてゐたが、均衡を失して腹からパシャッと落ちた。エルザは笑つた。その時、男は水面に浮び出て來たが頭髮が額に亂れかゝつてゐた。……ジョンは身を轉じて彼女の方へ泳いで來た。エルザはジョンが自分を引きづり込むのだらうと思つて、彼の方へ水をはねかけた。併し彼は水をはね返して、彼女の方へ戾つて來、その腕を捕へて自分に抱き寄せた。彼等は二人とも沈んだ。男の身體を自分の身體の傍に感じたので、彼女の防禦力はなくなつた。で、沈みさうな恐れがあつた。で、今や彼女は自由意志で沈んで行つた。男は彼女の肘を抱えた。と、水を通して彼の眼が見えた。その眼は彼女を非人間的な緊張を以て見つめてゐた。その時彼女は想像した、彼が自分を寢床の中で捕へた時、暗の中で見きわめたかも知れないと。彼は別人であつた——浪籍者であつた。彼女は怖氣をふるつた。口からブク〳〵と空氣が逆り出た。彼女は腕を解き離さうと試みた。さうして思はずその膝頭を上の方に、彼の局部に向つて突き上げた。男は彼女を離した。水泡が彼から立上つた。彼の頭は兩脚の間に沈んで行つた。エルザは彼からツト離れて上の方へあがき泳いだ。肺臟は呼

吸困難のために息苦しかつた。彼女は清鮮な空中に出で喘いだ。ジョンは昇つては來なかつた。彼のせいだ。……やがて彼は浮き上つて來た。さうして力なく水を搔いた。彼は赤黒い顏色をしてゐた。側面の頸動脈は膨れてゐた。彼は頸を締められたかのやうに、水に締めつけられたかのやうに、息がつまつてゐた。彼は喉を鳴らし、咳き込み、唾を吐いた。口をパク〳〵させながら眞赤な顏をしてゐる彼を見るのは滑稽だと云ふ感じを克服することは出來なかつた。……

なほ物語の筋を辿つて行くと、失はれたる橈は象徴的な意義を帶びてゐることが判然と分るし、なほそれは妻が無意識意圖的に失つたものだと云ふことが明かになる。妻の攻擊慾の下部構造が口唇的サディズムにあることは、妻が激昂して夫に嚙付くところによく表はれてゐる。

「お願ひだから默つてゐてくれないか!」とジョンは云つた。「僕が君を一番必要とする時に、僕に逆うのは如何にも君らしいよ。」それに對してエルザは答へる。「お乳であやすやうにすることが、あなたには必要なのね。乳離れするまでまさかそれぢやないでせうね。」

彼は片方の手で妻の口を押へ、他方の手で彼女の頂を抱えた。彼の指の爪が妻の肉に深く喰込んでゐた。さうして一切の身動きがならなかつた。エルザは顎骨を閉ぢて彼女を締めつけてゐる手の眞中に嚙付いた。「こん畜生!」と彼は叫んだ。さうして思はず手を唇のところに持つて行き、傷口を吸はうとした。血は滲んではゐなかつた。齒形はついてゐたが、血は流れてゐなかつた。エルザは夫に抱きつき、「御免なさいね、御免なさいね」と訴へた。數時間の後には、ジョンは自分が何かする度に妻が已れの父親の事を引合ひに出すので、詰つた。さうして馬鹿にするやうな調子でから云つた。「どうして君はパパさんと結婚しなかつたのだい? 今からでは、もう遲いぢやないか。」そこでまた喧嘩が始まつた。——

彼女は高く跳上り、片方の手でハンカチを摑み、他方の手で男の頭を摑んだ。彼は舵頭の席の上に倒れた。舟は搖いだ。エルザは片方の舷の上につかまつた。ジョンは後頭を船底の板敷に打ちつけた。エルザは喫驚して手を休めた。ジョンは怪我をしたのかしら? 「こん畜生!」と彼は喘いで、エルザの腕を骨の上までムヅと摑んだ。エ

ルザは身もだえし、手を振離さうとし、もうそれ以上口を利かせないために、ハンカチを男の口に押込んだ。ジョンはエルザを引倒し、すつかり自分の上に乘せるやうにした。エルザ倒れたまゝなるべく身體を重くして、ジョンが息の出來ないやうにしてやらうと思つた。ジョンはエルザの兩腕を左右ともに自分の身體に押しつけ、そのためにエルザは何とも防ぎがつかなくなつた。

二、性器前期的定着に於ける處女性問題の心理的上部構造

二度目に擧げた作家の描いてゐる神經症的婦人の反應の仕方——破瓜せられたる者の二度の嚙みつき——は自ら、性器前期的定着ある、或は心理的に退行してゐる婦人の處女性問題へと何の無理もなく移行して行くのである。大雜束に公式的な云ひ方をするならば、肛門性感的な婦人は無意識的にワギナと肛門とを同一化し、口唇的な婦人はワギナを口腔として考へる。このやうにして、性器前期的定着ある婦人が破瓜に對して反應する今一つの仕方は、ヒステリー婦人に於いて普通に見られるものとして我々は期待せざるを得なかつた。然るにその期待は事實に合した。たゞ我々はさう云ふ有様が孤立してゐるものと考へるには及ばないのである。性器前期的定着あるものにも男根期の强き痕跡が認められるのである。

まづ臨床的實例を擧げることにする。――或る强迫神經症の婦人が自分の破瓜に就いて述べたところに依ると、彼女は驚駭のあまりに不安を抱き、それ以後は大便を抑止することが出來ず、一生垂れ流しになつてゐるに相違ないと云ふ風な精神的傷害を受けた。破瓜はワギナに於いて受けたのであつて肛門に於いて受けたのではないと云つて反駁して見せても、彼女は依然、分析の際に於いてさへ、これを拒否して、「何れにせよ一緒です」と云ふのであつた。これに依つて見ると、この婦人患者腸管出産觀（ワギナと肛門との同一視）に無意識的に固執してゐることが分る。破瓜に際して彼女がその夫から「そんなに×××××ないで」と要求せられた時、彼女は驚いて、「でもさうしなければ粗さうをして蒲團を穢すだらう」と思つた。破瓜に際して寢床の敷布が×××れた時、彼女は自分で手づからそれを洗濯した。こんな「不潔」（大便を意味す）なことをして人々から笑はれるだらうと思つたからである。

その婦人患者は結婚後半年にして洗濯强迫症（それは彼女の思春期以來持ち越して居た傾向であつた）のために處置を受けに來たのであつたが、結婚後の數ヶ月、夫に對して激しい憤りと憎しみとを抱き、不斷にコイトスの要求を持出して彼を閉口させようと試みた。彼女は性器的なことには興味のないことを十分に意識してゐたが、「少くとも夫を惱ませなければならないから……」と云ふのであつた。弱い夫はやはりヒポコンドリー的な種々な病苦を始終卿つてゐたが、それの原因はコイトスのあまりに頻繁なるにあると彼自身考へてゐた。

この甚だ男性的な、惡意のある、極めて攻撃的な婦人は、破瓜又は月經と關聯して一つの興味ある症候を顯著に示した。彼女は月經を肛門から出るものゝ如く知覺し、それの殘りで夫に病毒を傳染させることがあるだらうと云ふ不安を持つてゐた。破瓜の流血に對して彼女は特別の不安を持つてゐた。これを彼女は特別に有害なものだと考へてゐた。彼女は自分の不安が馬鹿々々しいものだと云ふことを理窟の上では十分に分つてゐたに拘らず、而も本能感情的な根柢からして恐怖が又しても表面に出て來るのであつた。その無意識的願望はかうである。――私は夫を破瓜又は月經時の血に依つて傷害してやりたい……と。そこには更に次のやうな微妙な心理も存在してゐた。即ち、彼女がそんなに屢々コイトスを夫に求めたのは自分が夫を傷けてをらぬと云ふ確信を得たかつたからである。病毒感染の結果

は如何と云ふに、それはつまりペニスが腐つて脫落すると云ふ風に考へてゐたのである。婦人患者がそこに防禦の中に防禦せられたるもの（攻擊慾）を自ら秘かに包含せしめてゐることは、正に定石通りである。頻繁なるコイトスに依つて彼女は夫を困らせ、本質的な「休養」を求めてゐた彼にそれを許さなかつたのである。遂には、血に依つて傷害すると云ふ考への中に、夫と並んで患者自身が傷害せられると云ふ逆の想像が確に認められるやうになつた。

次に、吾々は口唇的な場合に移つて行く。男根期の殘痕が明かに見られない限りは、これ等の婦人は如何にも無頓着に破瓜と云ふことに對するもので、それは驚くばかりである。二三の實例を擧げるならば、口唇段階に退行してゐる或る婦人患者は「處女性の馬鹿げた重荷」（と云ふ言葉を彼女は用ゐたのだが）を背負ふに堪えずと或日決心をなし、從姉妹の紹介した赤の他人の男に破瓜せしめた。この「面白くもない行動」からして別にこれと云ふやうな心理上の痕跡は殘らなかつた。今一人の婦人は重い口唇性格的な神經症者で、且つ健康な道德心を持たないのがその特徴であつたが、彼女は十九歲の處女であつた。時々街上で、男から娼婦と見られ、ホテルに連れ込まれて金を支拂つた上でコイチーレンされた。彼女がその破瓜者に事の眞相を告げた時に、彼は腹の底から哄笑した。今一人の第三の婦人患者は、處女には興味がないと嘗て云つてゐた或る若い男に「惚込ん」だ。その後、彼女は自分よりも社會的地位の遙かに低い男に打込んだ。破瓜は彼女には「どうでもよい」事であつたのだ。結局、彼女はヒステリー發作を持つやうになつた。

これ等口唇性格者たちが性器の事に關して何故にこのやうに甚だしく無頓着であるかと云ふに、それは彼女等が無意識心理內に於いてワギナをワギナとして知覺して居らず、心理上これに口唇としての意義を固執してゐるからである。これ等の婦人患者たちの神經症的不安からして、それを確立することが出來る。最後に擧げた婦人患者はコイトスの後にいつもその相手たる男友等に向ひ、ワギナで怪我はなかつたかと尋ねるのを常としてゐた。これを分析して見て、彼女が母の乳房を吸ひ母に授乳せられてゐた時代からの自分自身の攻擊慾に對して防禦心理を持つてゐたことが分つたのである。彼女は自分の口で乳房を嚙まうと欲したが故に、ワギナ（＝口）がペニス（＝乳房）を傷けるで

あらうと考へたのである。* 我等はこゝに於いて、性器に於けるコイトス事情と口唇に於ける哺乳時代とが同一視せられてゐるのを見るのである。

註* わが國の大話（昔から民話中にある大人向きのいさゝか下品な――と云ふ事は科學的意義には關係がない――話）の内に、結婚の夜夫妻とも相手の局所に爪があり齒が生えてゐると信じて、互に恐怖し合ふと云ふのがある。かゝる民話の成立の民俗心理學的根據はやはり右のやうな無意識的なワギナ口唇同一視と攻擊慾とに歸せねばなるまい。（譯者）

口唇段階に定着ある婦人に於いて亢奮の中心をなすのはやはり、ワギナでもなければクリトリスでもなく、尿道口である。多くの場合に於いて諸々の關係が如何に錯綜してゐるかは、それ等の婦人患者の一人を擧げてそのコイトスの樣子を記述して見れば分る。彼女は絕對的に冷感症的で、大抵の場合背後で交り、ペニスに對しては全く無感覺であつて、コイトスの中途××××××を達しに行くことが屢々だと云ふわけである。オルガスムスに達することはあるが、それはたゞ尿道口を××したり、××を押付けたりすることに依つてゞある。これを分析して見ると、ペニスに對して無感覺なのは一方に於いては、ワギナ＝口、及びペニス＝乳房の同一視に於ける攻擊的衝動の防禦であり、他方に於いて、コイトスの間に屢々尿意を催すと云ふことは自己支配（自給自足）の一つの標徵である。卽ち、私は母の乳房を必要としない、私自身にも尿道や膀胱があるから乳房のあるやうなものだ、つまり私は母親がお乳をくれなくても一人で結構間に合つてゐる、と。（乳＝尿。）

×

そこで吾人は、心理の世界が處女性の問題に就いても、男根期に於いて終るものではないと云ふことを知る。退行の段階が深ければ深いほど、心理的關係は錯雜を極めてゐる。それに就いては、婦人に關しても、この心理層の闡明は今日に於いてはなほ未だ十分に完成せられてはゐず、謎の解明を待つものがなほ多々ある。心理現象は無限に複雜微妙なものであるから、今後幾代の分析者にとつても十分に活動の餘地や可能性のあるものであることが保證せられるのである。（完）

――大槻憲二譯――

譯者附記——ドイツの有名な民謠に『野中のバラ』と云ふのがある。邦譯では「童は見たり、野中のバラ、手折らば手折れ思ひ出草に、君を刺さむ、紅匂ふ、野中のバラ」となつてゐるが、原文はもつと複雜である。「野バラは、我を手折る君が永久に我を忘れないために刺すのだ。さうすれば惱みはない」と云ふが、「併し如何に嘆いてもせん方はなく、やはり彼女は惱まなければならなかつた」と云ふやうな意味が歌ひ込んである。處女性のタブー、處女性破爪者への女の憎惡、男女の調停し難い相互の怨みなどが單純な言葉の內に自然に表現せられてゐる。

Wir sehen demnach: die psychische Welt hört auch beim Virginitätsproblem nicht bei der phallischen Stufe auf. Je tiefer die Regressionsstufe, desto komplizierter die psychischen Verhältnisse. Dabei ist gerade beim Weibe die Aufhellung dieser Schichten heute noch keineswegs völlig gesichert und harrt vielfach der Enträtselung. Die unerschöpfliche Mannigfaltigkeit psychischen Geschehens garantiert auch dem uns folgenden Generationen von Analytikern genügende Betätigungsmöglichkeiten.

———:o:———

tiert wurde. Als sie dem Deflorator die Wahrheit sagte, brach er in herzliches Lachen aus. Eine dritte Patientin wieder „verliebte“ sich in einen jungen Mann, der einmal sagte, Jungfrauen interessierten ihn nicht. Daraufhin gab sie sich einem sozial tief unter ihr stehenden Manne hin: die Defloration war „gleichgültig“, am Schluß bekam sie einen hysterischen Anfall.

Das Desinteressement dieser Oralen ist bezüglich des Genitales deshalb so groß, weil sie die Vagina innerlich nicht als Vagina perzipieren, sondern an der psychologischen Mundbedeutung derselben festhalten. Das ist aus den neurotischen Ängsten dieser Patientinnen feststellbar: die letztgenannte Kranke fragte fast regelmäßig ihren Freund nach dem Koitus, ob er sich in der Vagina *verletzt* hätte. Die Analyse ergab, daß sie eigene aggressive Tendenzen aus der Zeit: säugende Mutter — saugendes Kind abwehrte. Da *sie* mit ihrem Mund die Brust beißen wollte, meinte sie, die Vagina (=Mund) werde den Penis (= Brust) verletzen (*M. Klein*). Wir sehen hier die Identifizierung der genitalen Koitussituation mit der *oralen* Babyzeit.

Hier ergeben sich komplizierte Zusammenhänge mit Vaginismus, der in manchen Fällen nicht bloß phallische, sondern auch orale Zuflüsse hat.

Das Zentrum der Erregung bei *oralen* Frauen ist übrigens weder die Vagina noch die Klitoris, sondern die *Harnröhrenmündung*. Wie kompliziert in manchen Fällen die Verhältnisse liegen, zeigt die bloße Beschreibung des Koitus einer solchen Kranken: sie war absolut frigid, verkehrte meistens a tergo, war für den Penis völlig anästhetisch, unterbrach häufig den Koitus, um urinieren zu können. Zum Orgasmus kam sie bloß durch Massierung der Harnröhrenmündung, resp. durch Zusammenpressen der Schenkel. Die Analyse ergab, daß das Nicht-Fühlen des Penis einerseits eine Abwehr aggressiver Impulse in der Identifizierung Vagina = Mund, Penis = Brust darstellte. Andererseits war das häufige Urinieren während des Koitus ein Zeichen der Autarkie: ich brauche die mütterliche Brust nicht, habe in der Harnblase selbst eine, ich bin also von der versagenden Mutter unabhängig. (Milch = Urin).

soll wenigstens der Mann leiden". Der schwächliche Mann beklagte sich auch dauernd über eine Reihe hypochondrischer Beschwerden, als deren Ursache er den allzuhäufigen Verkehr ansah.

Bezeichnenderweise produzierte die sehr männliche, bösartige und überaus aggressive Frau ein interessantes Symptom im Zusammenhang mit der Defloration, resp. Menstruation. Sie hatte die *Angst, sie könnte durch Reste der anal perzipierten Menstruationsblutung den Mann mit Lues infizieren. Besondere Angst* hatte sie vor der *Deflorationsblutung.* Diese sah sie als besonders schädigend an. Obwohl sie rational genau über das Unsinnige ihrer Angst aufgeklärt war, kam aus affektiven Gründen die Befürchtung immer wieder an die Oberfläche. Der unbewußte Wunsch lautete: ich will den Mann durch das Blut bei der Defloration, resp. Menstruation schädigen. Es ergab sich sogar der abstruse Tatbesand, daß sie den Koitus auch deshalb so häufig vom Mann verlangte, weil sie sich überzeugen wollte, den Mann *nicht* geschädigt zu haben; die Folge der Lues-Infektion stellte sie sich nämlich so vor, als würde der Penis abfaulen. Wie dies typisch ist, schmuggelte die Patientin natürlich in die Abwehr das Abgewehrte, die Aggression, ein: mit dem häufigen Koitus quälte sie den Mann, der im Wesentlichen „Ruhe" haben wollte. Endlich war in der Schädigungsidee mittels Blut auch eine Umkehrung der supponierten Schädigung der Patientin seitens des Mannes feststellbar.

Gehen wir *oralen* Fällen über. Es ist auffallend, mit welcher inneren Gleichgültigkeit diese Frauen — soweit nicht Reste der phallischen Stufe nachweisbar sind — der Defloration gegenüberstehen. Einige Beispiele: eine oral regredierende Patientin beschloß eines Tages, nicht mehr die „lächerliche Bürde der Virginität" zu tragen (ipsissima verba) und ließ sich von einem wildfremden Mann, den ihr eine Cousine zuführte, deflorieren. Nachweisbare psychische Spuren blieben von diesem „langweiligen Akt" nicht zurück. Eine andere Frau mit schwerer oraler Charakterneurose und Zügen von Moral insanity benahm sich als neunzehnjähriges Mädchen derart auffallend auf der Straße, daß sie von einem Mann als Prostituierte angesehen, in ein Hotel mitgenommen und dort als Dirne gegen Bezahlung koi-

ersten Mal. Plötzlich fiel sie nach vorn auf ihn nieder, ihre Hände zogen ihn an sich. „Liebling“ stöhnte sie schluchzend, „was hab ich getan? Vergib mir, vergib mir......“

II. Der psychische Überbau des Virginitätsproblems bei prägenitaler Fixierung.

Die Art der Reaktion der neurotischen Frau, die der letztzitierte Schriftsteller schildert — zweimaliges *Beißen* des Deflorators — bildet einen zwanglosen Übergang zur Virginitätsproblematik prägenital fixierter oder regredierter Frauen. Grob schematisiert könnte man sagen: die anale Frau faßt unbewußt die Vagina als *Anus*, die orale Frau die Vagina als *Mund* auf. Also müßte man eine andere Reaktion prägenital fixierter Frauen auf die Defloration als die bei Hysterikerinnen übliche erwarten. Die Erwartung trifft tatsächlich zu, nur darf man sich das Bild nicht isoliert vorstellen. Auch bei Prägenitalen sind starke Spuren von Phallizität nachweisbar.

Ich beginne mit einem klinischen Beispiel: Eine zwangsneurotische Frau erzählte von ihrer Defloration, sie hätte die entsetzliche Angst gehabt, sie werde dabei innerlich derart beschädigt werden, daß sie in der Folge den Stuhl nicht mehr werde zurückhalten können und für ihr übriges Leben incontinent bleiben müsse. Den Einwand, daß sich die Defloration in der Vagina und nicht im Anus abspiele, lehnte sie noch in der Analyse ab: „all das gehört zusammen“. Wir sehen also, daß die Patientin an der Kloakentheorie festhielt. Als sie bei der Defloration vom Mann aufgefordert wurde, „unten nicht so zu pressen“, dachte sie erschreckt: „wenn ich nicht presse, werde ich das Bett mit Stuhl beschmutzen“. Als bei der Defloration das Bettlaken mit Blut beschmutzt wurde, wusch sie es eigenhändig aus mit der Begründung, die Leute würden sie wegen ihrer „Unreinlichkeit“ (sie meinte Faeces) auslachen.

Die Patientin — sie kam nach halbjähriger Ehe wegen eines Waschzwangs, der seit der Pubertät persistierte, in Behandlung — war in den folgenden Monaten voller Wut und Haß gegen den Mann und versuchte ihn durch ständige Koitusforderungen zu schädigen. Ganz bewußt war ihr, daß sie genital völlig desinteressiert war: „da

digsten brauche." Darauf Elsa: „An der Brust aufgepäppelt werden, das täte dir not. Bis zur Entwöhnung bringst du's überhaupt nicht."

Er preßte ihr die eine Hand auf den Mund und packte sie mit der andern im Genick. Seine Finger krallten sich ihr tief ins Fleisch und machten jede Bewegung unmöglich. Sie schloß die Kinnladen und *biß zu*. Mitten in die Hand, die sie knebelte. Er schrie auf: „Du Vieh!" und fuhr unwillkürlich mit der Hand an die Lippen, um an der Wunde zu saugen. Blutig war sie nicht. Er spürte den Abdruck ihrer Zähne, aber es floß kein Blut. Sie legte den Arm um ihn und klagte: „Verzeih, Liebling. Bitte, verzeih!"

Einige Stunden später wirft John seiner Frau vor, sie messe ständig alle seine Handlungen an ihrem Vater, und fragt sie höhnisch: „*Warum hast du denn nicht deinen Papa geheiratet, solange Gelegenheit dazu war?*" Es entspinnt sich wieder ein Kampf:

Sie sprang in die Höhe, packte das Handtuch mit der einen und seinen Hals mit der anderen Hand. Er fiel auf die Ruderbank zurück. Das Boot schwankte. Sie stürzte zur Seite gegen den Bordrand. Sein Hinterkopf schlug auf den Kielbrettern auf. Sie hielt erschrocken inne: hatte er sich vielleicht verletzt? „Du Vieh!" keuchte er und packte ihre Arme dicht über den Knöcheln. Sie sträubte sich, wollte loskommen und *stopfte ihm das Handtuch in den Mund*, um ihn nicht weitersprechen zu lassen. Um ihm den Mund zu stopfen, daß er schwieg. Er zog sie herunter, ganz über sich. Sie machte sich im Niederfallen so schwer wie möglich und hoffte, ihn dadurch außer Atem zu bringen. Er preßte ihre Arme links und rechts an seinen Leib, so daß sie wehrlos war.

Johns Haut sah weiß aus, ganz weiß, dort wo der Hemdkragen verrutscht war, gegen die Schulter zu. *Sie neigte sich vor und biß ihn am Hals ins Fleisch*, so stark sie nur konnte. Er schrie auf und ließ ihre Handgelenke los. Die Zähne saßen fest im Fleisch. Sein Körper war steif vor Anspannung, das Gesicht verzerrt vor Schmerz. Er mühte sich ab, einen Arm hochzubekommen, um ihr einen Schlag zu versetzen. Die Zähne lösten sich aus dem Biß; der Kopf fuhr zurück; Augen starrten hinab auf die tiefen Kerben im Fleisch, die sich stellenweise mit Blut füllten. Sie strich mit der Zunge über die Lippen. Verspürte Blutgeschmack im Mund. Er wandte keinen Blick von ihr. Sie sah seine starren Augen, die dreinblickten, als sahen sie zum

Dann rudert der Ehemann sinnloserweise weit hinaus, wieder offenbar aus Aggression. Die Frau revanchiert sich, indem sie sich über das Mißgeschick des Mannes beim Baden aggressiv freut und ihn dann *am Genitale verletzt.*

„Geh ins Wasser", sagte sie. „Ich komme dir nach." „Also gib acht. Ich will vorn beim Bug hineinspringen." Er kletterte hinauf, balancierte unter Gefahr, verlor das Gleichgewicht und fiel klatschend auf den Bauch. Elsa lachte, als er in die Höhe kam, das Haar wirr über der Stirn...... John kehrte um und schwamm ihr entgegen. Sie glaubte, er würde sie tauchen und spritzte nach ihm. Aber er spritzte zurück, kam an sie heran, fing sie bei den Armen und preßte sie an sich. Sie versanken beide zusammen, ihre Gegenwehr schwand, weil sie seinen Körper an dem ihren fühlte. Sie hatte sich vorm Tauchen gefürchtet; und jetzt ließ sie sich freiwillig sinken, seine Hände hielten ihre Ellbogen umklammert. Dann öffnete sie die Augen und sah seine Augen durchs Wasser hindurch, die sie anstarrten mit einer unpersönlichen Spannung. *So, stellte sie sich vor, mochte er in der Finsternis ausgesehen haben, im Bett, als er sie nahm.* Er war ein anderer Mensch — ein Toller. *Furcht packte sie.* Glucksend quoll ihr die Luft aus dem Mund. Sie versuchte die Arme loszuwinden *und stieß unwillkürlich mit ihrem Knie nach oben gegen sein Geschlecht.* Er ließ sie los, Luftblasen stiegen von ihm auf, der Kopf sank ihm zwischen die Beine. Sie stieß ab und schwamm mühsam aufwärts, die Lungen zersprengt von Atemnot. Sie keuchte in der frischen Luft. John kam nicht herauf. Seine Schuld...... Dann tauchte er auf und platschte matt. Sein Gesicht war dunkelrot, die seitlichen Halsadern angeschwollen. Er würgte, als wäre er gedrosselt worden — gedrosselt vom Wasser. Er gluckste, hustete, spuckte. *Sie konnte das Gefühl nicht verwinden, daß es komisch war,* wie er aussah, japsend und rot im Gesicht......

Im weiteren Verlaufe der Handlung zeigt sich deutlich, daß das verlorene Ruder symbolische Bedeutung hat und offenbar durch die unbewußte Absicht der Frau verloren wurde. Der *orale Unterbau* der Aggression der Frau äußert sich darin, daß die Frau in ihrer Wut den Mann *beißt*:

„Schweig um Himmelswillen!" sagte John. „Es sieht dir ähnlich, daß du dich gegen mich stellst im Augenblick, da ich dich am notwen-

sorgsam geheimhielt? Woher kam es, daß die meisten Ehen, die sie kannte, at den verschiedensten Formen des Unglücklichsein zerfielen und daß die meisten Romane, die sie gelesen hatte, das menschliche Leben in seiner ganzen Kraßheit schildern und unter schönen Kleidern und hinter schönen Worten die menschliche Seele stets in ihrer Roheit zum Vorschein kommt? Wer war dieser Mensch neben ihr, wo hatte er sich herumgetrieben, mit was für Schmutz war er in Berührung gekommen, bevor er zu ihr gelangt ist? Was harrte ihrer in den kommenden Tagen, Monaten und Jahren? Was für unbekannte Qualen würden ihren Leib zerwühlen, wenn sie ein Kind zur Welt bringen sollte? Was für bittere Enttäuschungen, was für Kompromisse und schwere Entsagungen werden ihr Herz noch zermürben und elend machen......? All das zu wissen und dem mit offenen Augen entgegenzusehen......! So ist schon das Leben und es gibt keine Hoffnung, daß gerade das ihrige eine Ausnahme bilden sollte. „Warum habe ich keine Mutter?!......" weinte es in ihr. Es fiel ihr plötzlich ein, wie furchtbar es sei, daß sie nie eine Mutter gekannt hatte. Wenn ein Herz von Schmerz und Verzweiflung übervoll ist, dann wird auch wach, was sonst auf tiefstem Grunde schlummert. Der Gedanke, mutterlos zu sein, der Miette nur in schwersten Stunden schmerzte, zerriß ihr jetzt das Herz.

In *Marshalls* Roman wird folgende Situation geschildert: ein jungvermähltes Paar, das *aus Liebe* gegen den Willen der Eltern geheiratet hat, macht am Tage nach der Hochzeitsnacht einen Bootausflug am Meeresufer, wagt sich weit von der Küste weg in die See hinaus und verliert beim Baden ein Ruder. Infolge der Gegenströmung kommt das Boot durch bloßes Paddeln mit einem Ruder nicht von der Stelle und die jungen Leute verbringen einen Tag und eine Nacht auf offener See, ehe sie gerettet werden. Der Roman schildert meisterhaft die aggressiven Gedanken der Jung-Vermählten. So beginnt z.B. der Roman damit, daß der Ehemann aus Aggression ein beschädigtes Boot mietet, offenbar bloß deshalb, weil es den gleichen Namen trägt, wie die Ehefrau:

Die Boote waren, förmlich büschelweise, an Eisenhaken befestigt. Eines hieß ‚Elsa'. „Das nehmen wir." „Gut", sagte sie, „aber ein Kompliment ist es nicht". Der Kahn war schäbig und ziemlich altersschwach.

erblickte sich in der geneigten Spiegelfläche, wie sie mit zerzaustem Harr bleich im Bett saß, ihr dünnes Seidenhemd war ihn von der Schulter geglitten und wie Papier zerknittert. Auf ihrer Schulter war ein nußgroßer roter Fleck, von dem sie nicht wußte, wovon er herrührte. Und wie sie um sich herumblickte, sah sie die Spuren des nächtlichen Erlebnisses auf dem zerwühlten Bett. Das Leintuch war ganz zerdrückt und verschoben, so daß die alte dunkelrote Matratze sichtbar war und das Roßhaar aus dem an manchen Stellen geplatzten Stoff in widerwärtiger Weise herauschaute. Ihr Blick fiel auf den Spiegelrahmen, wo eine Libelle mit blauen Flügeln wie auf einem goldenen Baumstamm saß. Vielleicht war sie schon gestern ins Zimmer geflogen und so in Gefangenschaft geraten. Sie bemerkte, daß unter der anderen Bettdecke ein Fuß von Peter bis zum Knöchel vorschaute, wie ein *lebloser Körperteil*, der zu niemandem gehörte, lag er da. Und all das in dieser grausamen grauen Morgenbeleuchtung, die höhnisch wie mit Fingern auf die Dinge hinzuweisen schien: Siehe! das ist die Wirklichkeit! Sie fiel in die Kissen zurück und weinte leise. Der dumpfe bedrückende Schmerz in ihrem Kopf und das stechende, eigentümliche Gefühl in ihrem Körper ließen es sie *grauenvoll empfinden*, was mit ihr geschehen war.

Warum war sie jetzt hier? In einem fremden Land, einem fremden Hotel......und im Bett neben sich einen fremden schlafenden Mann! Ein fremder Mann, ja, ein fremder Mann, denn *in diesem Augenblick erschien ihr Peter hassenswert in seiner Fremdheit.* Wer ist dieser Mensch, den sie vor einem Jahr nicht einmal gekannt hat, von dem sie nicht wußte, daß er auf der Welt sei und der jetzt so von ihr Besitz ergriffen hat? Ihr Herz zog sich vor Schmerz zusammen und sie *haßte ihn mit dem Urinstinkt des Weibes, das sich gegen den Mann auflehnt, der es der Jungfräulichkeit beraubt hat.* „Wer ist dieser Mensch?“ fragte sie sich wieder und hatte das Gefühl, als wiche alles Blut aus ihrem Herzen. Was für verborgene Fehler, was für körperliche und seelische Mängel werden bei ihm noch aufscheinen, wenn der Alltag ihr gemeinsames Leben dessen berauben wird, was sie noch wie ein Festgewand trugen und Liebe, Zärtlichkeit, Zartgefühl und Höflichkeit hieß? Was für dunkle Leidenschaften mochten sich in seinem Herzen verbergen, die einmal hervorbrechen könnten? Wie würde es sein, wenn er in Wirklichkeit grob und unerträglich wäre oder wenn er widerliche abstoßende Gewohnheiten hätte, die er bisher

Stockwerk sie gestiegen waren, das wußte sie schon nicht mehr. Wieder dachte sie an den pfeifenden Herrn im Frack, sah genau die Form seines brillantenen Hemdknopfes vor sich, doch wie er aussah, ob groß oder klein, ob er dick oder dünn war, wußte sie nicht. Unbedeutende Einzelheiten waren ihr mit haarscharfer Deutlichkeit im Gedächtnis geblieben, an wichtige Dinge aber erinnerte sie sich überhaupt nicht. Dabei gab es Dinge, von denen sie nicht einmal sicher war, ob sie sie wirklich erlebt oder nur geträumt hatte. Und der Korridor! Auch einen langen Korridor hatte sie gesehen, als sie hinaufgingen. Und er hatte kein Ende, vor den Türen standen Schuhe wie Lebewesen und schienen Wache zu halten. Sicher bellten sie einen an, wenn man vorbeiging......Sie erineerte sich, daß sie stehengeblieben war und den Kopf auf seine Schulter sinken ließ. „Warum hast du mich so viel Wein trinken lassen?“ „Ich bringe dich gleich ins Bett und es wird alles wieder gut sein.“ „Du hast mich lieb?“ „Natürlich habe ich dich lieb!“ Sie umschlang Peters Hals. „Hast du mich sehr lieb?“ „Sehr lieb!“ Auch daran erinnerte sie sich, sie dann ins Zimmer gegangen waren und Peter die Türe von innen zugesperrt hatte. Im Zimmer brannte nur über der Kommode eine Lampe mit einem großen Schirm. Bunte gedämpfte Lichter und tiefe warme Schatten lagen auf den Möbeln. Sie wußte auch, daß sie gelächelt hatte, es aber ein lebloses Lächeln war, das ihre Mundwinkel gewaltsam verzerrte. Sie konnte es nicht loswerden, es war so wie wenn ein fremdes Ding an ihren Lippen klebte. Sie war betrunken. Sie saß am Bettrand, konnte den Kopf nicht mehr aufrecht halten und ließ die Füße hinunterbaumeln. Peter kniete vor ihr und löste ihre Schuhbänder. Sie hörte noch seine Stimme: „Gib mir dein Füßchen, nicht dieses, das andere“. Sie fiel angekleidet aufs Bett zurück, schwang die Arme und summte eine Tanzmelodie. „Setz dich schön auf, ich will dir die Bluse aufknöpfen!“ „Warum hast du mich nicht lieb?“ „Ich habe dich lieb, aber setz dich auf!“ Und da sie sich nicht rührte, legte Peter sie zart von einer Seite auf die andere, bis er sie entkleidet hatte. „Du...... wirst mich jetzt sehen?“ „Keine Spur! ...... ich mache die Augen zu und schaue nicht hin. Also setz dich schön auf!“

Oh wie verworren und unsinnig war alles, als sie jetzt, im fahlen Morgenlicht, ernüchtert an die Geschehnisse zurückdachte! Ekel würgte sie und sie verabscheute sich selbst. Erschrocken setzte sie sich im Bette auf bei dem Gedanken, was weiter geschehen war. Sie

ihrem Bett, die Wassergläser und Wasserflasche auf der Kommode...... alles, alles war traumhaft und erschreckend fremd. Dann bemerkte sie, daß auf einem Sessel Männerkleider lagen. Der sorgfältig über die Rückenlehne gehängte graue Rock und die Weste sahen aus wie der Rumpf eines Menschen. — *In dem Bett neben ihr schlief ein fremder Mann!* In ihren weit aufgerissenen Augen spiegelten sich verworren die Erinnerungen an all das, was auf sie eingestürmt war. Der tiefe Schlaf hatte die Kette ihrer Gedanken unterbrochen. Dieser Zustand dauerte bloß einige Augenblicke. Langsam kam es ihr zu Bewußtsein, daß dies ihre Brautnacht gewesen war. Sie wußte schon, wo sie sich befand und daß es Peter war, der neben ihr schlief. Sie schaute auf das andere Bett, wo er mit abgewendetem Gesicht, den Kopf tief in die Kissen versenkt, dalag. Sein Kopf zeichnete sich dunkel vom Kissen ab, seine Haare fielen in braunen glänzenden Wellen über die Stirne und sein Nacken sah so lieb aus wie der eines kleinen Jungen. Schwer und langsam kamen Miette wieder die Gedanken. Sie war wie betäubt. Am Abend hatte sie einen dunklen süßen Wein getrunken und jetzt spürte sie im Kopf einen dumpfen Druck, als hätte sie einen eisernen Reifen um die Stirne. Sie fühlte einen brennenden Durst, setzte sich im Bett auf und streckte ihre Hand nach dem Wasserglas aus, aber ein schneidender Schmerz durchzuckte sie so heftig, daß sie in ihrer Bewegung innehielt und sich mit einem leisen Stöhnen in die Oberlippe biß. „Was war das?“ Plötzlich war ihr der Durst vergangen. Sie sank zurück in die Kissen und begann, sich angsterfüllt selbst zu beobachten. Ihr Bewußtsein wurde langsam klarer und ihre Erinnerungen allmählich wieder lebendig. Ja, jetzt erinnerte sie sich! Sie hatten im Speisesaal soupiert, ihnen gegenüber saß eine dicke Dame in blauem Kleide und ein Herr mit hoher Stirne, der beim Lachen seine großen gelben Zähne zeigte......Alles war so wirr, woran sie sich zu erinnern versuchte! Nach dem Abendessen war sie, auf Peters Arm gestützt, die Treppen hinaufgegangen, sie konnte sich kaum schleppen, in ihrem Kopf brauste es vom süßen, schweren Wein. Ein Herr im Frack kam ihnen pfeifend auf der Treppe entgegen, und sie pfiff die Melodie laut weiter. „Sei still, mein Engel......“, flüsterte ihr Peter zärtlich zu. Beim Treppenabsatz stand eine fackeltragende Bronzefigur, an deren Armhaltung sie sich genau erinnerte. Auf den Armmuskeln spiegelte sich das Licht. Deutlich hörte sie das Geräusch des Aufzuges, der gerade an ihnen vorbeifuhr. Aber in welches

3) Verleugnung des elterlichen Koitus.

Sadger hat im Anschlnß an *Freuds* frühe Erkenntnisse in seiner Hebbel-Arbeit 1912 darauf aufmerksam gemacht, daß es eine der Resultanten der kindlichen Phantasie sein könne, den sexuellen Verkehr der Eltern derart zu verleugnen, daß die Mutter zur unberührten Jungfrau avanciere. Die Erfahrung bestätigt diese Annahme, wenn auch — fast könnte man hinzufügen: groteskerweise — häufig gerade das Gegenteil vorkommt: die bekannte Herabsetzung der Mutter zur Dirne zum Zwecke der inneren *Angstersparnis*: wenn viele Männer mit der Mutter Umgang haben, ist es scheinbar doch nicht so verboten.

Wie lebendig und unerledigt das Virginitätsproblem im Denken und Fühlen der Menschen ist, will ich an zwei literarischen Produkten der letzten Monate zeigen, an den Romanen des Ungarn Lajos *Zilahy* „Zwei Gefangen" und des Engländers Arthur Calder-*Marshall* „Wir haben gestern geheiratet" (beide in deutscher Übersetzung im Zsolnay-Verlag Wien 1937 erschienen). In *Zilahys* Roman findet sich folgende Schilderung des Seelenzustandes der jungen Frau, *die aus Liebe geheiratet hatte,* nach der Hochzeitsnacht:

> Nach langem und tiefem Schlaf öffnete Miette die Augen. Im Zimmer war es schon hell. Verwirrt schaute sie zur Decke empor und glaubte, sie wäre zu Hause. Doch als der Schlaf von ihren Augen wich, kam ihr die Stelle, auf die sie blickte, eigentümlich fremd vor. Langsam und mechanisch schaute sie von einem Punkt der Zimmerdecke zum andern, ohne es zu wagen, sich im ganzen Zimmer umzusehen. „Wo bin ich denn?" fragte sie sich angsterfüllt. Ihr Blick fiel nun auf die Wand gegenüber, wo über einer Kommode ein goldgerahmter Spiegel vorgeneigt aufgehängt war. In seiner schiefen Spiegelfläche sah sie ihr Bett senkrecht stehen. Vor dem Fenster hing ein dunkelroter Vorhang in weichen Falten herab. Der trübe Himmel, über den rasch die Walken zogen, schien auffallend nah. Das Bett war ungewöhnlich hoch und in dem engen kleinen Zimmer sah alles so erschreckend fremd aus. Die Form der Sessellehnen, die Messingbeschläge am Schloß des Schrankes, die Farbe des Teppichs neben

Bezeichnend ist die Angabe dieser Männer, daß sie „sonderbarerweise“ bei ihrer Liebeswahl ständig „Pech“ haben und, trotzdem sie den Virgines ausweichen — die Erfahrung hat sie ja gelehrt, daß sie bei diesen impotent sind —, ständig auf solche stoßen. Es handelt sich natürlich um ein *unbewußtes* Suchen der für sie unerreichbaren Virgo als Objekt. (S. 46 ff.)

Ich führte diesen Typus unter „Spezifische Bedingungen“ bei hysterischen Potenzstörungen an. Unter „Spezifischen Bedingungen“ verstand ich eine Reihe von „conditiones sine quibus non“, die von manchen Neurotikern beim Koitus, bezw. bei der Liebeswahl gestellt werden und die so starr und unelastisch sind, daß trotz bestehender Potenz beim Festhalten an diesen Bedingungen, infolge weitgehender Einengung des Aktionsradius der Persönlichkeit von einer Potenzstörung gesprochen werden kann.

Weitere Determinanten ergeben sich, wenn man sich die „absoluten“ Anhänger der Virginität als Sexualobjekt analytisch näher ansieht. Ich finde, daß drei Typen sich sondern lassen.

1) Angst vor Vergleichen.

Diese Gruppe von Neurotikern flüchtet zur Virgo, weil sie fürchtet, die erfahrene Frau könnte Vergleiche mit früheren Liebesobjekten anstellen. Diese Neurotiker wissen um ihre schwache oder launische Potenz und bemänteln diese Unsicherheit durch die Wahl der unerfahrenen Virgo.

2) Abwehr der unbewußten Homosexualität.

Diese Gruppe von Neurotikern ist wieder auf der Flucht vor starken unbewußten homosexuellen Tendenzen. Jede erfahrene Frau (Witwe, geschiedene Frau, Mädchen mit „Vergangenheit“) ist für sie eine Verlockungsgefahr nach dem bekannten von *Freud* erstmalig aufgezeigten Typus „Frau als Brücke zum Mann“. Die Virgo erscheint diesen Neurotikern unbewußt als gelungenste Widerlegung des unbewußten Gewissensvorwurfs: „Du suchst gar nicht die Frau, sondern den Mann“. Hier wird also die Virgo als unbewußter Abwehrmechanismus verwendet.

Arbeit *Freuds* wird mit Recht die Rolle betont, die die psychische Bindung masochistischer Tönung gerade dem Deflorator im Unbewußten des Weibes reserviert. *Freud* sagt: „Auf höheren Stufen ist die Schätzung dieser Gefahr (Aggression der Virgo. D. Verf.) gegen die Verheißung der Hörigkeit und gewiß auch gegen *andere Motive* und Verlockungen zurückgetreten; die *Virginität wird als Gut betrachtet*, auf welches der Mann nicht verzichten will". Welches sind nun diese anderen Motive?

Soziologische und soziale Momente spielen dabei gewiß eine regional wechselnde Rolle und dürften in verschiedenen Kulturkreisen verschiedene Bedeutung haben — ich betone, daß meine Ausführungen sich lediglich auf europäisches und nordamerikanisches Patientenmaterial beziehen. Gewiß spielen rationale Motive, wie Gewißheit bezüglich der Nachkommenschaft, eine Rolle (Pater semper incertus). Doch sind diese rationalen Motive gegenüber den irrationalen keineswegs entscheidend, da es eine große Gruppe von Männern gibt, die unter verschiedenen Rationalisierungen mit Virgines nichts zu schaffen haben will. (Angst vor Schwängerung, größerer Verantwortung, Angst zur Ehe gezwungen zu werden, vor Erpressung etc.) In Wirklichkeit kann man im Unbewußten dieser Männer eine latente Angst vor der Defloration finden, die *irrational* begründet ist. In meinem Buch über Impotenz (Medizinischer Verlag Huber, Bern 1937) findet sich darüber folgende Stelle:

> *Impotenz bei der Defloration.* Die spezifische Bedingung der Potenz bei diesem (hysterischen) Typus lautet: das Sexualobjekt darf *keine* Jungfrau sein. Die Angst des Mannes vor der Defloration kann verschiedene unbewußte Ursachen haben:
>
> *Angst vor der eigenen Aggression*: man findet unbewußte Phantasien des Durchstoßens der Vagina und Herstellung einer Kommunikation mit dem After;
>
> *Schuldgefühlsentlastung*: die „Verantwortung" hat der Deflorator;
>
> *Neurotische Blutscheu*: Wiederholung verdrängter infantiler sadistischer Wünsche auf die Mutter;
>
> all dies natürlich neben der von *Freud* hervorgehobenen unbewußten Angst vor der Rache des Weibes, das die Defloration als neuerliche Kastration und narbißtische Kränkung auffaßt.

seits begreiflicherweise keine bloße Wiedergabe der zitierten Ausführungen *Freuds* bringen wollte, entschloß ich mich, in einer inneren Revue meine weiblichen Patienten passieren zu lassen, um sie quoad Psychologie der Virginität nochmals zu untersuchen. Ich kam zum Resultat, daß einige — wahrscheinlich unwichtige — Ergänzungen immerhin möglich seien; dies umsomehr, als vielfach die Fortschritte, die *Freud* selbst und seinen Schülern seit 1914 zu verdanken sind, in die Virginitätsfrage noch nicht eingebaut sind.

I. Der psychische Überbau des Virginitätsproblems bei phallischer Fixierung.

Vorerst: die großartigen Ausführungen *Freuds* beziehen sich auf die *phallische* Stufe: im Unbewußten der Virgo sei aus der Ödipuszeit der Peniswunsch dynamisch wirksam und deshalb empfinde sie die Zerstörung des Hymens als neuerliche Kastration. Diese supponierte Kastration führe zu unbewußten Rachereaktionen der Virgo gegen den Mann. So sei es erklärlich, daß viele Völker die Entjungferung nicht durch den Ehemann, sondern teils instrumentell von alten Frauen, teils unmittelbar von Priestern oder sonstigen Vaterimagines vornehmen lassen. Dadurch schütze sich der Mann unbewußt gegen den unbewußten Haß des Weibes. Dafür spricht auch die von *Freud* hervorgehobene Tatsache, daß zweite Ehen bei manchen Frauen besser sind als die erste: die Haßreaktion wegen der supponierten Kastration habe sich am ersten Objekt erschöpft. Ein weiterer Beweis seien die Träume entjungferter Frauen: sie zeigen deutliche Kastrationswünsche gerichtet gegen den Ehemann.

Nähere Details der Ausführungen *Freuds* müssen im Original nachgelesen werden. Dank der imponierenden Arbeitsleistung des japanischen Freud-Übersetzers, des Kollegen *Kenji Ohtski*, liegt ja dieser Teil bereits ins Japanische übersetzt vor: im IX. Band der japanischen Ausgabe ist er enthalten.

Hier ergibt sich vorerst das Problem, weshalb bei Bestehen der Gefahr der unbewußt motivierten Aggression der Virgo, es *trotzdem* Männer gibt, die auf die Virginität der Frau Wert legen, resp. welches die unbewußten Motive dieser Männer sein mögen. In der

Beiträge zum Problem der Virginität

von

DR. EDMUND BERGLER

Assistent am Wiener Psychoanalytischen Ambulatorium

Mit Vergnügen komme ich der ehrenvollen Aufforderung der Redaktion der Tokyoer „Zeitschrift für Psychoanalyse“ nach, einen Beitrag zum Problem der Virginität für japanische, an der Analyse interessierte Leser zu schreiben.

Überblickt man die analytische Literatur zum Problem der Virginität, so fällt auf, daß seit der berühmten Untersuchung *Freuds* über „Das Tabu der Virginität“ keine weiteren wesentlichen Beobachtungen publiziert wurden. Das ist bemerkenswert: obwohl in vielen Tausenden von Analysen weiblicher Patienten immer auch das Problem der Virginität zur Sprache kommen *mußte*, ist offenbar nichts Neues beobachtet worden, obwohl Hunderte von Analytikern aus aller Herren Ländern die Beobachtungen kontrollierten. Das heißt: *Freuds* Befund wurde immer wieder verifiziert und offenbar für erschöpfend angesehen. Tatsächlich war gerade die Aufdeckung der Ursachen des Tabus der Virginität ein „Schuß ins Schwarze“. Gerade bei dieser Arbeit *Freuds* sehen wir immer wieder mit staunender Bewunderung, wie groß und einfach zugleich die Lösung von Problemen ist — wenn sie eben ein Genie vom Range des Gründers der Psychoanalyse unternimmt.

Auch mein subjektiver Eindruck beim Erhalt des Briefes des hochgeschätzten Kollegen *Kenji Ohtski*, der u. A. die Aufforderung enthielt, über Virginität zu schreiben, war vorerst: „Darüber gibt es nichts mehr zu sagen, alles Wesentliche hat ja bereits *Freud* 1914 gesagt“. Da ich aber annahm, daß die Redaktion den Aufsatz in einer bestimmten Gruppierung von Themen benötigte und ich ander-

處女性の問題

(ドイツ語原文)

昭和十四年五月一日印　刷
昭和十四年五月五日發　行
昭和十四年六月五日印　刷
昭和十四年六月十日再版發行

冷感症とその治療　　¥ 1.80

著者　大槻憲二
發行所　大槻憲二
東京精神分析學研究所出版部代表
東京市本郷區駒込動坂町三二七
印刷者　松村保
東京市神田區西神田一ノ四

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七
振替・東京七八八一七番　東京精神分析學研究所

取次店　東京堂・東海堂・大東館・北隆館
栗田書店・大阪屋號書店・福音社

東京精神分析學研究所出版部

出版書及び取次書

振替東京七八八一七番
本郷區駒込動坂町三二七

岩倉具榮譯　理想の家族（マンスフイールド短篇集）　定價一圓八十錢（送料十錢）

岩倉具榮譯　太陽（D・H・ロレンス傑作集）　定價一圓（送料十錢）

長谷川誠也著　國語國字及び文學の心理研究（四六版布裝）　定價二圓（送料十錢）

平塚義角譯　ドストイェフスキーの精神分析（ノイフェルド原著）　定價一圓（送料十錢）

本研究所編　阿部定の精神分析的診斷（肖像、筆蹟、傳記付）　定價五十錢（送料六錢）

宮田戌子・大槻憲二共著　一茶の精神分析（箱入紙裝・四六版）　定價二圓五十錢（送料十錢）

延島英一譯　ナポレオンの精神分析（イェーケルス原著）　定價一圓五十錢（送料十錢）

北山隆著　夏目漱石の精神分析（四六版・箱入美本）　定價二圓（送料十錢）

長崎文治著　肉體的異常現象の心理及び生理（菊版）　定價五十錢（送料三錢）

大槻憲二著　精神分析概論（四六版・紙裝・第六版）　定價一圓二十錢（送料九錢）

大槻憲二著　精神分析讀本（四六版・三百頁・挿圖豊富）　定價二圓（送料十錢）

大槻憲二著　精神分析・社會生活法（四六版・第六版）　定價一圓二十錢（送料十錢）

大槻憲二著　精神分析・新らしき立身道（箱入四六版・第四版）　定價一圓三十錢（送料十錢）

大槻憲二著　現代日本の社會分析（布裝箱入・四六版）　定價二圓三十錢（送料十錢）

大槻憲二著　分析家の手帖（箱入紙裝・四六版）　定價一圓八十錢（送料十錢）

大槻憲二著　精神分析雜稿（四六版）　定價一圓五十錢（送料十錢）

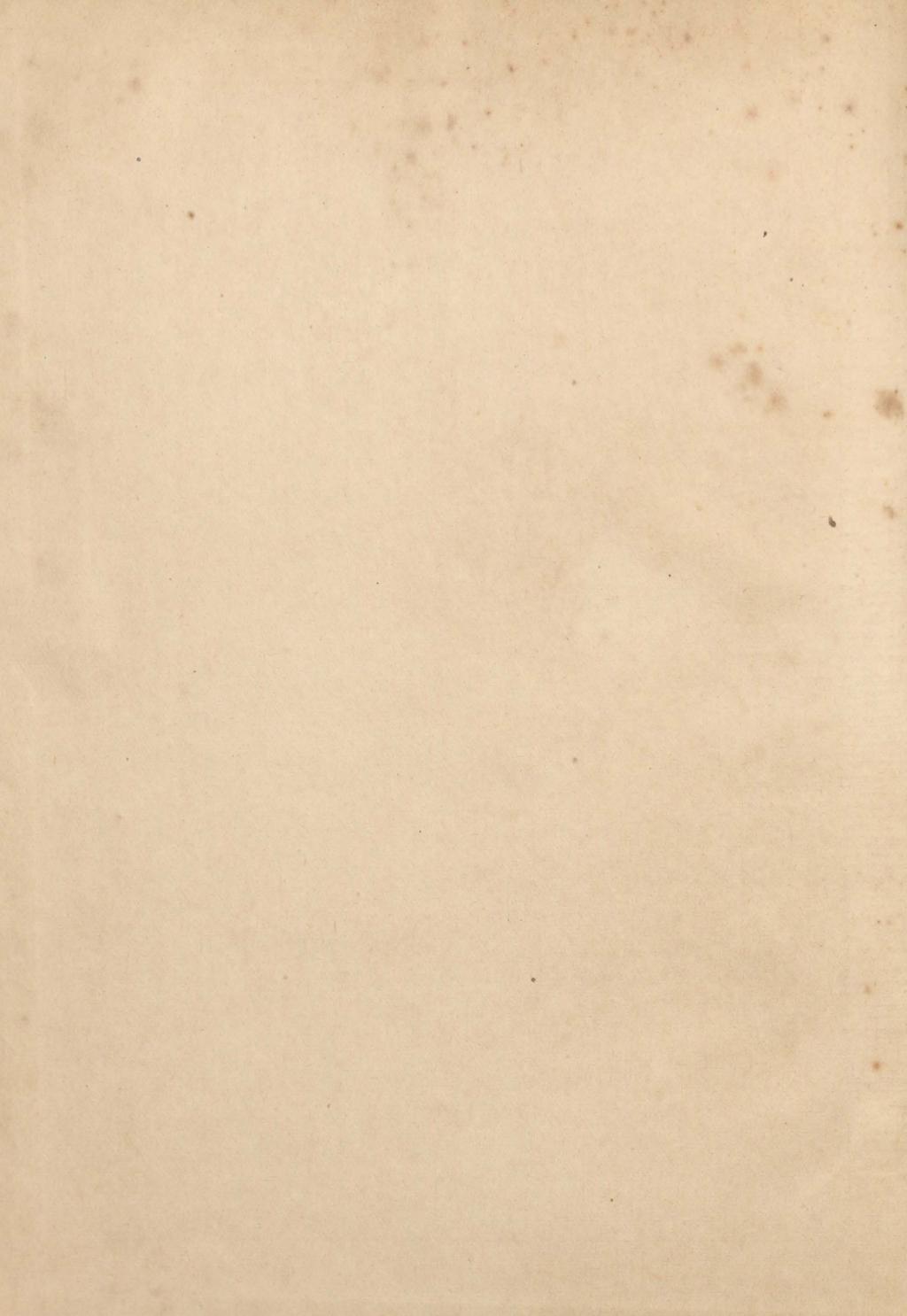
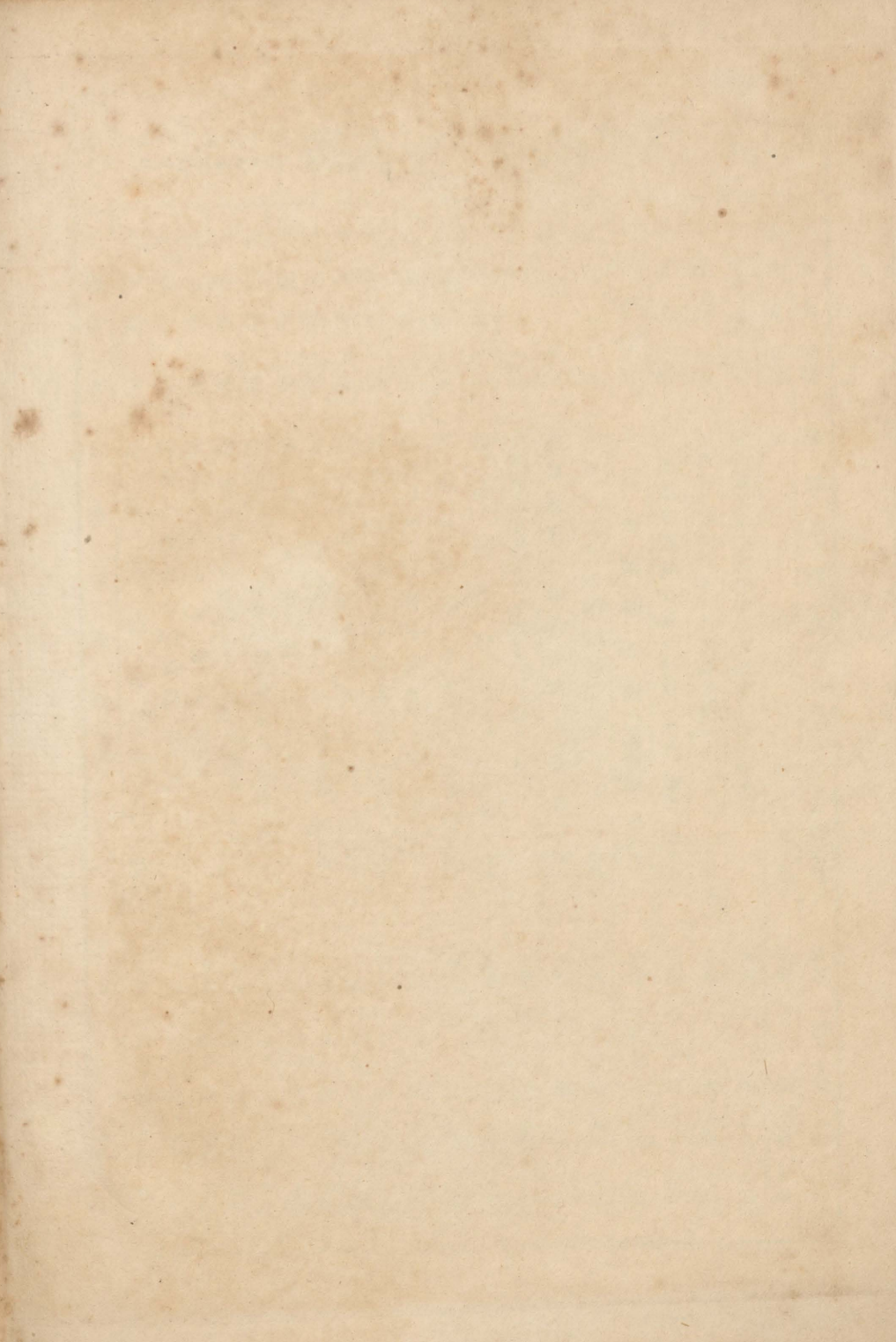
大槻憲二著　戀愛性慾の心理とその分析處置法（菊版・四版）　定價二圓八十錢（送料十四錢）

大槻憲二著　續・戀愛性慾の心理とその分析處置法（菊版）　定價三圓八十錢（送料十四錢）

大槻憲二著　世界人と日本人（四六版）　定價一圓七十錢（送料九錢）

大槻憲二著　經濟心理と心理經濟（四六版）　定價一圓八十錢（送料十錢）

大槻憲二著　性格改造法（四六版・三八〇頁・再版）　定價二圓五十錢（送料十錢）

大槻憲二著　育兒と教育（近刊）　定價　（送料　錢）

Die Geschlechtskälte der Frau

Ihr Wesen und ihre Behandlung

von

Dr. Eduard Hitschmann und Dr. Edmund Bergler

übersetzt von

Kenji Ohtski und Rikitaro Takamizu

冷感症とその治療

東京精神分析學研究所版